特務捜査官ゲイル＆サム～俺たちは英雄じゃない

五月雨拳人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特務捜査官ゲイル＆サム～俺たちは英雄じゃない

【Ｎコード】
Ｎ８２２２Ｙ

【作者名】
五月雨拳人

【あらすじ】
ゲイルは宇宙連邦治安維持局（ピースメイカー）の特務捜査官である。
宇宙連邦治安維持局とは、宇宙連邦治安維持法に則り「個人で所有するには強力過ぎる知識、技術、能力またはそれによって産出された物」を取り締まる機関である。
ゲイルは今日も相棒のサポートメカ、サムとともに宇宙狭しと駆け巡る。

1（前書き）

ＳＦ（少し不思議）とご了承いただければ幸いです。

1

鬱蒼とした森の中に、不自然な獣道がある。
踏み折られた草や、へし折られた木々が作る道が延々とまっすぐに伸びている。それはまるで、巨大な何かがただまっすぐ進みたいというだけで、草木の存在などに歯牙にもかけず進んだという感じだった。
大人二人が両手を伸ばしてやっと抱えられほどの木が、右や左に折られている。さらに太い樹木は、幹が折れる前に根が耐え切れずに根元から倒れている。
つまりこの獣道を作った何かは、木々をまるで草をかき分けるような容易さでなぎ払って行ったのだ。
どのようなものが通れば、こんな獣道ができるのだろう。どれだけ巨大で、そして強力なら、こんなにも無造作に森の中に道を作れるのだろう。
地面には、何かとてつもない重量のものを引きずった跡が続いていた。

◆

めきめきと音を立てて、木が倒れる。
幹に手を添え、軽く横に払うだけで木が倒れる。
ゲイルは、黙々と森林を開拓していく相棒――サムの広い背中をぼんやりと眺めていた。
三メートルの巨体を全身くまなく金属板で包んだサムの、直線的な凹凸のある背中は、ところどころ銀色の塗装が剥がれていた。ゲイルは、次は別の色にサムを塗ってみようかと考えるが他の色を塗ってもしっくりこない気がした。何よりこの無骨で実直な、脳味噌まで金属でできている相棒が、赤や黄色などの派手な色に染まっている姿はとても想像できなかった。
結局ゲイルはサムのカラーチェンジを諦め、塗装の剥がれた箇所

を線で繋いで絵を描く作業を脳内で始めた。
この森に入ってから何時間、ゲイルはサムの後ろを歩いているだろうか。サムがせっせと道を作ってくれるおかげで、彼は森を平地のように何の苦労もなく歩くことができる。照りつける陽射しは強いが木陰に入れば涼しいし、森特有の湿度の高さも気にならない。これなら宇宙戦闘服（スーツ）の体温調節（エアコン）機能を切って、電池を節約できる。どう考えてもこの近辺に充電ができるような設備はないので、これはありがたいことだ。
だったら最初から歩きにくい森に入らず街道や平地を歩けばいいのだが、そもそもサムがどうしてこんな無益な森林伐採をしているかというと、ゲイルが原因であった。

「おい見ろよ。森だぜ森、むしろ森林？　あれ？　森と森林ってどっちが強いんだ？　いや、そんな事はどうでもいい。こうなったらフィトンチッドとマイナスイオンを過剰吸引して、疲れた心と体を強制リフレッシュするしかねえ！」
森を見るや否や、ゲイルは意味不明な事を喚きながら意気揚々と中に入っていった。だが一時間ほどで「飽きた」だの「疲れた、腹減った」だの言い出して歩くのを放棄したのだ。
サムが来た道を戻ろうと提案すると、同じ道を歩くのをゲイルは嫌がった。
ではこのまま進むしかないと言うと、今度は歩きにくいから嫌だと首を振る。
ならおぶろうかと提案すると、恥ずかしいからやめろと拒否をする。
地面に座り込み、不貞腐れるゲイル。子供のように駄々をこねる相棒に、サムの機械仕掛けの脳にノイズが走る。だがそのノイズはあまりにも日常的な出来事なので、サムにとってはエラーでも何でもない。相棒のわがままに対応するのは、彼にとってもはやプログラムされたルーチンワークと同じ事になっていた。

子育てに慣れた母親と同じ感覚とでも言うのだろうか。サムはいつものように、ゲイルに問いかける。何が気に入らないのか。どうすればお気に召すのか。

ゲイルはあれこれと不平を並べ立てたが、簡潔にまとめると「木が邪魔で歩きにくい」という傍若無人なものだった。

サムはゲイルをなだめすかして先を急ごうと促すが、彼は頑とし動かず、挙句の果てには「道がないなら作ればいいじゃないか」などと、是正ない子供か頭の悪い貴族のような事を言い出した。サムが無益な環境破壊だと諭したが、一向に聞き入れない。一度駄々をこねたらテコでも動かないだろう。

そしてサムはこのままでは任務に支障が出ると判断し、わがままな相棒のために仕方なく実行に移した。手で草木を払い、足で土を平らに踏み固める。一トンもの体重で踏み固めれた地面は、舗装されたように歩きやすく、どんどん視界が開けていく森の姿に、ゲイルの機嫌はようやく直ったかに見えた。

だがそれも長く続かず、今ゲイルの興味はサムの背中の塗装が剥げた部分に注がれているのであった。

振り返る事も手を休める事もなく、サムがゲイルに問いかける。

「ゲイル、気がついていますか？」

「はあ？」

いきなり声をかけられたので、ゲイルは意味が解からず素っ頓狂な声を上げた。

「気づいたかって、何にだよ？」

「我々がこの森に入ってから、まだ一匹も生物を目撃していません」

「お前がバキバキ木をへし折ってるから、ビビって隠れているだけじゃねーのか？」

「確かにその可能性はあります。けれどこれだけ木を倒して、鳥の一羽も羽ばたかないのはいささか不自然ではないでしょうか？」

言われてみれば確かにそうだ。普通森の中でこれだけ木を倒せば、鳥たちが喚きながら飛び立って逃げるだろう。小動物が怯えて隠れているのは当然だとしても、大型の獣がこの広大な森で一匹も発見できないのは明らかに不自然だ。

それにサムは、闇雲に木を倒していたわけではない。進行方向に複数のスキャンをかけ、小動物や鳥が隠れていないか、巣がないかと吟味した木だけを倒していたのだ。もちろん木を倒す方向も計算している。

「妙だな……。まさか俺たちのせいで、みんな逃げ出したんじゃねえだろうな？」

「いいえ、そうではありません」

「どういう事だ？」

「この森にはすでに、我々よりも厄介なモノが存在しているようです」

サムが巨木をなぎ倒すと、視界が一気に開けた。

二人は、森を抜けたと見間違う場所に出た。

だがすぐにそれは違うと理解できたのは、目の前の光景が自分たちの背後と同じだったからだ。

へし折られた木々。踏み折られた草に固められた地面。サムがゲイルのために作った道と、同じ景色が広がっていた。

違う点があるとすれば、それは木々がでたらめな方向に倒れていることだ。例えるなら、邪魔だから無造作に払ったとでもいう感じだ。中には圧倒的な質量で押し潰されたような形跡もある。

この道の創造主は、ただ自分が進みたい方向に木があったから倒したのだろう。まるで草をかき分ける感覚で。

道は森の南から北上し、西に向けて折れ曲がっている。西に方向転換する角の部分に、二人が東から来た道がぶつかったのだ。

「おいおい、この森にはお前のオヤジが住んでるのか？」

ゲイルがサムの前に出て、森の中にぽっかりと開いたトンネルの

中に立つ。道の幅は、サムが作った道の倍以上あった。
「倒れている木の断面がまだ新しいですね。鉢合わせしなくて幸運でした」
「だな。こんな小山のようなバケモンの相手なんて、頼まれたってしたくねえぜ」
ゲイルは倒れた樹木をぺちぺちと叩きながら軽口を叩くが、いつものキレがなかった。木には恐竜が引っ掻いたような爪跡が四本走っており、幹の太さはサムの胴体よりもさらに二周りは太い。
「まだこの近くにいるようですね。遭遇すると面倒なので、もう少し時間をおいてから――」
「どうした？」
言葉を途中で止めたサムに、ゲイルが声をかける。だがすぐに彼が自分には感知できない何かを察知していると判断し、様子を窺う。ゲイルには何も聞こえなかったが、サムの聴覚はゲイルとはできが違うのだ。
「ゲイル、悲鳴です」
「何だ……そんな事かよ。それで？」
あっさりとゲイルは聞き流し、少しの間沈黙が流れる。その間サムはじっとゲイルを見ていた。
「な、何だよその目は……？」
「いえ、助けに行かないのかな、と」
またサムの悪い癖が始まった、とゲイルは思った。いつもの事ながら、相棒の人の良さにはほとほと呆れる。どうしてこのむくつけき金属の塊は、やたらと余計なお節介をしたがるのだろうか。自分たちには、余計な事に首を突っ込んでいる暇などないというのに。
「どうせ原住民のガキだろ？　ほっとけほっとけ」
小指で耳をほじりながらゲイルは言う。だがサムもなかなか強情で、一歩も引かなかった。
「どうして貴方は、いつもそう薄情なのです。少しは困っている人を助けようとは思わないのですか？」

「思わないね。知ってるか？　情けは人の為ならずと言って、無闇に手助けをすると、そいつのためにならないんだよ」
「それは誤った解釈のほうです。正しくは、人に情けをかけると、結局は自分を助ける事に繋がるという意味です。貴方こそ、因果応報という言葉を知っていますか？」
「し、知ってるよ、銀河万丈くらい……」
「まったく全然違います。耳と脳は大丈夫ですか？」
「うるせえっ！　御託ばっか並べやがって。ちょっと辞書が丸々頭に入ってるからって、調子に乗るんじゃねえぞ！」
間違いを指摘されて逆ギレするゲイルに、サムはさらに追い討ちをかける。
「ははあ、さては怖いんですね？　そうならそうと、素直に言ったらどうですか？　いいですよ、怖いなら無理に助けに行かなくても」
「何だとこの野郎。上等だ、行ってやろうじゃねえか！　悲鳴がしたのはどっちだ！？」
「三時の方向です。距離は――」
「こっちか！」
サムが言い終わるよりも早く、ゲイルは竜巻が通った後のような森のトンネルを疾走していた。
「まったく、いつもながら手のかかる……」
すでに見えなくなったゲイルの背中に向けて、サムが小さく声を漏らす。鉄仮面のような顔から表情は読み取れないが、どことなく微笑しているように見えた。

2

「いや、いや……来ないで！」

サーシャはくせのある長い赤毛を振り乱しながら、必死で石を投げる。だが腰が抜けて尻餅をついた状態で投げた石は、見当違いの方向に飛ぶか、届かずに虚しく地面に落ちる。

「この！　この！　あっち行け！」

後退りながら、サーシャは死に物狂いで石を投げる。石と一緒にむしった草が、少女の眼前で舞った。

少女の前では、昆虫の幼虫に無理矢理人間の上半身と蟻の頭部を繋ぎ合わせたような巨大な生物が、地響きのような唸り声を上げている。

緑色のぶよぶよとした虫の腹に、小石が虚しく弾かれた。蟻に似た顔面の顎から、じゅるじゅると粘液が涎のごとく垂れる。それが食欲を連想させ、サーシャの恐怖を増幅させた。

後退する少女の背が硬いものに当たる。慌てて振り返ると、土の壁が彼女の逃げ道を塞いでいた。

見上げるほどの崖は、腰を抜かした少女の力ではとてもではないが登れるものではないだろう。それに登っている間に絶対捕まってしまう。完全に退路を絶たれ、絶望と恐怖で涙が溢れそうになる。

「誰か……誰か助けてえええええっ！」

森にサーシャの絶叫が木霊する。叫んでも無駄な事は充分解かっている。この森には、城の屈強な兵士ですら恐れて入って来ないのだ。だがそれでも、自我を保つために本能が喉を振るわせる。そうしないと精神が壊れてしまいそうだった。

木霊が小さくなるにつれ、サーシャの絶望が大きくなる。

食べられる――そう思った時、サーシャの耳に信じられない声が届いた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

サーシャの叫びに応えるかのように、誰かの叫びが徐々に近づいて来る。
その声は一秒ごとに大きく、そして近くなる。視界を蟻頭に塞がれているが、誰かがこちらにもの凄い速さでやって来るのが感じられた。
背後からの咆哮に、蟻頭がゆっくりと振り向く。巨大な腹が蠕動しながら移動すると、サーシャの視界が僅かに開け、ほんの一瞬だが誰かがこちらに駆けてくるのが見えた。
誰かが助けに来てくれた。
絶望に支配されかけた少女の心に、一筋の希望の光が射す。それは太陽の光のように、とても明るくて温かい。
サーシャは、幼い頃母から聞いた昔話を思い出した。
絶体絶命のピンチに現れる、勇者の物語を。

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！」
疾走しながらゲイルが吼える。
ゲイルが駆け抜けた跡は、耕したかのように地面が抉れていた。
速い。あれほど歩きにくいと愚痴をこぼしていた森を、矢のように駆け抜ける。
緑の巨大な物体を視界に捉えた。見るからにおぞましく、そして大きい。あれならこの森に生えている木々など、何の障害物にもならないだろう。
だがそんな事はどうでもいい。それよりも、絹を裂くような悲鳴と一瞬だけ緑の塊の後ろに見えた赤毛が、ゲイルのテンションを一気に上げた。
さらに速度を上げる。
蟻の頭がゲイルに向き直り、突然湧いて出た邪魔者に敵意を剥き出しにする。ゲイルは構わず一直線に蟻頭へと突進した。
下半身がイモムシ状なだけに、蟻頭の方向転換は遅い。ぶよぶよした腹が波打ち、見る者の生理的嫌悪感を刺激する。だが腰から上

の人間に近い上半身は、下半身に似合わず機敏な反応を示す。
強引に体を捻り、蟻頭は近くにあった木々を後ろ手で払う。腕のほんの一振りで、数本の大木がゲイルに向かって飛んだ。
突然襲いかかる大木の弾幕。だがゲイルは止まることも避ける事もせず、まるで飛んでくる巨木など目に入らないかのようにただ真っ直ぐ蟻頭へと駆ける。
回避行動すらしないゲイルに、一本の木が直撃コースで飛来する。当たれば常人なら即死間違いなし。だがゲイルは右手を振りかぶると、木の幹に手刀を一閃した。
「ゲイルチョップ！」
ただの手刀。ただのチョップ。たったそれだけの一撃で、巨木が真っ二つに割れてゲイルの後方へと吹っ飛んだ。
ゲイルの走る速度はまったく衰えず、蟻頭がようやく重たい体を引きずるように反転した時にはすでに懐に入っていた。
「遅いんだよ、デカブツが！」
ゲイルは左足を地面に突き刺す勢いで踏み込み、体を回転させる。突進の勢いをそのまま乗せ、強烈な右の回し蹴りを放った。
ずどん、と蟻頭の腹が大きく凹み、巨体が横にずり動く。だがゲイルの足は、すぐに押し返されてしまった。
予想外の弾力に、ゲイルはバランスを崩す。だが何とか持ち直し、蟻頭の腹に蹴りの連打を浴びせた。
爆撃の連続音が森に響くが、ゲイルの足には分厚い水風船を蹴ったような感触が伝わっただけだった。
「クソ、効いてねえ」
ゲイルが顔を上げて蟻頭を見るが、ダメージがあるようにはまったく見えない。無論蟻の顔面に表情があればの話だが。
腹を攻撃するのを諦めようとした時、頭上から蟻頭の腕が襲いかかって来た。
「うおっ……！」
鋭い爪を持った豪腕が、次々とゲイルを襲う。イモムシの下半身

と違い、蟻頭の腕は移動速度の千倍は速かった。
矢継ぎ早に繰り出される蟻頭の攻撃を、ゲイルは右に左に飛び跳ねてかわす。巨大な腕が空振りするたびに、地面が深く掘られた。
「へっ、遅い遅い。遅すぎて目をつむってもかわせるぜ」
余裕綽々のゲイルは本当に目を閉じる。それでも蟻頭の攻撃は、ゲイルには当たらなかった。
だが――
「あら？」
目を閉じて飛び跳ねていたため、ゲイルは蟻頭が掘った窪みに足をとられた。
無様に地面に仰向けに倒れるゲイル。その隙を逃さず、蟻頭の腕がゲイルに伸びる。
強烈な平手打ちが、大量の土砂を撒き上がらせた。激しい土煙が起こり、少女は慌ててバスケットを庇うように覆い被さる。

辺りに充満していた土煙がようやく治まると、サーシャはゆっくりと体を起こした。体中に土を被っていたが、幸いどこにもケガはない。口の中の砂を吐き出し、髪に積もった土を手で払い落とす。バスケットの中身も、彼女が身を呈して守ったお陰で無事だった。
ほっと胸を撫で下ろすが、今はそれどころではない。蟻頭はまだ自分の目の前に居るのだ。だが怪物は自分の事など気にもかけず、背中を向けてじっとしている。
これはチャンスだ――そう確信したサーシャは、勇気を振り絞って蟻頭の横をそっと通り抜ける。怪物は何かに夢中になっているようで、地面を這い進む少女にはまったく気がつかなかった。
そういえば、助けに来てくれた（と彼女が勝手に信じている）勇者様の姿がなかった。まさか颯爽と駆けつけたはいいが、怪物に恐れをなして逃げ帰ってしまったのだろうか。
いや、そんな事があるわけがない。何しろ勇者様なのだ。こんな虫っぽい怪物を恐れるなんて事はないはずだ。

だが――ちらりとサーシャは自分の家よりも大きな蟻頭を見上げる。まず目についたのは、グロテスクな下半身だ。その上に人の体と蟻の頭を据えるなんて、子供でもこんな奇抜なデザインは思いつかない。確かにこんな巨大な怪物と闘えと言われたら、どんな勇猛な戦士でも二の足を踏むだろう。

得も言えぬ不安に襲われたサーシャは、とにかくここから離れようと必死に地面を這う。大事なバスケットを頭に乗せて両手で支え、懸命に足を動かした。

這い進むにつれ、蟻頭の腹で隠れていた景色が露になる。ふと見ると、蟻頭の手から何かがはみ出しているのを見つけた。

よく見るとそれは、蟻頭の手に押し潰されたゲイルであった。

「あ……」

助けに来たはずの勇者が、まさかの返り討ちに遭っている。

あまりにショッキングな光景に、サーシャの手からバスケットが落ちる。そして少女の意識は闇に吸い込まれた。

蟻頭の指の隙間から覗くゲイルの体は、ぴくりとも動かない。巨木を簡単になぎ倒す蟻頭の豪腕を受ければ、圧死は必然であろう。むしろゲイルと解かる形を残しているのが奇跡だ。

獲物を完全に仕留めたと確信したのか、蟻頭が嬉しそうに顎をガチガチと鳴らす。表情を持たない蟻の顔が、まるで笑っているように見えた。

だが次の瞬間、蟻頭が苦痛の声を上げる。見れば、蟻頭の指をゲイルが両腕で締め上げていた。

「いてえじゃねえか、この……この……えっと、半分以上虫だから、この虫野郎」

ゲイルは両足を蟻頭の指に絡ませ、さらに締め上げる力を強める。ぎりぎりと指が軋み、怪物は悲鳴に似た鳴き声を上げた。

指を襲う激痛に、蟻頭は堪らず手を激しく振ってゲイルを振り払おうとする。だががっしりと指にしがみついたゲイルは、振り回さ

れながらも執拗に蟻頭の指を締め付けた。
「オラぁっ！」
気合いとともに、ゲイルは蟻頭の丸太のような指をへし折り、そのまま力任せに引きちぎる。
蟻頭の絶叫が一際大きくなる。ゲイルは怪物の指を引きちぎった反動を利用して跳躍した。
地面に降り立ったゲイルは、抱えていた怪物の指を放り捨てた。どさりと地面に落ちた指は、濃い緑色の体液を撒き散らしながらのた打ち回る。蟻頭も激痛のあまり暴れていた。
「マジであったま来たぜこの野郎。虫らしく踏み潰してやるから覚悟しろ！」
蟻頭に向けて指をさすと、ゲイルは両足を開き腰を落とす。ゆっくり肺と腹の中の空気を全て絞り出すと、大きく深く息を吸う。
「我――最強なり」
ゲイルの発した言霊（キーワード）によって体内の内燃氣環（ソウルジェネレイター）が発動し、全身の筋肉が制限から解放される。戒めを解かれた肉体が歓喜の声を上げ、その高揚感がゲイルの闘争心をさらにかき立てる。
「行くぜっ！」
低くしゃがみ込んだゲイルは、全身のバネを最大限に溜める。地面を穴が開くほどの力で蹴り、音速に近い速度で空へと舞い上がった。
数秒で森を見渡せるほどの上空に到達する。下を見ると、蟻頭の姿が豆粒ほどに見えた。
体が重力に捕らえられ、上昇が止まる。
「体がダメなら頭を潰せばいいって、昔から決まってんだよ」
雲に手が触れる上空で、ゲイルはにやりと笑う。
自由落下が始まり、ゲイルの体が下に引っ張られる。それと同時に右足を高く振り上げて、自分の体を縦に連続回転させた。
高度が下がるにつれ、落下速度と回転速度が上がり、ゲイルは車輪のように大気を切り裂きながらまっ逆さまに落ちた。

「くらえ！　必殺、超重力踵落とし《グラビトンボマー》！」
遠心力で加速した踵が、落下速度をプラスされて蟻頭の頭頂部に炸裂する。
轟音が生まれ、蟻頭の首が衝撃に耐え切れずに体にめり込む。
完全に頭が沈み込んでも勢いは止まらず、上半身がめきめきと虫の腹に飲み込まれ、蟻頭は縦に押し潰されていく。強制的に押し込まれた上半身に圧迫され、虫の腹が破れ体液が噴出した。
大気との摩擦で、全身から煙を立ち上げたゲイルが足を離す。地面に着地して見上げると、蟻頭の体長は半分以下になっていた。

すっかり体積の小さくなった蟻頭の腹を、ゲイルが爪先で軽く蹴る。だが蟻頭は脈動しながら体液を垂れ流すだけで動かなかった。
蟻頭が完全に沈黙した事を確認し、ゲイルは「フン」と鼻を鳴らす。
「虫ごときが俺に勝とうなんて、百億万年早いぜ」
「そのわりには苦戦していたようですが？」
「うおっ、びっくりした！」
いきなり背後に現れたサムに、ゲイルはびくっと体を震わせる。
「何だよサム、今頃追いついたのか？　相変わらずドン亀だな、お前は」
「私は重力下では、本来の機動性を発揮できませんからね。それと――」
「あ……」
サムが両手に抱えている少女を見せると、ゲイルは忘れていた大事な何かを思い出したような顔をする。
「誰かさんが目的を忘れて派手に暴れまわっているので、私が保護しておきました」
サムの皮肉に、ゲイルが「ぐ……」と唸る。蟻頭に叩きつけられた事で頭に血が上り、今の今まですっかり少女の事を忘れていたのだ。

ゲイルは少女の顔を覗き込む。気を失っているのか、サムの手の中でぐったりとしていた。
「おい、動かねえぞ。まさか死んでるのか？」
「いいえ。気を失っているだけです」
「そうか……」
ほっと息をつくゲイル。注意して見れば、少女のささやかな胸が小さく上下している。特に目立った外傷はなさそうなので、本当にただ気絶しているだけなのだろう。
少女が無事なのを確認すると、やおらゲイルは溜め息をついて肩を落とした。手を頭の後ろに組み、わざとらしくがっかりしたポーズをとる。
「どうしました？」
「しかしうっすい胸だな。こいつ本当に女か？　ったく、参ったな……」
「まだ少女と呼んだほうがよい年齢のようですが、それが何か？」
「いや、どうせ助けるなら巨乳の美女が良かったなあって思ってな」
「はあ……」とサムが呆れる。鉄仮面の通気孔から、溜め息に似た排気が漏れる。
「こんなツルペタを助けるために苦労したなんて、とんだ無駄骨だぜ。俺は胸がメロン大以下の奴は、女と認めないポリシーを持っている事に定評があるんだ。知ってるだろ？」
両手を胸の前で動かして豊満な胸をジェスチャーするゲイル。サムは奇妙な動きをする相棒を、文字通り無機質な目で見ていた。
わずかな沈黙の後、サムは少女をそっと木陰に横たえた。そして蟻頭の死骸に近づき、しげしげと眺める。
「この生物……奇妙ですね」
「無視か？　俺の話はスルーか？」
「え？　ああ、すみません。よく聞こえませんでした」
「お前はその気になれば、一キロ先で落とした針の音でも聞こえ

るだろ。それとも何か？　俺の声は、お前のセンサーでも感知できない特殊な音波なのか？」
唾を飛ばして喚く相棒をよそに、サムは蟻頭の腹の表面を左手でなでる。
突然サムの右手の甲から剣が飛び出し、一秒間に一万回振動する超振動ブレードの刃が低い唸りを上げる。
左手で当たりをつけた箇所に、ブレードの刃が突き刺さる。ゲイルの渾身の蹴りですら破れなかった体皮に、刃はあっさり飲み込まれた。そのまま刃で円を描き蟻頭の腹をくり貫くと、躊躇なく腕を突っ込み何かを掴み出した。
「ゲイル、これを見てください」
「全部無視かよ！？」
目の前に突き出されたサムの手を、ゲイルが叩く。粘液のついた握り拳がぬちゃりと音を立てて開かれると、ゲイルの顔が徐々に真剣になる。サムの掌には虹色に淡く輝く、クリスタルに似た物体が乗っていた。
「これは……」
「科学的に圧縮されたエネルギーの塊です」
「と言うと、この化け物は人工的に作られたものだって事か」
当たりだな、とゲイルはにやりと笑う。
「この惑星には絶対ありえない物質ですからね。間違いないでしょう。恐らくこの物体は、怪物の構築及び原動力として機能している核のようなものです。ただエネルギーの圧縮率が異常で、これ一つでも小さな発電所程度のエネルギーを有しています」
そうか、とゲイルは頷く。クリスタルは仄かに明滅を繰り返し、ゲイルの顔を照らしている。蟻頭の命の源であったクリスタルの光はとても美しく、そして儚かった。
二人がクリスタルを眺めていると、乾いた音を立てて、蟻頭の死骸に亀裂が入った。巨体が形を失っていく。地面に落ちた破片はさらに細かく崩れ、砂となって風に舞った。

「核を抜いたため、肉体が崩壊を起こしているようですね」
「所詮は仮初めの命ってやつだ。命を与えられた操り人形も、電池が切れればただのガラクタに逆戻りか……」
無言になるサムに、ゲイルは「悪い。忘れろ」とばつが悪そうに言った。
二人はしばらくの間、崩れ行く蟻頭の姿を黙って見守った。
蟻頭は、五分ほどで完全に砂の山に変わった。砂山もいずれ風に飛ばされてなくなるだろう。残ったのは、ゲイルの拳ほどの大きさのクリスタルだけ。サムは、掌でぼんやりと光るクリスタルと砂山を交互に見た。
「感傷か？　お前にしてはセンチメンタルだな」
そう言うとゲイルは、サムの手からクリスタルを取り上げた。クリスタルにまとわりついて蟻頭の体液を、顔をしかめながらズボンの尻で拭く。
「いいえ、そういうわけでは……」
「くだらない事を考えている暇があったら、とっととコイツのデータをキャサリンに回せ。恐らく今回の標的（ターゲット）に繋がる鍵だからな」
「了解しました」
サムの両目が赤く光り、ゲイルの掌に置かれたクリスタルをスキャンする。データを採取すると、衛星軌道上で待機している宇宙船のメインコンピューター『キャサリン』に転送した。
サムからの転送データを受信したキャサリンは、すぐさま惑星全体のサーチを開始した。
「サーチ開始しました」
サムの報告を受けると、ゲイルは持っていたクリスタルを無造作に腰のポーチに突っ込んだ。あまりの自然な動作に、さすがのサムも思わず見逃してしまうところだった。
「ちょ……もう少し丁寧に扱ってください。もしそれが爆発したら、いくら貴方でも無事では済みませんよ」
「ったく心配性だな……お前は俺の母親か？」

「そういう問題ではありません」
「いちいち細かい事を気にしているとハゲるぞ」
「元から髪なんて生えてませんよ」
「ははっ、そうだったな」
サムは上手く話を反らされた事に気がついたが、ゲイルが楽しそうに笑っているのを見てそれ以上何も言わなかった。
「それじゃあ獲物の巣穴が見つかるまで、どこかで待機するか。無闇に歩き回っても、腹が減るだけだからな」
大きく伸びをすると、ゲイルの腹が鳴る。そしてそれに呼応するように、少女が小さな声を上げた。

3

「う、ん……」

サーシャは小さく呻くと、ゆっくりと目を開けた。

木の枝が風にそよぎ、木漏れ日が顔に注ぐ。太陽の光が目に入り、思わずぎゅっと目をつむる。

自分はどうしてこんなところに寝ていたのだろう。目を閉じたまま、事の顛末を思い返してみる。背中に感じる草の感触が、妙に心地良かった。

こうして草むらに寝転んでいると、木陰で昼寝をしていただけのように思える。時折吹く風が肌を優しく撫で、赤い前髪を揺らした。昼寝にはもってこいの日だったが、果たしてそのために自分は森にまでやって来たのだろうか。

まどろみの中で混乱した頭を整理していると、木々のざわめきに混じって聞き慣れない声が聞こえてきた。

「それより腹が減ったな。何か食い物持ってないか？」

「もう全部食べたのですか？」

「育ち盛りだからな。あれっぽっちじゃ足りねえよ」

「これ以上育つわけないでしょう……。食料といいさっきの戦闘といい、少しは計画性というものを身につけてくださいよ」

「ったく口うるせえな。お前は俺の女房か？」

「そういう問題ではありません」

「あれ？　この会話、前にしたっけ？」

「気のせいですよ。それより、その手に持っているものは？」

「これか？　さっきそこで拾った」

「それはあの少女の所持品でしょ。勝手に触ると怒られますよ？」

「バスケットと言えば、中身は食い物に決まってる。助けてやった謝礼代わりに、ちょっとくらいつまんでも罰は当たらないだろ」

バスケットという単語を聞いて、サーシャの目が大きく開かれる。

そういえば、自分はバスケットを持っていたはずだ。そしてあれには、大事なものが入っているのだ。
慌てて起き上がる。声のした方向へ顔を向けると、奇妙な二人組みが座り込み、バスケットの中を覗き込んでいた。
「なんだこりゃ。草しか入ってねえぞ……」
「あてが外れて残念でしたね」
「まあ意外と美味いのかもしれないし、とりあえず食ってみるか」
「そこで躊躇なく食べる、という選択肢を選ぶ神経は尊敬に値しますよ」
「あまり褒めるなよ。照れるぜ」
「褒めてませんよ。せめて火を通して食べないと、消化に悪いですよ」
「サラダだって生で食うだろ。それに火なんか通したらビタミンが破壊されちまう」
サーシャが愕然としている間に、男がバスケットの中から草をひと束掴み、ゆっくりと口に運ぼうとした。サーシャは慌てて駆け出す。
「だ、ダメ。待って！」
「おや、気がついたようですね」
「なんか凄い形相でこっちに走ってくるぞ？」
必死で走るサーシャに向けて、男が笑顔で手を振る。その手には、彼女が命がけで森に採りに来た薬草が握られていた。
「おい貧乳、これ食っていいか？」
「誰が貧乳よっ！」
「がっ……！」
見ず知らずの男に自分が最も気にしている事を言われ、反射的に体が動いた。座り込んでいる男の顔に、サーシャの低い飛び蹴りが炸裂する。男は見事な後ろ回りで地面を転がって行き、木にぶち当たってようやく止まった。
「あ……」と大きな鎧を着たもう一人が、木の根元でひっくり返

っている男を見て呆然とする。
サーシャは落ちたバスケットを拾い上げると、散らばった薬草をせっせと中に詰め込んだ。
「あの、お嬢さん……？」
「何よ、何か文句ある？」
背後から恐る恐る声をかける鎧を、サーシャはぎろりと睨む。普段なら、自分の倍くらいある身の丈の鎧男に向かってこんな啖呵は切らないのだが、先の一言で完全にスイッチが入ってしまい恐怖も何も感じなかった。それ以前に、こんな巨大な鎧を着た大男が存在するわけがないという疑問すら湧かなかった。
「いえいえ滅相もない。それよりも、相棒の失礼をお詫びします。あれは昔から粗忽な男で、私も普段から手を焼いて困っていたのです。今回の事は、彼にとって良い教訓になるでしょう」
そう言うと大鎧は、よくやったとばかりに親指を立てる。見た目を裏切る紳士的な態度に、サーシャはすっかり毒気を抜かれてしまい、煮えたぎった頭がすうっと冷めていく。
「そ、そう……、それならいいわ……」
冷静になってみれば、恐らく彼らが蟻頭から自分を助けてくれたのだろう。命の恩人に蹴りを入れてしまったと今さらながら気づいても、済んでしまった事はどうしようもない。サーシャは謝るのと礼を言うタイミングを一度に失ってしまった。
「時にお嬢さん――」
「サーシャ」
「え？」
「あたしの名前。サーシャでいいわ」
「了解しました、サーシャ。私の事はサムとお呼びください」
それと――とサムは木の下でまだ伸びている男を見て、
「あちらの不躾で無作法で無礼な男がゲイル。私の相棒です」
と紹介した。

◆

なだらかな平地を、サーシャはゲイルとサムを連れて西に歩いていた。彼女の案内で森を北に抜け、街道まで出てきたのである。
ちらりとサーシャは後ろを盗み見る。背後では、ゲイルが不貞腐れたように手を頭の後ろで組んでぶつくさと歩いている。蟻頭にぺしゃんこにされたように見えたが、ぴんぴんしている。きっとあれは自分の見間違いだったのだろうと、サーシャは納得しておいた。
ゲイルは見れば見るほど奇妙な男だった。薄い茶色の髪はぼさぼさで、目つきがやたら悪い。歳は自分よりも少し上だろうか。体格は細身だが痩せっぽちではなく、筋肉質で締まった印象を与える。
何より目を引くのはその服装だった。体にぴったりとした、首から下は爪先から手の指まで繋がった服。ゲイルの体に合わせてあつらえて、動きやすさだけを追求したようなデザインだ。だがその素材が何なのかは、見ただけではまったく判らない。もしかしたら町ではこういう服が流行っているのかもしれないが、サーシャの趣味ではなかった。
ゲイルの服にはあちこちに焼け焦げたような跡があり、火事場泥棒をしてきた直後の盗賊をイメージさせる。恐らく十人がゲイルを見たら、八人は自分と同じ感想を持つだろう。
最後尾を黙々と歩くサムも、奇妙という点ではゲイルを上回っていた。
まず何より大きい。村で一番大きな男でさえ、彼に比べたら大人と子供だ。ゲイルだって小柄ではないが、サムの中にすっぽり納まってもまだ余裕があるだろう。いったい鎧の中にどんな人が入っているのか気になるところだが、見ないほうが良いという気がしないでもない。
鎧のデザインも奇抜だった。田舎育ちなのでこれまで数えるほどしか見た事ないが、城の兵隊や騎士のものとはまるで違う。だが彼の物腰や口調は、ゲイルと違って上品だ。もしかしたらどこか名家の騎士なのだろうか。それにどちらかと言うと、サムの鎧は戦うための実用品ではなく、装飾や儀礼用のものに見える。だとしたら、

サムが主人でゲイルが従者だろうとサーシャは勝手に設定を決めた。
だが冷静になって二人を観察すると、なんと胡散臭い連中だろう。命を助けてもらった負い目からつい家に招待してしまったが、早まった事をしたのかもしれない。そうサーシャは後悔したが、もう後には引けなかった。
「おい、まだ着かないのかよ？」
後ろからゲイルが訊ねてくる。少し歩くたびに同じ質問をするので、サーシャは小さな子供の母親になったような気分だった。
「うるさいわね、もうちょっとだから黙って歩きなさいよ」
「さっきからそればっかじゃねえか。俺、ハラ減って死にそうなんだけど」
「お腹が空いたくらいで死にはしないわよ」
「いや死ぬよ。餓死だよ餓死」
「ああもう、男のくせにグダグダ文句ばかり。少しはサムを見習いなさいよ！」
「俺はあいつと違ってデリケートなの。歩けば疲れるし、動けば腹が減るんだよ」
何を当たり前の事を言っているのだろう、とサーシャは思った。軽装のゲイルがそんなに疲れているなら、サムはどうなる。あんなに大きくて重そうな鎧を着ているのだから、疲労はゲイルとは比べ物にならないはずだ。それでもサムは文句一つ言わない。ゲイルはサムを少しは見習うべきだ。特に彼の紳士的な態度を。
「ほら、あそこに火山が見えるでしょ。あの山の近くだから、もう少し辛抱して歩きなさい」
サーシャが南を指差すと、山頂から黒い煙をくゆらせている火山があった。山の周辺だけ煙の影響なのか、暗雲が立ち込めてやけに暗い。麓は荒れ地と化しており、目に見えるのは岩と赤茶けた土ばかり。山へ続く道も荒涼として、近づくにつれて草木がまばらになって殺伐としていく。ついさっきまで生命力溢れる森を歩いていただけに、あまりの殺風景さに薄ら寒くなってくる。

「ではあの火山を越えて行くのですか？」
「次は山越えかよ……」
「ううん、あの山には近づいちゃいけないの。だから遠回りだけど、迂回して村に向かうわ」
「近づいてはいけないとは、どういう事ですか？」
「あの山はね、この辺りの守り神なの。神様が住んでる神聖な山だから、誰も近づいちゃいけないってずっと言われてたわ。もっとも、火山だったのは大昔の話だったみたいだけどね」
「しかし、今あの山は火山活動をしているように見えますが」
「十年前、あたしがまだ小さかった頃、急に活動を再開したの。噴火こそしなかったけど、大きな地震があってみんなが大騒ぎしてたのを覚えてるわ。神様の怒りだとか祟りだとか言ってね」
「神様ねえ……。胡散臭い話だ」
「けど、あの地震があってからなの。麓や森に怪物が出没しだしたのが。だからますます誰も近寄らないようになったわ」
「怪物はあの一匹だけではないのですか？」
「あんなに大きいのは珍しいけど、うじゃうじゃ居るわよ」
「危険な土地ですね。軍隊などが討伐してくれないのですか？」
ゲイルの言葉に、サーシャの表情が曇る。辛い過去を思い出して、唇をきゅっと噛んだ。
「何度も軍隊が出陣したわ。けど相手が悪すぎ。全部こてんぱんにやられて逃げ帰ったわ」
「そりゃここの軍隊ごときじゃ、あの化け物に手も足もでねえだろうよ」
ゲイルがからから笑っていると、サーシャは「その中にあたしの父さんも居たの」と、は小さな声で言った。その途端ゲイルの笑いが止まる。
「す、すまん……」
「いいのよ、本当の事だし。けど偉い人は名誉とか誇りだとかのほうが大事で、あたしたち平民の命なんて何とも思ってないんだわ。

あんな怪物に勝てるわけないのにね」
俯くサーシャに、ゲイルとサムは言葉を失う。かける言葉が見つからないという感じだ。サーシャも何も言って欲しくなかった。気休めや慰めをかけられたところで、彼女の父が帰って来るわけではないのだから。
「あたしの村は森にも山にも近いから、よく怪物の討伐に巻き込まれたわ。男の人は連れて行かれて、女の人は無理矢理働かされた。けど王様ももう懲りたみたいね。もう随分前から兵隊も徴兵も来なくなったわ」
「恐らく、国がそれだけ疲弊しているのでしょう」
「フン。馬鹿が政治をやると、ろくな事になりゃしねえ。だが政治をやってる奴に限って馬鹿だから始末に負えねえな」
そうね、とサーシャは小さく微笑んだ。だがその笑みは諦めと悲しみを含んでいて、どこか寂しそうだった。
「ところでよお――」
「なあに？」
「俺、ハラ減って死にそうなんだけど、その草食っていいか？」
「だ～か～ら、これは大事な薬草なの。村に帰ったらご馳走してあげるって、さっき言ったじゃない！」
「そうだっけ？」
「馬鹿じゃないの？　あんた馬鹿じゃないの？」
「お前、二回言ったな。この貧乳貧乳貧乳！」
「バーカバーカバーカ！」
子供のように口ゲンカする二人を、サムは黙って見守る。つと顔を上げると、火山が目に入った。黒い雲がかかった火山は、静かに火口から煙を昇らせ、そこには神よりも悪魔が住んでいるように見えた。

4

太陽が山の陰に隠れようとする頃、ようやくゲイルたちはサーシャの村に到着した。

村は太い丸太で作った柵で囲われ、門の内側の両脇には見張り櫓が一棟建てられていた。

門には村の若い男が二人立っており、それぞれの手に武器を握り締めている。農具を改造したようなそれは、あまりに貧弱で頼りなく、ほとんど気休めといった感が拭えなかった。

門の前に立っていた大柄な青年がサーシャの姿を認めると、笑顔で手を振ってきた。だがすぐに、彼女の後ろを歩いているゲイルとサムに気づいて表情を引き締める。

青年はサーシャに駆け寄ると、まるで悪党から助け出すように手を引いてゲイルたちから離した。

「ちょっとグレン、何するのよ。痛いじゃない」

「それよりどこに行ってたんだ？　あまり心配させるなよ」

「別にあんたに心配して欲しくないわよ。ちょっとおじいちゃんのために、森に薬草を採りに行ってただけ」

「森ってお前、あの森は怪物が出るから危ないって散々言われてるだろ」

「だって、おじいちゃんの病気に効く薬草は、あの森にしか生えてないんだもの……」

叱られてしゅんとするサーシャ。グレンと呼ばれた男は、仕方ないなという顔をする。

「で、誰なんだあいつら？」

明らかに警戒した顔で、グレンはゲイルとサムを見やる。一歩前に出、サーシャを自分の後ろに隠すと同時に、手に持った武器を構えた。

「何モンだ、てめえら？」

グレンの持つ棍棒には、あちこちでたらめに釘が打ち込まれている。こんな物、怪物相手にどこまで通用するかはわからないが、少なくとも普通の人間に対しては充分な凶器だ。それを筋骨隆々のグレンが持つと、それだけで威圧感は抜群だった。

だがゲイルは釘バットを構えて啖呵を切っているグレンの姿を見ても、恐怖を感じているように見えない。それどころか薄ら笑いすら浮かべていた。その余裕がグレンの神経を逆なでする。

「なに笑ってんだよ。殺すぞ？」

「いやなに、子供がおもちゃで遊んでる姿が微笑ましくてつい」

「テメふざけてんのか？　いっぺん死んどくかコラ」

「できもしない事を言うなって、ママに教わらなかったか？」

「野郎……」

一触即発の空気が漂う中へ、サーシャが割って入った。グレンの袖を引っ張ると、耳打ちをする。

「ちょっとお、あたしの命の恩人に喧嘩吹っかけないでよね」

「なに……」とグレンの顔に動揺が走る。

「あたしが森で怪物に襲われた時、彼らが助けてくれたの。だから警戒しないで。そりゃ見た目はメチャクチャ怪しいけど、悪人じゃないわ」

グレンは乱暴に腕を引いて、服の袖を持つサーシャの手を払う。

「チッ」と舌打ちを残すと、面白くなさそうに地面に唾を吐いて去って行った。

「何だあいつは？　お前のコレか？」

サーシャに向けて、親指を立てるゲイル。

「やめてよ、ただの幼馴染。あいつはグレン。村長の孫で、この村の自警団のリーダーなの」

「ガキ大将がそのまんま大きくなりました、って感じだな」

そうね、とサーシャはくすくす笑った。

「さ、それより家（うち）に行きましょ。お腹が空いてるんでしょ？」

「おう、そうだ。すっかり忘れてた」

「なにそれ？　あんたって本当に変な人ね」
「そうか？　初めて言われたぜ。それよりさあ――」
「なに？」
「俺、ハラ減って死にそうなんだけど」
「やっぱあんた馬鹿だわ……」
がっくりと肩を落としつつ、サーシャはゲイルたちを伴って家路についた。

がつがつぼりぼりはぐはぐばりがりぽりんぽりんぺきっもきっ。
平凡な食卓に、似つかわしくない異音が流れる。ゲイルが食事をしている音だ。両手にものを掴み、それを交互に同時に口に入れる。飢えた獣よりも貪欲に、噛むのも煩わしく飲み込む。一緒に食事をしているサーシャたちは、卓上に空になった皿が次々と積み上げられていくのを呆然と眺めていた。
「見てて気持ちいいくらいの食べっぷりね。まだ足りないでしょ？　もっと作ってくるわ」
「あ、あたしも手伝うわ、母さん……」
サーシャの母――リネアが立ち上がると、娘がそれに続いて台所に向かう。こうしている間にも、皿が次々と空になっていく。ゲイルの食欲はとどまるところを知らず、放っておけば朝まで食べ続けるのではないかと思われた。
「ときにお若いの……ゲイルさんと仰ったかな？　サーシャを助けてくれたそうで、何とお礼を言ったらよいか」
上座に座っている老人――ゴードがゲイルに深々と頭を下げる。すっかり白くなった頭髪が、ぱさりと卓に垂れた。
「ふぁ？　何か言ったか、じいさん？」
「いやいや。それより、鳥の骨は残したほうが良いと思うんじゃが」
「そうなのか？」
そう言いながら、ゲイルは鳥の腿肉を骨ごとばりばり食べる。野

生の熊のような豪快な食べっぷりを、ゴードは目を細めて楽しそうに見ていた。
「ところでじいさん、あんた医者なんだって？　医者が病気になってりゃ世話ねえぜ」
「お恥ずかしいお話です。しかしこの年になると、体のあちこちにガタがきて難儀しますなあ」
「年寄りなんだから、あんま無理すんなよ」
「それはどうもご親切に。ですが、わしは幸せ者です。こんな老いぼれのために、危険を冒して薬草を採りに行ってくれる孫がおるのだから」
ふ～ん、とゲイルは気のない返事をして、皿に残った最後の腿肉を頬張る。骨を噛み砕く音が、室内に響いた。

「こうして見ると、本当にただの置物みたいね」
家の前で直立したまま微動だにしないサムを見て、サーシャは独り言のように呟いた。
暗くなった外に、ぽつんと立つ巨大な鎧がひとつ。水晶のような瞳は、まっすぐ何かを見つめているようで、そのくせ何も映していないようにも見える。本当に置物か彫像のようだ。知らない人が見たら、魔除けか何かと思うに違いない。こんなちっぽけな家の前に立たせるよりは、村の入り口に立たせたほうがきっと似合うだろうし、ご利益もありそうだ。
「何か用ですか、サーシャ？」
金属を軋ませ、サムが振り向く。
「サム、本当に中に入らないの？」
「いえ、ここで結構です。私の体重では家の床が抜けてしまいますので」
「そう……。じゃあこれ、あなたの分」
そう言ってサーシャは、手に持っていた盆をサムに差し出す。盆の上には、大きな椀に盛られたシチューとパン、そして焼かれた肉

の塊が乗っていた。
「足りなかったら遠慮なく言ってね。じゃんじゃん作るから」
「すみませんサーシャ」
サムが謝罪をすると、サーシャは慌てて首を横に振った。
「あ、いいのよ。別に文句を言ってるわけじゃないんだから。うちは女二人におじいちゃんだけでしょ？　大量の食事を作る事なんて滅多にないから、お母さん張り切っちゃって」
「いえ、そうではありません」
「え？　どういう事？」
「私には食事が必要ないのです。ですからこれはゲイルに与えてください」
「食欲が無いってこと？」
「簡単に言えば、そういう事です」
「意外と小食なんだ。よくそこまで大きくなれたわね」
「私は生まれた時からこういう体なんですよ」
サムのまったく冗談っけのない声に、サーシャは吹き出した。盆が揺れ、椀のシチューが波打つ。
「ゲイルもそうだけど、あなたも変わった人ね」
「初めて言われましたよ」
「ふふっ、同じこと言ってる」
「相棒ですから」
「あんなのが相棒じゃ、あなたも苦労が絶えないわね」
「慣れていますので。けれどサーシャ、ゲイルを悪く思わないでください。彼は、その――」
言いよどむサムに、サーシャはどうしたのと訊ねる。
「彼が人や自分の言った事を忘れてしまうのは、理由があるのです」
「知ってるわ。馬鹿だからでしょ？」
「いえ、そういう意味では……」
「冗談よ。たしかにあいつは馬鹿で下品で子供みたいな奴だけど、

あたしはああいう馬鹿って嫌いじゃないわ」
一人で納得してにこりと微笑むサーシャ。
そうですか、とサムは納得したのか説明するのを諦めたのか判らないが、そのまま黙ってしまった。
家の中から、サーシャを呼ぶリネアの声がした。料理の追加ができたのだが、盛り付ける皿が足りないから洗ってくれと頼んでいる。
「あたし行かなくっちゃ。本当に食べなくて平気？」
「問題ありません」
「そう……。じゃあ食欲が出たらいつでも言って。もっとも、材料が残ってたらの話だけど」
おどけたように笑うサーシャに、サムはお気遣いどうもと応えた。
「あ、それとね、サム」
「何でしょう？」
「まだ……お礼言ってなかったわよね。助けてくれて、ありがとう」
今さらという感が否めず、サーシャは少し恥ずかしくなる。けれど怪物に襲われたりゲイルとサムのような奇天烈な人物と出会ったせいで、そこまで頭が回らなかったのだ。
「貴方を助けたのはゲイルです。お礼なら彼に言ってあげてください」
「そう……。でも一応ね」
「そうですか。では一応、どういたしましてと言っておきましょう」
サムの律儀な返答が、妙におかしかった。これでよくあんなちゃらんぽらんな男と一緒にいられるものだと思う。
それじゃ、とサーシャが家に戻ろうとした時、家々の明かりに混じって小さな灯りがゆらゆらと動いているのが見えた。灯りはゆっくりとこちらに近づき、やがてそれは誰かが手に持った松明だと判る。
松明はひょこひょこと波打つように上下に揺れ、サーシャの家か

ら漏れる明かりに照らされると、一人の杖をついた老人の姿が現れた。

「こんばんは、村長さん」

「はいこんばんは、サーシャ」

サーシャが挨拶をすると、老人はにっこりと笑った。深い皺がびっしりと刻まれた皮膚が、剥がれ落ちてしまいそうな笑みだ。頭は禿げ上がっているが、代わりに白い髭が豊かに生えており、背筋は曲がっているが杖を持つ手はしっかりとしている。

「村長さん、また腰が痛くなったの？　お薬はまだ残ってると思ったけど――」

「違うんだサーシャ。今日は患者ではなく、村長として来たんだよ」

サーシャはちらりとサムのほうを見たが、サムの目は松明の光を反射させているだけだった。

5

村長はゲイルの向かいに座り、観察するようにじっと見つめていた。

ゲイルは食事を中断されたのが気に入らないのか、むすっとした顔を台所に向けている。台所ではサーシャが、村長が何の用かと緊張した面持ちで覗いていた。娘の背後ではリネアが、できあがった料理を運べず冷めてしまうのではないかと困っている。

「それで、いったい俺に何の用だよ？」

不機嫌さを隠さない声で、ゲイルが村長に言う。礼儀も何もない物言いだが、村長は気にしたふうもなく真剣な眼差しをゲイルに向けている。

「実は、おりいってご相談がありまして、こうしてお話をさせてもらいに参りました」

丁寧が過ぎる話し方に、ゲイルは舌打ちする。肩書きのある人間や目上の者がこういう話し方をする時は、どうせ禄でもない話だろうという感情がありありと出ていた。

「森の怪物を、貴方が倒されたと孫から聞きました。さぞや名のある武芸者だとお見受け――」

「能書きはいいからさっさと本題に入れ。俺はメシを邪魔されるのが、不味いメシの次に嫌いなんだよ。そしてその次に嫌いなのが、メシが冷める事だ」

「これは……知らぬとはいえ、お食事を邪魔して申し訳ありません。では――」

村長は卓の上で手の指を組むと、大きく息を吐いた。言いたくない事を仕方なく言わなければならないような、そんな溜め息にも似た吐息だった。

「貴方にこの村に留まって、用心棒になっていただきたいのです」

「どうせそんなこったろうと思ったよ」

相手が用件を予想していた事に、村長の表情が明るくなる。
「そ、それでは――」
「いやなこった」
だが明るくなった顔はすぐに曇った。
「え……？」
「俺たちにはそんな暇も、この村を守る理由も無い。だいたい、この村には自警団があるだろ。あいつらを鍛えろ。特にお前の孫を」
「し、しかし……怪物は城の騎士団ですら歯が立たないのです。そんなものに勝てるようになるまでには、いったいどれほどの月日がかかるか……」
「だいたい、森の化け物はもう居ないんだ。用心棒なんて必要ないだろ」
「それが、そうでもないのです……」
どういう事だとゲイルが促すと、村長は訥々と語り始めた。
最初に怪物が現れたのは、やはり十年前。村の守り神である火山が活動を再開した直後だった。
だが怪物は知能があまり高くないのか、それともそういう性質なのか、縄張りの森からほとんど出なかった。おかげで今まで村が無事だったのだが、その怪物がいなくなった今、空き物件となった森に次の新たな怪物が住み着く可能性がある。それどころか下手をすると、新しい怪物は餌を求めて縄張りを広げる性質を持っているかもしれない。そうなれば森に近いこの村は、格好の餌場となるだろう。
つまりゲイルのした事は、いたずらにこの村の危険を増やしただけなのだ。一つの因子を排除すると、全体のバランスが崩れて思わぬ災害が起きる。自然とは、人間が手を加えて調整できるほど単純ではないのだ。
「こう言いたくはありませんが、貴方には責任をとっていただきたい。せめて安全が確認されるまで、しばらくこの村に留まっていただけないでしょうか？」

責任を問われ、ゲイルも無碍に断ることはできなくなった。さすが村長である。下手に出ていながら追求すべきところはする。見かけに似合わぬ老獪さに、ゲイルは苦虫を噛み潰すような顔をした。

「わかったよ……責任とってやるよ」

ゲイルが観念したように言うと「おお、それでは……」と今度こそ村長の顔が明るくなる。

「ただし、俺たちにも都合というものがある。一週間で手を打とうじゃないか」

「ほほお、一ヶ月も滞在してくれますとな？」

「いや、一週間だって」

「へ？　最近耳が遠くなって……。一年とはまた気前がいい」

「おい、じじい……」

「わかりました。まずは一週間という事で、よろしくお願いします」

「長生きするぜ、クソじじい……」

「おかげさまで、今年九十歳になります」

平然としている村長に、ゲイルは苦笑いする。老人に手玉にとられたような気がするが、不思議と怒りは湧かなかった。

「……で、何であんたがあたしの家に居候するのよ？」

「別に俺がそうしたいって言ったわけじゃねえよ」

寝耳に水な話に唖然とするサーシャに、ゲイルは不機嫌そうな顔で悪態をついた。

「あら、お母さんは賛成よ。若い人がいると、にぎやかになっていいじゃない」

「年頃の娘が居る家に、男を泊める母親がどこに居るのよ！」

「安心しろ。俺はお前を女だと思っていない」

「あんたは黙ってて！」

村長が帰った後、サーシャの家ではゲイルを交えて家族会議が開催されていた。議題はもちろん、ゲイルをこの家に泊める事である。

サーシャは頑なに拒否するが、意外にも反対するのは彼女だけだった。
「ゲイルさんはあなたの命の恩人なんだから、うちに泊まってもらうのが筋というものでしょ？」
「それはそうだけど……。ちょっと、おじいちゃんも何か言ってよ……」
助けを求めて祖父を見やるが、ゴードはにこにこと笑顔で賛成を表明している。サーシャの知らぬ間に、家族はゲイルたちを家に泊めると決めていた。見ればリネアは、迷惑そうなゲイルに年はいくつだとか、年下の娘に興味はあるかなどとあれこれ質問している。これはもう自分に勝ち目は無いと悟ったサーシャは、渋々ゲイルたちを泊める事を認可した。こうしてゲイルたちは、晴れて当座の宿を確保したのだった。

納屋の扉を開けると、埃とカビの臭いがサーシャの鼻をついた。くしゃみを連発し、涙目になりながら扉と蔀窓を全開にして換気をする。
納屋の中には今は使われていない農具や、薬を調合する乳鉢や薬研などが置かれていた。広さはそれほどでもないが、天井が高く入り口も広い。何より土間なので、サムの体重でも踏み抜くことがない。
「本当にここでいいの？」
サーシャが念を押して確認する。ゲイルは物珍しそうに納屋に放置された品々を眺めながら、上等上等と頷いた。
「いつも野宿ばっかりだったからな。雨風さえ凌げればどこでもいいよ」
「……あんたたちって、今までどんな生活してたのよ？」
「そうだな……。獲物を追って東に西にって感じだ」
「狩人なの？」
「ま、そんなところかな」

「ふ～ん……」
どこの世界に手ぶらと全身鎧の狩人がいるのだろう。適当にはぐらかされている気がしたが、サーシャはそれ以上余計な詮索はしなかった。どうせしばらく我慢すれば、二人はこの村から去るのだ。あまり深く関わってもお互いに得はない。
「明日はここを片付けて、それから村の中を案内してあげるね」
ゲイルに毛布を渡すと、サーシャは二人におやすみと言って家の中に戻った。
サーシャが家の中に入るのを見届けると、ゲイルは納屋の中のがらくたを隅に追いやる。どうにか二人分のスペースを確保すると、さっさと毛布を敷いて横になった。
「本当にこの村に滞在するのですか？」
ずしん、とサムがゲイルの横に座る。納屋の壁にもたれかかると、板がみしみしと悲鳴を上げたのですぐに壁から背を浮かす。
「仕方ねえだろ、責任取れとか言われちゃ……。それにキャサリンのサーチが終わるまでしばらくかかるんだ。野宿するより、屋根があって美味いメシが出るほうがいいだろ」
「ですが、良いのですか？　滞在するという事は、少なからずこの村の人間と関わりを持つ事になりますよ？」
「寝泊りするだけなら大丈夫だろ。それよりあのおふくろさんのメシ、美味かったなあ」
寝返りをうち、腕を頭の後ろで組むゲイル。夕食の味を反芻しているのか、口元がゆるんでいる。
「味なんてわからないでしょうに」
「だがせっかく食える体なんだ。食えない奴の分まで食ってやりたくなるじゃないか」
「昔の習慣が抜けないのも考えものですね」
「そうだな。寝ないで済むなら、ずっとお前の相手をしてやれるんだが……」
「仕方ありません。任務中は待機モードにできませんからね。け

どもう慣れました」
ゲイルは「そうか」大きな欠伸をする。昼間あれだけ暴れたのだ。満腹も重なって、眠気もピークを迎えている。怪物を素手で屠るゲイルも、睡魔には勝てないのだろう。
目を閉じ無言になると、やがて規則正しい呼吸音が聞こえてきた。サムはゲイルの寝息を聞きながら、ずっと納屋の奥の暗闇を見つめていた。

6

ぼんやりとした視界の先に、淡く光る天井が見える。天井全体が有機ＥＬで光り、下着一枚のゲイルを照らしている。

横たえた体は手足や胴体、首にいたるまで拘束されていた。頭もぼうっとして働かない。かろうじて動く目だけを使って、ゲイルは辺りを見回した。

白い天井。白い壁。窓も扉も見えない、ただ白い部屋。そうだ、ここはキャサリンの研究室に似ている。彼女はステロタイプな人間で、研究室は白で統一しているのだ。

しばらく体をよじったりしていると、首の拘束に少し余裕ができた。だが頭を少し持ち上げるだけで、拘束具が首を締める。苦労して首を巡らせると、やはりここが彼女の研究室だという事が判った。

顎を精一杯上げて後ろを見ると、心電図や数台の医療機器が並んでいるのが見えた。心電図のモニター画面では、緑の線が波を描いている。他の機械から伸びたコードが、ゲイルの体のあちこちに繋がっていた。

さらに首を巡らすと、自分の足の向こうに人影があった。いや、それは人ではなく、物言わぬ巨大な機械であった。

人の体を模して作られた作業機械は、沈黙とともに起立している。電源が入っていないのか、それとも待機モードに入っているのか。ゲイルと同じように無数のコードに繋がれた巨人は、主が声をかけるのを待っている忠実な犬のように、ただじっとしていた。

頭が痛い。頭の中に、ぽっかりと何かが欠けた空洞がある。欠けたものが何かは判らないが、確実に何かが欠けている事だけは実感できる。脳ミソがまるで、穴だらけのチーズのようだ。しかもその穴に、まったくそぐわない別の何かを挿入されている。繋がらない記憶。覚えのない知識。いったいいつ、どこで自分はこんな経験をしたのか。だが確かに情報として自分の脳にある。とんでもない違

和感に気分が悪くなる。
ゲイルが目を覚ますのを見計らったように、どかどかと大勢の人間が室内に入って来た。無いと思っていたが、どうやら扉は機械類の先にあったようだ。あっと言う間にゲイルは白衣を着た集団に囲まれた。
声を上げようとするが、声が上手く出ない。掠れた声で誰だ何だと叫ぼうが、白衣を着た者たちは無言でモニターの数値を記録したり、操作盤（コンソール）をいじったりしている。
また扉が開いて誰かが入ってくる。今度は白衣ではない。宇宙連邦治安維持局（スメイカー）の制服を着た男が部屋に入って来ると、白衣を着た連中に緊張が走った。
白衣の一人が、制服の男に敬礼をする。白衣の男は、相手が明らかに自分より年下なのにも関わらず、恐縮した態度で接していた。
「ダラズ係長、被験者が目を覚ましました」
「異常は？」
「ありません。肉体（ボディ）は今のところ順調です。ただ……」
「ただ、何だ？」
「脳に若干の後遺症が残ります。具体的には、変則的な記憶の欠如や性格の変化が出る可能性が高いかと……」
このまま作業を続けますかという問いに、ダラズはほんの僅かだけ考える姿勢を見せた。だがすぐに瑣末な問題だという結論に至る。
「作業を続けろ。記憶の混乱（フィードバック）に注意し、脳神経（シナプス）を形成、接続。人格や精神に障害が起こったら直ちに対処。問題があるなら全て消去して、再インストールしてもいい。ボディは壊れても構わんが、データの保存を最優先しろ」
「りょ、了解しました……」
白衣の男はダラズに再び敬礼をすると、他の者たちに向けて指示を出す。部下たちは黙々と作業に取り掛かった。
「さて……」
ダラズが神経質そうに、片手の小指で眼鏡の位置を直す。ゲイル

に近づきしげしげと彼の姿を眺めると、口の端を歪めてほくそ笑んだ。
「いい格好だな、ゲイル。気分はどうだ？」
ゲイルの気分は最悪に決まっている。だがそれ以前に、どうして自分が実験動物のような扱いを受けているのか見当がつかない。
「恋人を利用して連邦学術院（アカデミー）からデータを盗み出し《ハッキング》、それを自分のものにするとは。なんて悪い奴なんだお前は」
ダラズの言葉は、ゲイルをますます混乱させる。まったく身に覚えのない話に、頭が痛みを増した。
連邦学術院は、この世のありとあらゆる技術や知識を研究するための機関である。宇宙の英知を集めたこの機関には、様々な研究者が集まる。ゲイルの恋人、キャサリンもその一人だ。
そして連邦学術院には、もう一つの役割がある。それは、個人や組織で所有するには、あまりにも危険な技術や知識を封印する事だ。機関の機密には、惑星はおろか宇宙そのものを破壊しかねない危険な技術（テクノロジー）が数多く存在する。
「俺が……キャサリンを利用しただと？」
「そうだ。お前は研究員の彼女を使って、連邦学術院の機密を盗み出したんだ。これは極刑を免れない大罪だぞ」
「そ、そんな……」
自分が処刑される。しかもそれが身に覚えのない罪によって。あまりにも理不尽な現実に、ゲイルは目の前が真っ暗になる。ダラズはゲイルの絶望した表情に、満足げに笑った。
「だが運が良かったな。お前も知っての通り、我々宇宙連邦治安維持局は、そういった技術や知識を持つ者を取り締まる機関だ。お前は今や、個人で持つにはあまりにも強大な力を有している。言い換えれば、お前はその辺の兵器よりも危険な存在なんだよ」
「危険な存在……俺が？」
「そうだ。お前の体には、連邦学術院に封印されていた数々の禁忌が詰め込まれている。よってお前の身柄は今後、我々に管理され

る事になる」
殺されるよりはマシだろうと、ダラズは何の慰めにもならない事を言う。宇宙連邦治安維持局に管理されるという事は、人間としてではなく一つの兵器として管理されるのと同じだ。
「俺が……兵器……」
「そうだ。お前は我々が求めていた兵器だ。連邦学術院は、我々がいくら連邦宇宙軍（ユニオン）を牽制するために武力が必要だと要請しても、一度封印したテクノロジーは決して表に出さなかった。だが遂にその力を手にする事ができた。それがお前だ。お前は我々宇宙連邦治安維持局の――いや、私のものだ。私の手足となって働け」
ぎりぎりとゲイルが歯を軋ませる。ダラズの自分勝手な物言いに、怒りが込み上げてくる。何が私のものだ。何が私の手足だ。自分は物でも兵器でもない。人間だ。
「ああ、そうだ。一つ礼を言っておこう。お前を検挙する事で、私の手柄が一つ増える。これで昇進は間違いなしだ」
歯茎から血を滲ませるほど強く噛み締め、獣のようにゲイルは唸る。これほどまでに侮辱されたのは生まれて初めてだ。だが獣の如く繋がれた体は、彼の怒りがダラズに及ぶのを妨害していた。何より、硬化テクタイトで作られた戒めは、人の力で破れるものではない。
「どうした、悔しいのか？　ならば一つ良いニュースをやろう。お前の恋人……キャサリンとか言ったか」
恋人の名を聞き、ゲイルの目に理性が戻る。自分の事で失念していたが、ここは彼女の研究室なのだ。なのに姿が見えない事に、どうして気づかなかったのだろう。
「彼女も本来は極刑だったのだが、お前に騙され利用されたという事で、情状酌量となった」
「それじゃあ、彼女は……」
助かるのか、という言葉は声にならなかった。彼女が極刑を免れたというだけで、ゲイルは安堵のあまり声を失っていた。

「ただし、彼女は精神を電脳に移植後、我々が管理する。肉体は冷凍保存だ」
ゲイルは息を飲む。それではただ殺されていないだけで、死んだも同然ではないか。
「どうして……どうしてそんな事を……？」
嗚咽のような問いかけに、男は冷ややかな声で答える。
「人質だよ。お前を私に従わせるためのな」
たったそれだけのために。たったそれだけのために彼女の肉体から魂を抜き取り、あまつさえ肉体を氷漬けにしたのか。
「うがあああっ！」
ゲイルは怒りで目の前が真っ赤に染まり、喉が裂けんばかりに叫ぶ。びりびりと壁を振動させる咆哮に、周りで作業をしていた白衣の男たちが動揺する。
怒りに身を任せてゲイルは暴れる。枷が肉に食い込むのを無視し、我を忘れて暴れる。だが硬化テクタイト製の枷は、たとえ重機を使おうともびくともしない代物なのだ。
が――。
びし、とゲイルの両腕を拘束していた枷にヒビが入る。次に両足、腰、首の枷にも次々と亀裂が入った。
「殺してやるっ！」
呪詛のような気合とともに、遂にゲイルを繋いでいた枷が砕け散った。背筋の力だけで天井まで飛び上がったゲイルは、身を翻して両足で天井を蹴る。
有機ＥＬの天井に大穴が開く。天井を蹴った勢いで、ゲイルはダラズに向かって飛んだ。
「死ねえっ！」
必殺の念を込め、ゲイルは男に拳を振るう。硬化テクタイトをも引きちぎる筋力で振るわれた拳は、ダラズを原型留めぬ肉塊に変えようと襲いかかる。

「ぐあ……っ！」
突如、ゲイルの頭に激痛が走る。脳に直接溶けた鉄を流し込まれたような痛みにバランスを崩し、ダラズの側に転げ落ちた。
「あ……頭が、割れる……」
床で頭を抱えて悶絶するゲイルの顔を、ダラズが踏みつける。
「阿呆かお前は？　銃にだって安全装置があるだろ。お前のような凶悪なケダモノを、何の躾もせずに野放しにするとでも思ったか？」
ダラズは何度も足を捻り、ゲイルの顔を靴底で踏みにじる。
「お前がおいたをしないように、頭の中を少々いじらせてもらった。宇宙連邦治安維持局――いや、この私に邪な考えを抱くだけで、脳に激痛が走るようにな」
顔を踏む男の足よりも、脳を直接襲う激痛にゲイルは悶える。いかに強靭な肉体であろうと、脳を焼き焦がす内部からの苦痛には抗いようがない。
「あの女を生かすも殺すも、すべて私の気分一つだ。恋人が大事なら、大人しく私に従い手足となれ。そしてもっと私を出世させろ」
痛みが増し、気が遠くなる。薄れゆく意識の中で、ゲイルは恋人の名を呟く。だがその声は、ダラズの笑い声によってかき消された。

7

「ゲイル、起きてください。ゲイル」
相棒の呼ぶ声で、ゲイルは目を覚ました。納屋の中は、まだ暗い。部窓から覗く夜空には、まだ星が輝いている。
「何だよサム……もう朝メシか？」
「通信が入りました」
まだ眠気が覚めないゲイルは、欠伸をしながら目をこする。夢見が悪かったせいか、やけに喉が渇いていた。
「通信？　定期報告はまだのはずだろ？」
「とにかく応答してください」
出します、とサムの両目が光ると、納屋の暗闇に一人の男性の姿が現れた。立体映像（ホログラフ）だ。
「貴様ら、仕事は万事順調か？」
通信相手の姿を見た瞬間、ゲイルは露骨に嫌な顔をして舌打ちをする。
「いったい何時だと思ってるんだよ。今が朝に見えるようなら、眼鏡と時計を買い換えるんだなクソ野郎」
頭をかきながら、ゲイルは男に向かって悪態をつく。だが男は冷笑を浮かべるだけで、まるで気にした様子はなかった。
「相変わらず口の利き方がなってないな。ダラズ・ウェストパック特務捜査課長殿と呼べ」
「フン、誰のお陰で課長になれたと思ってやがる。お前が昇進できるのは、俺たち特務捜査官が挙げた功績を掠め取ってるからだろ」
「飼い犬が獲って来た獲物を、主人が食って何が悪い。貴様ら犬は黙って私のために狩りをすれば良いのだ。それとも、恋人がどうなっても構わないのか？」
爬虫類じみた笑みを浮かべ、ダラズは片手で眼鏡の位置を正す。薄い色のついたレンズの奥の眼光は、彼が冗談や脅しで言っている

のではない事を証明している。
「てめえ……。ぐっ……」
ゲイルは敵意を剥き出しにするが、すぐに苦痛で顔を歪める。ダラズに怒りを覚えるだけで、脳に粛清の痛みが走るのだ。
「どうした？　また良からぬ事を考えたか？　犬でも痛みを与え続ければ従順になるというのに、貴様はいつまで経っても学習しないな。この犬以下め」
嘲笑するダラズの声が、ゲイルの痛みを増加させる。ダラズへの怒りの炎が燃えるほど、熱く脳を焼かれる。だがゲイルはダラズを憎む事をやめない。痛みに屈して服従するくらいなら、脳を焼かれて発狂する事を選ぶだろう。だがそれはできない事だ。
「まるで狂犬の目だな。噛みつきたくてウズウズしているようだ」
「よく解かってるじゃねえか。それが立体映像じゃなかったら、今すぐ噛み殺してやるんだがな」
痛みを抑え込み、ゲイルはにやりと笑って骨すら噛み砕く歯を見せつける。威嚇するようにがちがちと鳴らすと、完璧に安全だと判っているダラズですら、僅かにたじろいだ。
「無駄話はこれくらいにして、そろそろ本題に入っていただけませんか。ダラズ・ウェストパック課長殿」
「む……そ、そうだな……」
サムの言葉に、ダラズは冷静さを取り戻す。気を落ち着けるように眼鏡を正すと、先ほどまでの怯えた様子はどこにもなかった。
「それで、どういったご用件でしょうか？　定期報告はまだだと思いますが」
「なに、キャサリンが稼動したのをこちらで確認したのでね。その理由を問い質しに来たのだよ」
「チ、いちいち小言を言いにきやがって。お前は小姑か」
「ゲイル、経費は無限じゃないのだよ。あれを稼動させるのにいったいどれくらいのエネルギーを必要とするのか、知ってて言っているのかね？　私が納得できる理由があるのなら、言ってみたまえ」

「私が報告します」と、サムが片手を上げる。
「我々は標的の位置を特定するサンプルを入手しました。そのデータを元に惑星全域をサーチする事で、捜査の時間が短縮され、結果的に経費節約になると判断したのです」
ゲイルはポーチを探ると、蟻頭から抜き出した核を取り出した。
「こいつがそのサンプルだ」
ダラズはゲイルの手の上で光る核を見て、ふむと頷く。ぶつぶつと何か小声で呟いているのは、頭の中でソロバンを高速で弾いているのだろう。経費はかかるが短期間で捜査を終えるのと、経費を安く抑えても捜査が長引くのでは、どちらが自分の評価に良いか。ダラズは耳から煙が出そうな集中力で演算する。
「……まあ今回は大目に見てやろう。ただし、今回だけだぞ。経費に見合う結果が出せなかった時は、覚悟しておけ」
捨て台詞を残し、ダラズの姿は掻き消えた。どうやら彼の弾いたソロバンは、サムの判断を是としたようだ。
サムの両目から光りが消えると、納屋に再び暗闇が訪れる。蔀窓から入る僅かな星明かりだけが、うっすらと中のがらくたを浮かび上がらせていた。
「フン、覚悟するのはてめえだ」
ゲイルはダラズが立っていた場所に唾を吐く。立体映像だろうが、彼が立っていたというだけでその地面が汚染されたかのような反応だ。
「管理職というのは、経費や部下の事で頭を悩ませるのが仕事ですからね」
「フン。あんな奴、上司でも何でもねえ。ただの敵だ」
「気持ちは解かりますが、彼しかキャサリンを助けられないという事を忘れないでくださいね」
「わぁってるよ。それに、俺たちは直接あいつを攻撃できない。……何とか上手い手を考えないとな……」
う、と眉間に皺を寄せるゲイル。だがそれは知恵を絞って考えて

いるせいではない。恋人を奪った憎き相手に怒りを覚えるだけで、彼の脳には耐え難い苦痛が走るのだ。だがその痛みが脳改造手術の後遺症で記憶障害を持つ彼に、キャサリンを助けたいという思いと、ダラズたちを憎む気持ちを深く刻み込んでくれるのだ。

だから彼は、この脳が焼け付く痛みをあえて受ける。この思いを決して忘れないように。

「幸い、我々には時間だけはあります。焦らずにじっくりと策を練りましょう」

「……そうだな。こればっかりは焦りは禁物だ。失敗は許されないからな」

ダラズ一人を殺すくらいなら、方法などいくらでもあるだろう。だが冷凍刑にされたキャサリンを解凍し、精神を電脳から肉体に再移植する権限を持つダラズにとって、彼女は人質というよりは保険だ。無論、ダラズもそれを計算に入れているはずである。

苛立つ気持ちを抑えつつ、ゲイルは再び横になる。今度は目が冴えて、なかなか寝付けなかった。

8

翌朝、サーシャが勢い良く納屋の扉を開けると、ゲイルの奇妙な姿に意表を衝かれた。

「きゃあっ！」

驚いて悲鳴を上げる。それもそのはず、ゲイルは目を開けて眠っていたのだ。しかも手足が全てばらばらの方向を向いている。いったいどういう寝方をすれば、こんな格好になるのか見当もつかない。寝相が悪いというレヴェルを遥かに超えていた。

「おはようございます、サーシャ」

「お、おはようサム……」

「どうかしましたか？　顔がひきつってますよ？」

朝から珍妙なものを見たという顔をするサーシャに、サムが体育座りのまま訊ねる。サーシャは、こんな格好をして寝ている奴の隣にいて平気なサムのほうがどうかしていると思った。

「あ、あのさサム。こいつって、いつもこんなに寝相が悪いの？」

サーシャの問いかけに、サムはふむ、と改めて相棒の寝姿を見る。

「今日はいくらかマシなほうですね。酷い時には三点倒立をしていたりしますから」

「どういう寝返りを打ったら、そんな体勢になるのよ……」

「さて……私には答えかねます」とサムは小首をかしげた。

見ればゲイルはレム睡眠中なのか、眼球がぴくぴく動いていた。痙攣するような黒目の振動に、サーシャは「ひいっ」と小さく悲鳴を上げる。

「ああもう、気持ち悪い！」

あまりの気味の悪さに、サーシャはゲイルの毛布を引っぺがす。ゲイルはごろごろと床を寝転がると、壁に勢い良く顔面からぶち当たる。

「ごっ……！」

「ほら、いつまで寝てるの？　もうお天道様はとっくに昇ってるわよ！」
サーシャが腰に手を当てて怒ると、ゲイルは勢い良く起き上がった。
「何て起こし方しやがる。お前は俺の幼馴染か？」
「なにワケのわからない事言ってるの。さっさと起きないあんたが悪いのよ」
打ち付けた鼻をさすって喚くゲイルを軽くあしらい、サーシャはすました顔で毛布を畳む。態度の悪い客の扱いに慣れた旅館の女将のようだ。
「朝ごはんが片付かないから、早く顔洗ってきてよね」
「朝メシか……。フン、今日はこのくらいで勘弁してやろう」
鼻を鳴らすと、ゲイルは意味不明な捨て台詞を残して納屋から出た。井戸を使って水を汲み、顔を洗う。
「ゲイルの扱いかたを心得てますね。お見事です」
「馬鹿は扱うのが簡単で助かるわ」
サーシャは得意げに胸を反らすが、ふとサムの鎧姿を見て僅かに眉をひそめた。
「……あなた、もしかしてその格好で寝てたの？」
「同じ姿勢という意味でなら肯定ですが、睡眠という部分は否定します」
体育座りのまま、しれっと答えるサム。そういう意味で訊いたわけではないのだが、あまり深く追求してはいけないような気がしたので、サーシャは「ふ、ふ～ん……」と微妙な相槌を打つにとどめた。

朝食が済むと、サーシャはゲイルとサムを連れて村を案内した。
村には大小様々な家が建ち並んいる。人口はせいぜい三百人といったところか。家と家の間隔がまちまちなのは、あちこちに置かれてある岩を避けて建てられているせいだろう。天気のいい朝なので、

庭には干された洗濯物が見える。
村人の多くは朝日とともに農地に赴き、外を歩いているのは散歩をする老人か遊んでいる子供だけだった。サーシャを目にすると挨拶をしようとするが、ゲイルとサムの姿を見ると皆一様に不審な顔をする。老人は精一杯の早足で家に帰り、子供たちはサムの巨大さに目を丸くする。
「みんなサムを珍獣みたいな目で見て行くぜ」
村人の反応を、面白そうに笑うゲイル。
「あんたも珍獣の仲間じゃない」
「失礼な事を言うな」
「なに『心外だ』みたいな顔してるのよ。存在そのものが失礼な珍獣のくせに」
「そう……なのか……」
地面にがっくりと膝をつくゲイルを無視し、サーシャとサムは歩き出した。
奇妙な事に、村には若者の姿がまるでない。仕事に出かけている事を差し引いても、異常と思えるくらい目にする事がまったくなかった。
「今はみんな、見回りに出ているのよ」
ゲイルの疑問に、サーシャが答える。村の若い男は全員自警団に身を置き、この時間は村の近隣を見回っているのだそうだ。男が村を守っている間、女は田畑を耕す。怪物が出没し始めてからのシステムらしい。
「とは言っても、今まで一度も怪物を退治した事ないんだけどね」
「そりゃ素人の寄せ集めじゃあな」
「刈り入れの時期だけは、人手が必要だから見回りも減るんだけど、それ以外はいつも見回りや訓練ばっかりやってるわ」
兵隊にでもなったつもりなのかしら、とサーシャは愚痴を漏らす。どうして男という生き物は、いくつになっても戦争や兵隊に子供っぽい憧れを抱くのだろう。理解に苦しむ。兵として戦に出れば、死

ぬかもしれないのだ。
サーシャは父の事を思い出すと、今でも胸が痛くなる。祖父も母も、きっとそうだろう。
「おい、どうした？」
ゲイルに声をかけられ、サーシャははっと顔を上げる。いつの間にか俯いて歩いていたようだ。
「別に。何でもないわ」
「そうか？　前を向いて歩かないと、躓いて転ぶぞ」
「なによ、子供扱いしないでよ」
「すまん、悪かった」
思いがけずゲイルが素直に謝ったので、サーシャは強く言ってしまった事を後悔した。
「え、いや、その……」
考えてみれば、これまでゲイルへの態度が少しきつかったように思える。助けてもらったお礼もまだはっきりと言っていないし、このままずるずると引き延ばしにするのは気分が悪い。やはりけじめはきちんとつけておかなければ。
「あ、あのね……今さらだけど、助けてくれて――」
「胸がまったいらだから、ガキかと思っちまったよ。紛らわしいんで今度から、年齢と？こっちが胸です？って書いた札を首から下げといてくれ」
両手を叩いて大笑いするゲイル。最初に出会った時、彼を物語の勇者と思い込んだのは絶対に気の迷いだったのだ。心の中で昨日の自分を叱りつつ、サーシャはゲイルの尻に容赦のない蹴りを入れた。
村の中央に来ると、ちらほらと店が見え始めた。町とまでは言わないが、そこそこの数の店が並んでいる。そもそも、食料はほぼ自給自足している。だから必然的に農具を直す鍛冶屋や金物屋、布屋や仕立て屋など生活に密着した専門店が目に付く。
「フン、生意気に貨幣が流通してやがる」

「ん？　何か言った？」
「いや、別に。ところで、あれは何だ？」
ゲイルは、少し離れた小高い丘を指差した。丘の上には丸太で組んだ格子状の柵が建てられ、中には巨大な黒い岩が納まっている。丘は勾配の差が激しく、村の近くは緩やかだが、中ごろになると急激に高くなっている。
岩の向こうには林があり、木のてっぺんが見えた。木の高さから想像すると、岩はとんでもない大きさだった。
「あの大岩はね、昔からこの村にあったの。なんか大昔、火山が噴火した時に降ってきたんだって」
「随分大きい岩ですね。あの火山からここまで飛んで来たのですか？」
「そうよ。村にある岩は、全部その時に降ってきたものらしいわ」
「そういえば、村のあちこちに岩が置かれてましたが、そういう事ですか」
三人の立っている場所からでも、岩の大きさや重さが見てとれる。近くで見れば圧倒されるだろう。岩の放つ存在感が、当時の噴火の凄まじさを物語っている。
「森の怪物の倍以上はデカいな。もしあれが村に転がって来たら、大惨事だろうぜ」
「ゲイル、冗談でも不謹慎ですよ」
冗談めかして笑うゲイルを、サムが注意する。
「大丈夫よ。ああやって囲いをしてあるし、最近何度も地震があったけど、びくともしなかったんだから」
「しかし、万が一という事が――」
突然サムが黙る。直後、地面が揺れ始め、あたかもゲイルの冗談が現実になったかと思われた。
「うおっ、マジかよ？」
「やだ。あんたが不吉な事を言うからよ！」
「俺のせいか？　俺は預言者か？」

「二人とも落ち着いてください」
揺れはそれほど大きくなかったが、用心のために商店から店主や客が外に出てくる。道を歩く人たちも、慌てず騒がず地面に伏せたりそれぞれ避難行動をとっていた。
地震は一分ほど続いた。揺れが完全に止まると、人々は何事もなかったように店に戻ったり散歩の続きを再開する。
「……やっと止まったか」
地面に伏せた状態で、ゲイルは辺りを見回す。他の人々は皆もとの日常に戻っており、地面に伏せているのは彼らだけであった。
「やれやれ、みんな慣れたもんだな」
ゲイルとサーシャは、手や服についた土を払いながら立ち上がる。
「良かった、小さくて。それじゃ、次に行きましょう」
「ああ、とっとと済ませてメシにしようぜ。俺ハラ減っちまったよ」
「あれだけ朝ごはん食べて、まだ食べるつもりなの？」
「あれ？　俺朝メシ食ったっけ？」
「あんた胃と脳ミソに穴が開いてるんじゃないの……？」
漫才のようなやりとりをしながら、二人は並んで歩き出す。ゲイルが後ろを振り返ると、サムはまだしゃがみ込んで両手を地面に着けていた。
「どうしたサム。腰が抜けたか？」
「いえ、少し気になる事が……」
「早く来い。置いて行くぞ」
「あ……」
サムが言い終わる前に、ゲイルは背を向けた。サーシャは立ち上がらないサムを心配そうに見ている。サムは数瞬考えて、結局何も言わずに立ち上がった。

9

◆

太陽が高くなり、陽射しが強さを増す。初夏の田畑を撫でる風は、青々とした臭いをふんだんに孕んでおり、鼻腔いっぱいに広がる草の臭いは、森で感じたそれよりも乾いていて心地良い。

三人が風に吹かれてあぜ道を歩いていると、畑で作業をしている人々が見えた。

人々は額に汗を滲ませながらも、実に楽しそうな顔で働いていた。見回りや訓練が終わったのか、男たちの姿も見受けられる。サーシャは作業をしている人に逐一声をかけて回り、先の地震でケガをしていないか、ケガをした人はいないか訊ねて回った。

そのうち年配のご婦人たちに囲まれ、今度はサーシャが質問される側になった。ご婦人たちがちらちらとゲイルたちを盗み見るたびに、サーシャは真っ赤になって両手を振っていた。

「彼女は善い子ですね。ご近所の人気者といった感じでしょうか？」

「フン、ただのお調子者だろ。あの凶暴さは看板娘ってガラじゃねえぞ」

ゲイルはサーシャに蹴られた尻をさする。素人とは思えない綺麗なフォームで入った中段蹴りは、的確にゲイルの尾てい骨にヒットしていた。ダメージの軽減される尻肉を狙わないところに、天性の素質を感じる。

「それはゲイルが彼女の嫌がる事を言うからでしょう。身体的特徴を侮辱されれば、誰だって怒りますよ」

「けどよお……」

反論しようとしたゲイルに、誰かが「おい」と声をかけた。

声の主を見ると、グレンが数人の若い男たちを連れて前に立っていた。総数五人。その全員が手にそれぞれ武器を持っていた。どう

やら見回りの帰りのようだ。
グレンは愛用の釘バットを肩に担ぎ、いかにも威嚇するような顔で立っている。その後ろに立つ他の連中は、サムの巨体見るのが初めてなのか、驚きを隠せていなかった。
「うちのじじいから話は聞いたぜ。あんたら、この村の用心棒になったんだって？」
「耳が早いな。ま、そういう事なんで、ガキは大人しく家の手伝いでもしてろ」
「何だとテメエ！」
「よせ。手を出すな」
ゲイルの挑発に腹を立てた若者を、グレンが片手を出して抑える。
「今日は挨拶だけだがいいか、よおく覚えておけ。この村は俺たちの村だ。俺たちが守る。よそ者のあんたらはすっこんでな」
行くぞ、と他の連中に声をかけ、グレンは踵を返した。他の若者たちは、大将があっさり引き上げた事に不満顔だったが、すぐに彼の後を追った。
「何だありゃ？　チンピラと大差ないな」
「若さゆえでしょう。温かく見守ってあげましょう」
「俺はあいつらの保護者か？　冗談じゃない。ガキのお守りなんてまっぴらご免だ」
ゲイルが肩をすくめていると、グレンが引き返して来た。何となくばつが悪そうな顔をしている。
「どうした。道に迷ったのか？」
「ンなわけあるか！　言い忘れた事があったんだよ」
そう言うとグレンは、咳払いを一つ挟む。言い難そうに目をきょろきょろさせたり、口をむにむに動かしたりと明らかに挙動不審だ。
「おい、用があるならさっさと言えよ」
「うっせえ。えっと……お前、その……昨日はサーシャの家に泊まったんだよな……？」
「それがどうした？」

「お前……サーシャに何もしてねえだろうな？」
「……はあ？」
「サーシャに手ぇ出したら、ぶっ殺すからな」
恥ずかしさを堪え精一杯強がる姿に、ゲイルは思わず吹き出した。
「ぶわっはっはっは。お前、あいつの事が好きなのか？」
「わ、笑うな！　それより、何もしてねえだろうな！」
「するか！　あんな貧乳、俺の趣味じゃねえよ。それに俺たちは納屋に寝泊りしてるから、余計な心配すんな」
「そうか……。ならいいんだ」
「しかし、ぶふっ……お前がねえ。あいつを……」
全身の筋肉を隆起させて赤面しているグレンの姿に、ゲイルは再び笑いが込み上げる。
「あんな奴のどこがいいのか俺にはまったくもって解からないが、お前もいい趣味してるぜ」
「うるさい！　とにかく話はそれだけだ。あと、この事はサーシャには絶対言うなよ」
「へえへえ。解かったから、とっとと帰って釘バットの手入れでもしてろ」
手をひらひらと振るゲイルに、グレンは何か言いたそうな素振りを見せるが、結局「チッ」と舌打ちを残して仲間の所に戻った。
「見てて微笑ましいほど青春してますね」
「だがあいつも苦労するぜ。なんたって惚れた相手があいつだからな」
「そうでしょうか？　彼女の器量なら彼を尻に敷いて上手く扱うでしょう」
「？胸の薄い女は幸も薄い？って言うだろ」
「……その妄言は誰が言ったんですか？」
「俺だっ」
ゲイルは得意げに親指で自分を指差す。サムが呆れるのを通り越してフリーズしていると、ようやくご婦人方から解放されたサーシ

ャが戻ってきた。
「やれやれ……お待たせ。ねえ、グレンと何を話してたの？」
「いや、大した話じゃない。それよりぼちぼち帰ろうぜ」
「腹が減ったって言いたいんでしょ？　もう、あんたってワンパターンなのよ」
「いいものはいつまでも変わらないんだよ」
「馬鹿は死ななきゃ治らない、とも言うわね」
ゲイルとサーシャが額を突きつけあって睨み合っていると、突然サムが二人の頭を抑え込んだ。
「皆さん、伏せてください！」
直後、轟音とともに大地が波打った。人々は、いとも簡単に地面に投げ出される。
地震はさっきとは比べ物にならないほど強く、長く続いた。その間人々は悲鳴や叫び声を上げながら、ただ地面にしがみつく事しかできなかった。

10

天変地異かと思われるほどの揺れが治まると、ようやく人々の間に安堵の声が漏れ始めた。地面を転がって草まみれになった人。強く地面にしがみついていたために、顔や体中に泥がついた人。皆自分たちの現状を気にする余裕などなく、近くの者と無事を喜び合う事に夢中になっている。

「クソッ、さっき地震があったばかりだってのに、何だってこんなに早く次が来るんだ！」

ゲイルが忌々しげに立ち上がると、服についた土がぱらぱらと落ちる。

「あれは前震です。恐らく、これまでにあった地震もこれの前触れのようなものでしょう」

「って事は余震もあるのか？　冗談じゃないぜ」

「それより被害は？　ケガ人が出ているかも知れないじゃない！　ああもう、薬箱を持ってくれば良かった……」

「サム、余震がいつ来るか判るか？」

「データが少な過ぎて予測不可能です。先ほどは、一瞬早く足の裏のセンサーがP波をキャッチできましたが、直下型の地震だとそれも間に合いません」

「チッ、未開惑星はこれだから困る。せめて震源地くらいは特定できないのか？」

「それならば可能です」

サムが太い指で村の外を示す。

「火山か……。妥当過ぎる場所だぜ」

「震源地はあの火山の麓、地下千メートル以内でしょう。これ以上の精密な計測は、私のセンサーでは困難です」

「いや、それだけ判れば上等だ。噴火の兆候は無いな？」

「残念ながらそれもデータ不足です。ですが、火山内部には大し

た乱れを感じられません」
「断定はできないが、とりあえず今すぐ噴火するってわけじゃないんだな？」
「肯定です。ですが次にもっと大きな規模の地震が起これば、あるいは……」
「やれやれ……化け物の次は火山か。難儀な村だぜ」
ゲイルは頭を掻き毟る。二人が密談している間にも、サーシャは人々の間を走り回り、できる限りの治療を施している。幸いかすり傷程度のケガばかりで、重傷者はこの場にいなかった。耕地で土が軟らかいのが良かったのだろう。
「あたし、村の様子を見てくる！」
一通り治療を終えたサーシャは、居ても立ってもいられなくなり、居住区に向かって駆け出す。だが彼女の向かうその先から、一人の若者が走ってきた。
「グレン？」
グレンは息を切らせ、サーシャの許へ駆け寄る。恐らく全速力でここまで走ってきたのだろう。汗を滝のように流し、息切れで何を言っているのか判らない。きっと「サーシャ、無事だったのか」とでも言っているのだろう。地震の際取り落としたのか、愛用の釘バットは手にしていなかった。それよりも、まず彼女の許へ馳せ参じたのだろう。
「馬鹿！　何であたしなんかを探し回ってるのよ。あんた自警団のリーダーでしょ？　こういう時こそしっかり仕事しなさいよ！」
「し、しかし……俺はお前が心配で……」
「子供じゃないんだから、いちいち心配しないでって言ってるでしょ！　それともあんた、あたしが独りでは何もできないって思ってるんじゃないでしょうね？」
サーシャの剣幕にグレンはたじろぐ。グレンは自分の愛が溢れる行動で、サーシャが感動して抱きついてくる妄想でもしていたのだろうか。だが現実は厳しく、むしろ彼女を激昂させている。

「彼、わかってませんね。色々と」
「幼馴染のくせに、まだあいつの性格が解かってねえのかよ……。見てて可哀相になってくるぜ」
「泣けますね。涙は出ませんが」
ゲイルとサムが二人のやり取りを見物していると、大変だという叫び声が聞こえた。見ると、居住区のほうから若い男が一人、こちらにやってくる。
「グレン、こんな所にいたのか！」
青年は一目散にグレンに駆け寄る。ここに走ってきた時のグレンよりも汗を流し、肩で息をしている。
「おい、どうした？」
青年の必死の形相に、グレンがただ事でない事を察する。喘ぐように何かを伝えようとする青年の肩を、グレンが乱暴に両手で掴んだ。
「大変だ。岩が……大岩の足元が地震で崩れ、今にも転がり落ちそうなんだ！」
「何だって……！」
大岩は、確かに頑丈な柵で囲まれていた。だが土台となる地面が崩れてしまっては元も子もない。あれだけ巨大な岩が村に転がり落ちたら、どれだけの被害がでるか予想もつかない。
「急いで行ってくれ。今他の連中が柵の補強に当たっている。俺はもっと人手を集めてくるから、グレンはみんなの指揮を頼んだぞ！」
「あ、おい……！」
青年はそう言うと、震える足を再び動かして走り出した。
「サーシャは万が一に備えて、村のみんなに避難するように伝えてくれ」
「わ、わかった……。あんたはどうするのよ？」
「俺はみんなを指揮しなきゃならない。それより早く、みんなにこの事を伝えるんだ」

サーシャは神妙に頷く。グレンは次に、ゲイルたちの方へ向き直った。
「あんたたちも手を貸してくれ。人手が足りないんだ」
「何で俺が手伝わなきゃならないんだよ？」
「何でもクソもあるか！　あんた村の用心棒だろ？　村を守るのに手を貸してくれよ！」
「ゲイルお願い。みんなを手伝ってあげて」
二人はすがるような顔で、ゲイルに頼み込む。だがゲイルはそ知らぬ顔をするだけだ。
「俺が頼まれたのは、化け物から村を守る事だけだ。岩は契約にない」
「何だとテメェ、屁理屈こねやがって。それでも人間か？」
非情な態度に、とうとうグレンが我慢の限界を超える。力任せに胸座を掴み上げるが、ゲイルの態度に変わりはない。
「そんな大人げない……。手伝ってあげましょうよ」
相棒が提案しても、ゲイルは一向に首を縦に振らない。こうしている間にも、村の危機は刻一刻と迫っている。
「クソッ、もう頼まねえよ！」
とうとう痺れを切らし、グレンは掴んでいたゲイルの胸座を乱暴に離す。憎しみすら篭った一瞥をくれると、大岩へと向かって走って行った。
「フン、人をあてにするな。自分の村くらい自分でまも――」
乾いた音がゲイルの頬から鳴る。サーシャが力一杯ゲイルを叩いていた。
「何すんだよ？」
サーシャは無言だった。大きな目にいっぱい涙を浮かべ、悔しそうに歯を食いしばり、今にも泣き出しそうな顔でゲイルを睨んでいる。
「あんた……最っ低の人間だわ」
「だからどうした。俺は都合のいいヒーローじゃない」

「だから手を貸さないって言うの？　あんたって血も涙もない人ね」
「そんなもん、とっくの昔にねえよ」
「馬鹿っ！」と大声で言い残して、サーシャは居住区へと駆けていった。後に残されたのはゲイルと、相棒に無機質な視線を注ぐサムだけだ。
「……何だよ？　言いたい事があるなら言えよ」
「余計な事に関わっている余裕などないことは、私だって解かっています。ですが困っている人を助けられるだけの力を持っているのに、どうしてそれを使わないのですか？　他人を見捨ててでも、恋人を助けたいのですか？」
「……」
「今の貴方を見たら、キャサリンは悲しむでしょうね……」
言い終わるとサムは、ゲイルに背中を向ける。巨体を揺らし歩き出す相棒に、ゲイルは驚いて声をかけた。
「おい、どこへ行くんだよ？」
「彼らを手伝いに行きます。貴方はどうぞ、そこで日向ぼっこでもしていてください」
「おいおい冗談だろ？　ちょっと待てよ！」
何度ゲイルが呼んでも、サムは振り返る事はなかった。やがて完全に見えなくなる。相棒に見捨てられたゲイルは、独り取り残された。
「クソッ、勝手にしろ！」
言いようのない苛立ちに、ゲイルは足元にあった石を思い切り蹴る。
石は、村の遥か外まで飛んで行って見えなくなった。

11

◆

村の男たちは老若を問わず、今にも倒れそうな大岩を相手に奮闘していた。

ごっそりと沈下した岩の足元へ、次々と土が投げ込まれる。岩に綱をかけ数人で引っ張っているが、それもどれだけ効果があるか。それだけ巨大な岩が、今まさに村に向かって転がり落ちんとしている。誰もが死に物狂いになっていた。

綱を引く連中の中に、グレンの姿があった。掛け声をかけては指示を出し、指示を出しては掛け声をかける。彼の声に合わせて皆が綱を引くが、岩はびくともせずむしろ徐々に倒れようとしている。

「みんな頑張れ！　ここで踏ん張らなきゃ、俺たちの村がぺしゃんこになるんだぞ！」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶグレン。皆もそれに応じて掛け声をかけ、綱を引く腕に力を込める。

彼らの手は擦り切れ、綱を赤く染めていた。それでも彼らは綱を引く手を緩めない。そうでないと自分たちの住む家が、家族が、生まれ故郷がどんな事になるか想像がつくからだ。その恐怖が、彼らに綱を引く力を与える。

男たちは必死で綱を引いた。だが無情にも岩はぐいぐいと男たちを引きずる。

もう駄目だ――誰もがそう思いかけた時、急に綱が軽くなった。岩が転がったかと思いきや、そうではなかった。

「あ、あんた、来てくれたのか！」

グレンが歓喜の声を上げる。

「今のうちに岩の下に土を詰めてください」

サムだ。サムは数本の綱を両手で持ち、二十メートルはゆうにある岩が倒れるのをぴたりと止めていた。

サムは村の男たち全員を集めた以上の力で岩を引いてくれた。おかげで岩が倒れるのが止まり、このまま土を詰め込めば岩は安定するかと思われた。

だが――

ばつん、という音がして、岩にかけていた綱が千切れる。一本が切れると、ばつんばつんと連鎖的に他の綱も切れ、遂に岩はもう止められないくらい傾いた。

「倒れるぞ。みんな逃げろおっ！」

グレンの叫び声に、岩の前で土を盛っていた男たちが一斉に逃げ出す。蜘蛛の子を散らすように男たちが逃げると、岩が倒れて柵を打ち壊した。

ばらばらになった柵の破片が辺りに飛ぶ。逃げた男たちは、悲鳴を上げながらそれらからも逃げる。頭を抱えて逃げ惑う男のすぐ側に丸太が突き刺さった。

巨岩が丘を転がり始め、男たちの顔に絶望が浮かぶ。家族はもう避難しただろうか。せめて自分の家を避けて転がってくれ。様々な想いや願いが浮かんだが、口から出たのは「もうおしまいだ」という言葉だった。

だがグレンは見た。転がる岩の前に立つ男を。そんな馬鹿な。馬鹿かあいつは。馬鹿だろう。男は逃げも恐れもせず、仏頂面で立っていた。

「何やってんだ！　早く逃げろ！」

グレンは叫ぶ。だが男はまるで聞いちゃいない。拳を握り、まるでその拳で岩を砕かんとばかりに構える。

「馬鹿野郎！　無茶だ。やめろ！」

男はグレンの声に、初めて反応した。

「馬鹿だと？　誰に向かって言ってやがる」

「お前だよお前。死にたいのか！」

「フン、この程度で死にゃあしねえよ。それよりこいつはサービスだ。釣りはいらねえから取っとけよ！」

男はにやりと笑うと、大岩に自ら向かって行った。
「砕けろおおおおおおおおおっ！」
気合とともに、男が岩に拳を打ち込む。
火山が噴火したような轟音に、一瞬岩が破壊された錯覚する。だがみな男が岩の下敷きになったと確信していた。
「な……何ぃ……」
誰かが驚きの声を漏らす。
「嘘だ、ろ……？」
信じられないものを見た。そんな顔がずらりと並んでいた。あの大岩が、ぴたりと止まっている。そんなはずがあるわけがない。
「かってぇ～……。さすがにこれだけデカいと一発じゃぶっ壊せねえな」
岩の陰から男の声が聞こえる。幻聴――否、それは明らかにあの男の声。
踏み込んだ足は膝まで埋まり、打ち込んだ拳は肩まで岩に突き刺さっている。だがそれでも岩は砕けない。膨大な重量が男にかかり、足がさらに埋まる。このままでは、男が岩に押し潰されるは明らかだ。
「サム、ぼ～っと見てないで手伝え！」
男が声をかけると、丘の上から銀の鎧を身にまとった、三メートルの巨体が現れた。
鎧が男の姿を認めた時、鉄仮面から空気が漏れる。それはゲイルがいつもやる「フン」という鼻で笑うような空気の音だった。
「やはり来てくれましたか、ゲイル」
「フン、別に気が咎めたから来たんじゃねえぞ。村がぶっ壊れたら、美味いメシが食えなくなるから来ただけだからな！」
「素直じゃないですね。実に貴方らしい」
「う、うるせえ！　無駄口叩いてないで、さっさとこっちに来い。二人でやるぞ！」
「了解しました」

相棒の許へ駆け出すサム。仮面のような顔は、嬉しそうに笑っているようだった。

巨体とは思えない速度で、サムは丘を下る。

「サム、岩の固有振動数をサーチ。次に岩の中核を割り出せ！」

「了解」

走りながら、サムは命令を実行する。

「終了。目標の固有振動数、及び中核座標を共有」

ゲイルは岩から腕を抜くと、体全体を使って岩を受け止める。岩に抱きついた瞬間、足が太ももまで地面に埋まる。

すぐさまサムがゲイルの反対側から岩に抱きつき、二人で岩を挟みこむ。

「どおおおおおおりゃあああっ！」

ゲイルの掛け声とともに、二人が全身の力を込める。サムの足も膝まで埋まった。二人がさらに力を込めると、巨大な岩がゆっくりと地面から浮き上がった。

どよめきが起こる。村の男たちが総出でも動かせなかった大岩を、たった二人で持ち上げたのだ。男たちは我を忘れ、異様な光景に見入った。

「では始めましょう」

「応よ」

次の瞬間、大岩が空高く放り上げられる。舞い上がった岩は、小石ほどの大きさに見えるほど高く投げられた。

続いて二人は両腕を胸の高さに掲げ、上下左右に振り始めた。

ぶらぶらと大きく振っていた腕の動きが次第に小さく細かくなり、ぶうんと虫の羽音のような音が腕から聞こえだした。

音はどんどん大きくなり、人々は羽虫の大群が現れたかのような騒音に耳を塞ぐ。音が大きくなるに比例して腕の振りが治まっていき、やがて完全に止まった。いや、止まったように見えるだけで、二人の腕は高速で振動していた。腕の振動が空気を震わせ、虫の羽

音のような音を生み出しているのだ。
「行くぞ、サム。遅れるなよ！」
「ご冗談を。一万分の一秒の誤差もなく合わせてみせますよ」
相棒の自信満々の返事に、ゲイルは不敵な笑みを漏らす。
「上等。それでこそ俺の相棒だ」
二人は頷きあうと一斉に飛び上がった。一気に上空の岩まで追いつくと、対照的に構える。ゲイルは両手を開いて腰に当て、サムは両手を開いて肩の高さで。
「必殺、超振動挟撃（ハイブレーションプレス）！」
ゲイルが叫ぶのと、二人が両手を岩に打ち込むのは同時だった。サムの宣言通り、一万分の一秒の誤差もない。まさに完璧と言っていいほど同時に、二人の両手は大岩に叩き込まれた。
二人が放った衝撃波は、正確に岩の中心で重なった。ニ方向からの波動は確実に岩の芯を捉え、混ざり合って増幅され岩全体に広がる。
二人が両手を岩から離すと落下が始まった。落ちる二人と巨岩。このまま落下すれば、二人が無事で済まないどころか、再び岩が転がって村が大惨事になるだろう。
「お、落ちてくるぞおおおっ！」
人々が悲鳴を上げて逃げ惑う。だが彼らの上に、岩は落ちてこなかった。
軽やかに降り立つゲイルと、地響きを上げて着地するサム。それだけだ。頭を抱えてうずくまっていた人々が顔を上げると、顔や頭に小石が当たる。それは、粉々に砕けた岩の破片だった。跡形も無く砕けた岩は、小石や砂となって雨のように降り注いだ。
魔法のように岩が消えた。そうではない。彼らが岩を粉微塵にしたのだ。そう人々が理解した時、口々に歓喜の声を上げ始めた。
「うおおおおおっ！　や、やりやがったあああああっ！」
「助かった。村が……村が助かったんだ！」
「すげえっ！　すげえよ、あんたたち！」

「一週間だなんてとんでもねえ。あんたたち、ずっとこの村に残ってくれよ！」
人々が駆け寄り、ゲイルとサムを取り囲む。その時誰かがグレンとぶつかって、彼は尻餅をついた。
ゲイルの肩に腕を回す者。サムの足に抱きつく者。両手を振り上げて、体で喜びを表す者。感極まって泣き出す者。男たちは、これ以上ないほどの感謝と賛辞を二人に注いだ。ただ一人、グレンだけが放心したように固まっていた。
「どうですゲイル。たまには自ら人助けをするのも悪くないでしょう？」
「フン……男に感謝されても嬉しくとも何ともねえよ」
親指で鼻をこすり、ゲイルは唇を尖らせる。だがすぐに唇の端が持ち上がり、照れ臭いような、それでいて喜ぶ彼らを見て嬉しいような笑みを作る。
「ですが――」
男たちはまだ騒いでいる。とんでもないものを見た興奮と、村の危機が去った喜びが、彼らを子供のようにはしゃがせていた。
「別に砕かなくても、あのまま岩を村の外に放り投げたら良かったのではないでしょうか？」
「あ……」
あれだけ騒いでいた男たちが、ぴたりと静まる。祭りの如き狂乱が、サムの何気ない一言で完全に止まった。

12

ゲイルとサムがサーシャの家に戻ると、家の外にまで人が溢れていた。みな地震でケガをした者たちだ。列の中では幼い子供を連れた母親が、すりむいた膝の痛みに泣いている子供をあやしながら順番を待っている。

「やはりあれだけの震度ですと、被害ゼロというわけにはいきませんね」

「そうだな、大盛況だな」

家の窓からは、リネアとサーシャが目まぐるしく動き回っているのが見える。ゴードも病気の体を押して患者の治療をしていた。今は頭から血を流した老婆に包帯を巻いている。

さながら野戦病院だ。子供の泣き声。妻や夫、恋人の安否を気遣う声。救いの手を差し伸べるどころか、声すら聞こえない姿なき神へ祈る声。

誰もが救いを求めている。だがゲイルが与えられるものは何もない。怪物を倒し、大岩を砕く事はできても、目の前で泣いている子供の涙を止める事はできない。自分ができるのは、破壊しかないのだ。

人の枠を超える力を持っていながら、今の自分の無力さにゲイルはやりきれなくなる。ここには、自分のできる事が何一つない。

「行こう。俺たちがいても邪魔になるだけだ」

ここは自分がいてはいけない場所だ。そう思って立ち去ろうとした時、窓越しにサーシャと目が合った。

「あ……」

サーシャはすぐに目を反らす。それもそうだ。彼女はあれからずっとここでケガ人たちを治療していたのだから、ゲイルが岩を砕いた事を知らないはずだ。彼女の中では、ゲイルは薄情な最低野郎のままなのだ。だから、なおさらここには居られない。居たくなかっ

た。
サーシャの姿が窓から消える。ゲイルに構っている暇などないという感じだ。それでいいとゲイルは思った。そんな暇があるなら、一人でも多くのケガ人の治療に当たればいいと。
「行くぞ」
ゲイルは踵を返す。その背中に、誰かが声をかけた
「ちょっと、どこに行くのよ？」
振り返ると、息を切らしたサーシャが立っていた。服の上に、大きな白い布袋を被っている。頭と腕を通す所に穴を開けただけの、簡素な白衣だった。ところどころ、血や薬品で汚れている。きっと患者ごとに換える暇もないのだろう。
「……どこに行こうが俺の勝手だろ」
ゲイルはサーシャと目を合わせない。そしてサーシャもゲイルと目を合わせない。お互い気まずくて目を合わせられない、と言ったほうが正しいだろう。
沈黙は、そう長くは続かなかった。
「ああ、もうっ！」
サーシャはつかつかと早足で歩くと、ゲイルの手を取った。そのまま否応なく家まで引っ張ろうとする。
「お、おい、何するんだよ？」
「人手が足りないんだから、あんたたちも手伝いなさいよ」
「手伝えって言われても、ケガ人の治療なんてできないぞ」
「消毒用のお湯を沸かすくらいできるでしょ？　うちでは『働かざる者、食うべからず』なの。だから、食べる分はきっちり働いてもらうからね！」
「何だよそれ？　だいたいな、俺はしっかり働いてきたんだぞ」
サーシャの足が止まる。つられてゲイルも立ち止まった。ゲイルの手を掴むサーシャの手に、わずかに力が入る。俯いたまま向けた背中が、彼女の顔を隠していた。
「知ってるわよ……患者さんから聞いたもん。でも、あれはサー

ビスだったんでしょ？　だったらチャラよ、チャラ。わかったらつべこべ言わずに働きなさい！」
肩を上下させるたびに、ゲイルの手も激しく振られた。すべてを吐き出すように言い終わると、ずっとゲイルに背中を向けたまま、上げっぱなしになっていた肩がゆっくりと下がっていく。
「口は災いの元ですね。自分でタダだと言ったのですから、彼女の言い分はもっともです」
ゲイルは力が抜けて項垂れると、空いたほうの手を額に当てる。
「やれやれ……。で、俺は何をすればいいんだ？」
額から手を離し、ゲイルはサーシャに訊ねる。口ぶりはいつもの調子だが、表情はどこか観念したような、それでいてほっとしたような顔だった。
振り向いたサーシャが、ようやくゲイルに顔を向ける。疲れているはずだが、それをまったく見せない晴れ晴れとした笑顔だった。
「じゃあ、ゲイルは井戸から水を汲んで来て。サムは……中に入れないから、外でじゃんじゃん薪を割ってちょうだい」
速やかにサーシャが指示を出すと、二人はそれぞれの持ち場についた。
「さあ、まだまだ患者さんが待ってるんだから、二人ともきびきび働いてね。お昼ご飯はそれからよ」
「へいへい」
「了解しました」
結局、すべての患者の治療が終わったのは夕方だったが、ゲイルは一度もサーシャに空腹を訴えなかった。

13

◆

ゲイルとサムが大岩から村を救ったという話は、瞬く間に広がった。何しろ現場には村の男衆がほとんどいたのだ。彼ら全員が証人だと言っても過言ではない。その日の晩には、二人は村の有名人になっていた。

事件の翌日から、村人たちのゲイルたちへの態度ががらりと変わった。何しろ村を救った英雄である。彼らは進んで二人に声をかけ、礼とばかりに畑で採れた野菜や果物をくれた。家畜を丸々一頭くれる気前の良い人もいた。村長も改めて二人を訪ね、礼を言いに来た。ただし、彼は手ぶらだった。

天気のいい昼下がり。ゲイルは丘の斜面で寝転がっていた。村を歩く人々からは死角になっていて、絶好の隠れ場所だ。

視線の先には林が広がっていた。林の中からは、斧が木を打つ音がする。村の建築資材は、この林が賄っているのだろう。斧の音が複数重なり、調子はずれのリズムを刻んでいる。

「あ〜あ、有名人なんてなるもんじゃねえな」

口に咥えた草きれを揺らしながら、ゲイルは独りごちる。

何かと構いたがる村民から逃れるために丘まで来たが、初夏の陽射しが強いわ木を切る音がうるさいわで昼寝もできない。おまけに丘のあちこちに岩の成れの果てが転がっていて、寝転んだら背中や尻がごつごつする。せっかくの草のベッドが台無しだ。自分がやった事だが腹が立つ。

ゲイルの頭の先には、ついこの間まで大岩が鎮座していた。今では柵の残骸もすっかり撤去され、剥き出しになった土だけが、かつてここに大岩があった事を物語っている。だがこの跡もいつかは周りと同じように草に隠れ、人々の記憶からも消えてしまうだろう。

岩を破壊してから三日経った。あの日以来、掌を返したように村人が親切になり、その恩恵として食事が豪華になった。心なしか、サーシャの態度も前より若干優しくなったような気がしないでもない。相変わらず貧乳と呼べば手や足が出るが、それ以外では以前とは比べ物にならないくらい好待遇だ。

「フン、気にいらねえ」

「何が気にいらないのですか？」

ゲイルの顔に影がさす。目を開けると、サムの巨体が陽射しを遮っていた。

「えらくご機嫌ななめですね。何かあったのですか？」

サムは両肩に大量の木材を担いでいた。地震で倒壊や破損した家屋を修繕するためのものだろう。荷馬車でも一度で運びきれるかどうかの量を、一人で運んでいる。まさに馬車馬の如き働きをしている相棒の姿を見て、ゲイルは唇を歪めた。

「ずいぶん熱心に働いているな。お前は村一番の働き者か？」

「ゲイルこそそんな所でサボっていると、後でサーシャに叱られますよ」

「フン、知ったこっちゃねえよ」

ゲイルは両足を高く振り上げ、下ろす反動を利用して立ち上がる。尻を手で払うと、小石や砂がぱらぱらと落ちた。

「どうせキャサリンのスキャンが終わったらこの村からおさらばするんだ。誰に何と思われようが、関係ないね」

もとよりこの惑星の住人と関わるつもりなどなかったのだ。それがたまたま用心棒になったり、村を岩から救ったりと予定外の事が重なっただけだ。だがそれもあとしばらくで終わる。仕事が片付けば、この星から去るのだ。

「その事ですがゲイル――」

「あんたたち、こんな所にいたのか」

サムの言葉が遮られる。二人に声をかけたのは、地震の時にグレンを呼びに来た若者――ルイスだった。今も走ってきたのか、全身

に汗をかき息を切らせている。どうやら彼の担当は、足を使った伝令のようだ。
「この暑いのに走りこみか？」
「そんなわけないだろ。いや、そんな事よりも話があるんだ。二人とも、悪いがちょっと来てくれ」
ルイスは急いたようにゲイルとサムを促す。彼は二人の返事も聞かずに、こっちだとばかりに先に早足で歩き出した。仕方なく二人はそれに続く。

二人が着いたのは、村の入り口だった。門の向こうでは自警団の若者が二人、門番として立っている。だが二人はゲイルたちが最初に見た時に比べると、明らかに緊張感が欠けており、ルイスたちが来てもおしゃべりに夢中になっている。
「おい、しっかり見張れ。怪物が現れたらどうするつもりだ！」
ルイスが注意すると、二人は驚いて後ろを振り向く。だが注意してきたのがルイスだと判ると、再び談笑を始めた。
「完全に気がゆるんでやがるな」
「あれでは門番の意味がありませんね」
ゲイルとサムの辛辣な言葉に、ルイスは申し訳なさそうに「どうもすいません」と謝る。
「あんたたちが来てから、みんな危機感がどっかに飛んでしまったんですよ。安心しきってるっていうか、頼りきってしまっているんです」
緊張感が欠けたのは、何も門番の二人だけではないだろう。村の住人全体がそんな感じなのだ。期日が限定されているとはいえ、いつ怪物が現れるかと戦戦兢兢していた日々から解放されたのだ。多少なりとも浮き足立つのは仕方のない事だろう。
「あまり我々を当てにされても困ります。何しろ、契約はあと四日しか残っていませんからね」
「解かってる。あんたちにも都合ってもんがあるだろうから、ず

っと村に残ってくれって言うつもりはない。だが他のみんなは、心のどこかで勝手に期待してるんだ。それでみんな気がゆるんじまって……」

「人間というのは、自分に都合の良い結果を信じたがるものですからね」

「フン、人をあてにする根性が気にいらねえ」

ルイスはますます恐縮して俯いてしまった。村人の浮かれぶりを、まるで自分の事のように恥じているようだ。

「それで、話というのは何でしょう？」

ルイスははっと顔を上げると、「ちょっと待ってくれ」と言って見張り櫓へと走った。大声で櫓の上に声をかけると、頂上の見張り台から一人の少年が顔を出した。

「あ、ルイスさん」

まだあどけなさの残る少年は、ゲイルとサムの二人を見ると嬉しそうに笑った。

「二人が来てくれたぞ」

少年はわかったと手を振ると、櫓の梯子を慣れた様子でするすると下りてきた。

「この少年は？」

「こいつはボーエン。村で一番眼がいいから、いつも櫓で見張らせているんです」

ルイスが二人に紹介すると、ボーエン少年は村を救った英雄を間近で見た感動に、目をきらきら輝かせる。嬉しさのあまり大きく開け広げた口は、前の乳歯が二本抜けていた。

「さ、二人に話す事があるんだろ？」

ルイスが促すと、ボーエンは「あ、そうだった」と口元を引き締める。

「最近、怪物たちの様子がおかしいんだ」

「はあ？」とゲイルが怪訝な顔をする。

「だから、おかしいんだって！」

興奮しているのか緊張しているのか、少年の話は要領を得ない。本人も話が頭の中で整理できていないのか、上手く言葉にできないもどかしさで頭をかいたり地団太を踏んだりしている。

「すいません……何しろまだガキなもんで……」

余計な手間をとらせて申し訳ないとばかりに、ルイスが二人に頭を下げる。

「違うよ！　そうじゃないって！」

思ったとおりに意思を伝えられない事が焦りや苛立ちを高め、ボーエンは癇癪を起こしたように暴れ喚きだした。両手で頭をかきむしると、短い栗毛がわさわさと乱れ、よく日に焼けた顔がみるみる赤みをおびていく。次第に涙目になり、泣き出す寸前までエキサイトしてしまっていた。

「時間の無駄だな。もう帰ろうぜ」と提案するゲイル。だがサムはそれを制して、少年の前に屈みこんだ。

「詳しく話していただけませんか、ボーエン」

小さく屈んだつもりでも、サムの巨体は少年には小山のように見えるだろう。だがそれよりも、自分の話を聞いてくれるという姿勢が、少年を笑顔に戻した。

「では落ち着いたところで、貴方が伝えたい事を話してください」

「えっと……ええっと……」

「焦らないで。ゆっくり考えてもいいんです。貴方は見た事、思った事を素直に話すだけでいいのですから」

少年は頷くと、サムの言ったとおりゆっくりと語りだした。

「やけにガキの扱いが上手いな。保父にでもなったらどうだ？」

「誰かさんのおかげで、子供を相手にするのは慣れてますので」

「どういう意味だよ……？」

「さて、どういう意味でしょうね」

ボーエン少年の話では、昨日から怪物たちが何かに引き寄せられるように移動をしていて、彼が確認しただけでも、森を数十頭の怪物が同じ方角へ向かって行ったそうだ。

「今日もたくさん見たよ。けど村に向かってくるのはいなかったから、誰かに言おうかどうか迷っちゃって……」
少年の声が尻すぼみになる。恐らく話したところで、誰も相手にしてくれないと思ったのだろう。それでも意を決してゲイルたちに相談してくれた。彼も村の事を案じているのだ。自警団の立派な一員と言えよう。
「よく話してくれましたね。大変貴重な情報です」
サムが大きな掌で頭を撫でると、ボーエンはえへへと嬉しそうに笑った。
「ですが、みんなを不安にさせないためにも、この事は秘密にしておいてください。怪物が村に近づいた時だけ、私たちにそっと教えてくだされば結構です」
「うん、わかったよ！」
力強く頷くと、少年はいそいそと櫓の上に登っていった。すっかりサムに懐いたようで、何かあればきっと真っ先に教えてくれるだろう。
「おいサム。ガキを手懐けるのはいいが、これのどこが貴重な情報だよ？」
「それは後ほど説明しますよ」
サムは村の外を眺めながら、含みを持たせた声で言った。

14

昼間の快晴とはうって変わって、夜空には雲が立ち込めている。月明かりはおろか、星明りすらない。そして閉め切った納屋の中は、真の闇に満たされていた。

「では、説明します」

サムの両目が光ると、暗闇の中に映像が浮かび上がる。立体的な球体には、大陸や海などの地形が再現されており、見る者が見ればこの惑星を表している事がわかるだろう。陸地は大小の差が激しく、最も大きいものを大陸とするなら、他の小さいものは島と呼んでいいくらいの大きさだった。

球体が回転すると、赤い点が打たれた箇所をゲイルたちに向けて止まる。

「これが、我々の現在地です」

赤い点は、大陸の中央よりやや左下にある。点を中心に、カメラが焦点を合わすように映像が鮮明になると、山の稜線や街道が明確になる。ゲイルたちが蟻頭を倒しサーシャと出会った広大な森は火山の東側に展開し、村はその二つを結んだ線を底辺とすると、二等辺三角形を逆さにした頂点のあたりに位置していた。

「それで、これがいったい何なんだよ?」

ゲイルは壁にもたれながら、つまらない授業を受けている不良学生のように手を頭の後ろで組んで足を投げ出している。

「次に、この映像を見てください」

地図の上に、赤い点以外の黄色い点があちこちに表示された。数える気にならないほどの黄色い点は、大陸のいたるところに散らばっている。だがその大多数は火山や森に散在しており、奇妙な偏りを見せていた。

「これが、約三十時間前にキャサリンから送られてきたスキャン結果です。黄色い点は、怪物から検出したエネルギーの波長と同一

のもの――つまり同種の人工生命体だと考えて問題ないでしょう」
サムの言葉に、ゲイルはもたれた壁からずり落ちる。
「おい待て！　とっくに結果が出てるなら、もっと早く言えよ！」
「これではこの惑星の怪物の生態分布図と同じで、目標の明確な場所を示しているとは言えません。ですから報告する必要はないと判断しました」
ずり落ちた体勢のまま、ゲイルは「なるほど」と唸った。
「次に、約二十時間前の映像です」
映像を早送りするように、地図に変化が起こる。黄色い点がわらわらと動き、大陸の中央を目指して集まる。
「怪物が一斉に移動しています。ボーエン少年の証言も同じです」
少年の言ったとおり、黄色い点が確実に同じ地点を目指して集まっている。速度はまちまちだが、まるで赤い点に引き寄せられているように見えた。
「まるでこの村を取り囲むように集まってきているな」
「いえ、そうではありません。怪物たちは、命令を受けて集まっているのでしょう。恐らくは自分たちを作った主――我々の目標を守るために」
「どうしてそう思うんだ？」
ゲイルの問いに、サムは順を追って説明しましょうと、映像を巻き戻し始めた。
「これが最初の、約三十時間前の映像です。これより以前のデータがないのであくまで推測ですが、この頃から怪物たちに指令が与えられたのでしょう」
「だから、その根拠は何だって訊いてるんだよ」
「森の怪物ですよ」
ゲイルは森で倒した蟻頭の事を思い出す。たしかあの時自分たちは、森の東端から西に移動していた。そして蟻頭も森を東から西に移動していた。サーシャは運悪く、その通り道に入ってしまったのだ。

「怪物がもし、我々がこの惑星に到着した時点で命令を受けていたのなら、東から森に入った我々を迎撃するために、西から東に移動していないといけません。ですが実際は逆。なのでこの時点では目標は我々の存在に気づいていなかったのでしょう」
「じゃあ、どの時点で気がついたんだ？」
「これも推測ですが、ゲイルが怪物を倒すために内燃氣環を発動した時点です」
「ゲ……俺のせいか……」
「この惑星では、怪物以外にありえないエネルギー量ですからね。目標が科学的なエネルギー波長を計測する事によって怪物の分布を管理しているなら、当然異質な波長も検出されているでしょう」
「クソ、調子に乗って暴れたせいで、わざわざ相手に存在をバラしちまったか……。軽く凹むぜ」
ゲイルはばつが悪そうに、頭をかきむしる。
「サーシャを助けるように頼んだのは私ですから、あまり気にしないでください。それに今回は、それが功を奏したようです」
「どういう事だ？」
「ゲイルがこの惑星で内燃氣環を使ったのは、あれ一度きりです。もし目標が我々の位置を常に把握しているのなら、この村に怪物を送り込まないはずがない。ですが怪物はまだ一度も来ていない。それはどうしてでしょう？」
「そうか。向こうは俺たちの存在を捕捉できただけで、今どこにいるかまでは把握してないのか」
「正解です。この村に我々が滞在している事を目標が検知できなかったのは、大岩を破壊する際には内燃氣環が使われなかったからです。敵が現れたのはわかった。だがどこにいるのかはわからない。だから慌てて怪物たち集結させているのでしょう」
そう言うとサムは、二つの地図を重ね合わせる。一方は約三十時間前のもので、もう片方は約二十時間前のものだ。
「この十時間の間に、怪物たちは主からの指令を受けて、一箇所

に集まろうとしています。これはボーエン少年も証言しています」
二つの時間の地図を重ねてみると、一目瞭然だ。黄色い点が、明らかに地図の中央目がけて集合している。
そして二つの地図を重ねて初めてわかったが、十時間の間に黄色い点が増えているような気がする。怪物は、ある一点から湧き出していた。
「そしてこの二つの地図から予測される、黄色い点の集結地点が――」
地図上の黄色い点が、みるみる一箇所に集まる。中には赤い点を通過していくものもあった。数え切れない黄色い点が集まった地点は、黄色い塊になって煌々と輝く。
地図の縮尺が小さくなっていく。黄色い塊にピントを合わせ、どんどん近くに寄る。
闇に浮かび上がった立体映像には、村人たちから『神の住む山』と崇められている火山が明るく光っていた。
「火山、か……。野郎、ここであの化け物を大量生産してやがったんだな」
「間違いなくここに、怪物たちを生み出し操っている張本人がいるはずです。ここまでは理解できましたか？」
「まあ……何とかな。だが、一つ解からないことがある。今回の目標が怪物たちを操っているのは間違いないとして、どうしてわざわざ自分の居場所を晒すような真似をするんだ？」
「もし火山に標的が居ると仮定しましょう。標的は自分が隠れているすぐそばで我々を発見し、しかも見失ったとします。だとすると、我々がいつ迫ってくるかとびくびくし、なりふり構わず守りを固めるのではないでしょうか？」
「つまり、向こうが勝手に勘違いして墓穴を掘ったってわけだ」
ゲイルが楽しそうにがばっと起き上がると、サムは静かに、だが力強く「そうです」と肯定した。
「フン、ようやく見つけたぜ。首を洗って待ってろよ」

ゲイルは舌で唇を舐める。獲物を見つけた猟犬のような笑みだった。
「そこでゲイル、一つお願いがあるのですが……」
目標の位置を特定して高揚するゲイル。上がった士気に水を差すようで気がひけたが、それでもあえてサムは声をかける。だがゲイルはサムの言葉を、片手を上げて遮った。
「どうせ村を通る怪物を退治してくれ、とか言うんだろ？」
鼻を鳴らすゲイルに、サムは静かに頷く。期待はしていない。きっと反対するだろう。何しろ時間が経つほど、それだけ怪物の数が増えるのだ。危険も手間も増えるし、標的が逃走する可能性だってある。何より、二人にとって怪物の駆除は任務外である。速やかに標的を検挙または処理する。それが彼ら、宇宙連邦治安維持局特務捜査官の任務なのだ。
そして任務を遂行する事こそ、キャサリンを助ける唯一の方法なのだ。ゲイルが賛成する可能性は極めてゼロに近い。だが残された村人の事を考えると、無駄だと思いつつ提案せずにはいられなかった。
「いいぜ」
「そうですか。では私一人で、ええっ？」
「聞こえなかったのか？　俺は構わないって言ったんだ」
まったく予想だにしなかった返事に、サムの電脳が聴覚にエラーを出す。すぐさま再起動。記憶野から先の発言を脳内再生。またもやエラー。
「おい、なに固まってんだよ？」
「いえ……ちょっと聴覚デバイスの調子が悪いようで、幻聴が……」
「待てコラ。それじゃあまるで、俺がありえない事を言ったみたいじゃないか」
はい、とサムは素直に言う。何しろサムは、どうゲイルを説得するかという事しか考えていなかった。考えたパターンは、ゆうに数

百通り。だがそれが無駄になった。サムがゲイルの行動パターンを読み違えたのは、初めての事だった。
まだ信じられずに呆然としているサムに、ゲイルは不満げな顔をする。
「勘違いするなよ。別にこの村の奴らに情が湧いたり、目的を忘れたんじゃない。ただ用心棒としての仕事を果たすだけだ。それに――」
「それに？」
「こいつらが村に来てから俺たちが倒したら、また目立つ事になるからな。面倒を増やすのはこれっきりにしたい」
「理由はどうあれ、協力に感謝します」
刺すようなゲイルの視線を真っ向から受け止め、サムは神妙に頷く。
「それで、この村に直撃する怪物は何体いるんだ？」
「計算では、七十二体です」
ゲイルは軽く口笛を吹く。蟻頭を基準とすれば、一体でも充分に村を全滅できるのにそれが七十二体。充分過ぎて、お釣りのほうが多い。
「だが大丈夫か？　仮にそいつら全部ぶっ倒しても、他の怪物が村に向かってきたらキリがねえぜ」
「その心配はありません。怪物たちは目的地に向かう事を最優先しているようで、可能な限り最短距離を移動しています。なので命令の変更がない限り、進路を変える可能性は低いでしょう」
「なるほど……。ならとっとと行くか」
ゲイルは壁から背を離して立ち上がる。
「今からですか？」
「朝までに終わらせるぞ。村に進路をとっている奴以外は、全部集まってから火山の麓で一網打尽にすればいい」
「なるほど」
ゲイルとサムは納屋の外に出る。涼やかな音色を奏でる虫たち以

外、動くものは彼ら二人しかいない。村人たちは、陽が昇るまでぐっすり寝ているだろう。
ここからは時間との勝負だ。朝までに七十二体すべてを片付けて、何事も無かったかのように戻らなければならない。そうしないと、村人たちに余計な不安を与える事になるからだ。
「それじゃ、深夜の虫退治としゃれ込むか」
「長い夜になりそうですね」
「やれやれ、夜勤手当が欲しいくらいだぜ」
二人は地面を蹴り、高く跳ねる。月も星も出ていない闇夜の空に、二人の姿が消えていった。

15

◆

いつもと同じように、サーシャは夜明けとともに目を覚ました。
窓の外は、昇り来る朝日が眩しい。空には雲一つなく、今日も良い天気になりそうだ。天気が良いと、無性に洗濯がしたくなる。だがシーツは昨日洗ったし、続けて洗濯できるほどサーシャは衣装持ちではない。
さてどうしたものか、と思案しながら大量の朝食を調理していると、この家に来てまだ一度も服を洗濯していない人物の顔が思い浮かんだ。

扉にかけた手を一旦止めて、サーシャは覚悟を決める。これから何を見ても驚かないという覚悟だ。だが彼女が何度覚悟を決めても、それを打ち砕くほどの惨状が納屋の中に待っている。ご近所では、朝のサーシャの悲鳴が一番鳥の代わりになっていると評判だ。そんな汚名を返上するために、今日は一際覚悟を固める。
「……よし」
気を引き締めて勢いよく扉を開けると、朝陽が納屋に射し込んで埃をきらきらと輝かせる。覚悟が僅かも揺るがぬうちに、サーシャは納屋の中に踏み込んだ。
「いつまで寝てるの？　さっさと起き――」
ここ数日繰り返してきた台詞が止まる。これまでは、いつもここでゲイルの奇妙な寝姿に驚いて悲鳴を上げていたのだ。
だが今日は違う。扉から届く光の中で、ゲイルのぴったりと揃った両足が見える。まともだ。驚くほどまとなくらい、ゲイルはうつ伏せに寝ていた。
「なんだ……普通に寝てる時もあるんじゃない……」
ほっと胸を撫で下ろす。これまで猟奇殺人事件の死体のような寝

相のゲイルを見るたびに、サーシャは心臓が止まるような思いをしてきたのだ。しかし今日は違う。普通に寝ているのなら、何を恐れる必要があろうか。サーシャは余裕をもってゲイルに近づいた。
扉から少し離れた壁側に、ゲイルは気をつけをした状態で横たわっている。ゆっくりと近づくと、暗くて見えなかったゲイルの尻から上が露になる。
朝日の影響が目に残っているせいなのか、何だかゲイルの服が緑がかっているような気がする。そして首から上を見た瞬間、サーシャは息を飲んだ。
「ひやあああああああああああっ！」
すっかり気を抜いていたサーシャは、やはり今日も悲鳴を上げた。うつ伏せに寝ていると思い込んでいたが、ゲイルの顔は天井を向いていた。首が百八十度後ろに回った状態で、白目を剥いて寝ている。しかも丘に上がった魚のようにぱくぱくと唇が開閉しているので、まるで死してなお憎悪の言葉を吐き出すゾンビのようだ。
「おはようございます、サーシャ」
そして今日も、いつものように尻餅をついているサーシャに向けて、心なしか緑色なサムが爽やかな朝の挨拶をするのであった。

ゲイルは眠たそうに目をこすりながらも、皿を山のように積み上げている。寝起きというより、まだ半分寝ているようだ。何度見ても圧倒される食欲だ。細身の体のどこに、これほど大量の食料が入っているのだろう。それ以前に、これだけ食べてるのにどうして太らないんだろう。なんだかずるいとサーシャは思った。。
行き場のない怒りをぐっと堪える。それよりもやらなければならない事があった。
「ねえ、ゲイル」
「んあ？　デザートか？」
「ないわよ、そんなもの。そうじゃなくて！」
サーシャは、大きなあくびをしているゲイルをじろりと睨む。

「何だよ？」
「何よその服？　あんたいつの間にこんなに汚したの？」
さも汚いものを触るように、サーシャはゲイルの服を指の先でつまむ。出会った頃にあちこちあった焼け焦げが見えなくなるほど、何か得たいの知れない緑の汁で染められていた。
「どうしたらこんなに緑に染まるの？　草むらに一日中寝転がってたって、こんなにならないわよ？」
「気にするな。そのうち綺麗になる」
「なるわけないでしょ！　そもそもあんたたち、ここに来てから一度も着替えてないじゃない」
「だって着替えなんか持ってねえもん」
ゲイルは寝ぼけたように言う。そうだ。そもそも出会った時から、ゲイルたちは手ぶらだったのだ。荷物も何もないのだから、着替えを持っているはずがない。ずっと着の身着のままで旅をしてきたのだろうか。それ以前に手ぶらで旅をする事ができるのか。
「じゃあ、今までずっと同じ服を着ていたの？」
ああ、とゲイルはさも当たり前だという顔をした。
「うわ、不潔……。最低……」
汚いものを見る目でサーシャが言うと、ゲイルはふふんと小馬鹿にするような笑みを漏らす。
「この田舎者め。いいか、この服にはナノマシンが組み込まれていて、汚れようが破れようが自動的に元に戻る優れものなんだ」
「え、なに？　何言ってるかさっぱりわかんない」
サーシャが顎に指を当てて首をかしげると、ゲイルは面倒臭そうに頭をかく。
「つまり、着替えたり洗う必要がないんだよ」
「へ～そうなんだ。凄いね～」
感嘆して拍手するサーシャに、ゲイルは満足そうに「どうだ解かったか」と胸を反らす。
「じゃ、さっさと脱いで」

「お前、人の話聞いてたか？」
「聞いてたわよ、あんたの寝言を。だいたいそんな便利な服があったら、この世の服屋さんはみんな廃業よ。子供みたいなこと言ってないで、いいからそれ脱ぎなさい！」
サーシャは問答無用とばかりに、追いはぎも泣いて帰る速度でゲイルに襲いかかる。
「嘘じゃねえよ。お、ちょっと、待て。引っ張るな」
「こうなったら実力行使よ。あれ……これどうやったら脱げるのよ？」
「馬鹿、やめろ……あ……」
「あ、なんかこりこりしてる。これかな？」
「ちが……それは俺の乳首だ！」
ゲイルの体をあちこちまさぐるが、どこを探してもボタンはおろか、縫い目も繋ぎ目も見つからない。おまけに服が体にぴったりと密着しているので、まるでゲイルの体を直接触っているようだ。だが手に伝わる感触は、サーシャがこれまで触ったどの生地とも違う。例えるなら、もの凄く細い鋼線を編んだような、しなやかで硬い奇妙な手触りだった。
サーシャがゲイルの服を脱がせようと悪戦苦闘していると、台所で洗い物をしていたリネアが、騒ぎを聞きつけてひょっこりと顔を出した。暴漢のようにゲイルの服を剥ぎ取ろうとしていた娘と母の目が合う。
「あらあら、サーシャったら大胆ね。でもお母さん、そういう事はもっと暗くなってからのほうがいいと思うの」
リネアはそう言ってにっこり微笑むと、何事もなかったように引っ込んだ。
「あ、ちょ……っ、お母さん！　違うの。誤解よ。って言うか、それが母親の言う台詞なの？」
慌ててゲイルから離れ、弁解するサーシャ。その隙を逃さず、ゲイルは「今だ！」と逃げ出した。

「あ、コラ！」
すぐさまサーシャはゲイルの後を追いかける。ばたばたと慌しい足音が過ぎると、リネアはくすりと笑って洗い物に戻った。
庭でサムが水を蒔いていると、ゲイルが玄関から血相を変えて飛び出してきた。危うくぶつかりそうになるが、ゲイルが咄嗟に体を捻り、何とか衝突は回避できた。
「ゲイル、朝から何を慌てているのですか？」
「逃げろサム。この家には痴女がいるぞ！」
「はあ？」
ゲイルはたたらを踏んでいた体勢を立て直すと、一目散に走っていった。サムはわけが判らず呆然とその場に立ち尽くす。
何かに追われるように走っていったゲイルの背中が、瞬く間に小さくなる。とても徹夜で怪物を相手に格闘したとは思えないほどの、見事なスプリントだった。
「待ちなさいゲイル！」
ゲイルの姿が見えなくなった直後、今度はサーシャが走ってきた。振り返ったサムは、彼女の鬼のような形相に思わずかける言葉を失う。
「サム、ゲイルは……あの馬鹿はどっちに行ったの？」
ゲイルがまた何か彼女を怒らせるような事をしたんだろうと、サムは瞬時に状況を理解する。理解するというよりも、もう飽きるほど見た状況だ。これは下手にごまかしたり、ゲイルを庇うような真似はしないほうが吉だろうと、彼の優れた頭脳は瞬時に判断した。
「さっきあっちに走っていきましたよ」と、サムが指を指し示すが、ゲイルの姿はとっくに見えなくなっていた。
「もう、逃げ足と食べるのだけは速いんだから」
サーシャは悔しそうに地団太を踏む。力強く地面を蹴る足を止めると、彼女はゆっくりとサムに向き直った。
「サム」

「何でしょう？」
じろじろと頭の先から爪先までサーシャに見られ、サムは思わずたじろぐ。
「貴方もそうとう汚れてるわね。ちょうどいいわ。洗ってあげるからその鎧、脱いで」
どうやら、全身に浴びた怪物の体液をそのままにしておいたのがまずかったようだ。だがすべての怪物を倒し終わった時にはすでに夜明けが迫っていたため、洗い落とす暇がなかったのだ。
こんな説明をサーシャにできるわけがなく、サムはどう適当な理由をつけて断ろうかと思案する。しかし、ただでさえゲイルを取り逃がして気が立っているであろう彼女の機嫌を、これ以上損ねるのはまずい。なるべく当たり障りのない断り方をしなければ。
「お心遣い感謝します。ですが寝泊りさせてもらっている上に、これ以上の迷惑はかけられませんよ」
「あら、気を遣わなくていいのよ。それよりも、そんなに鎧が汚れていたら気持ち悪いでしょ？」
「いえいえそれには及びません。旅慣れた身ですので、多少の汚れは気にしませんよ。どうぞ私の事など構わずに、貴方の仕事をしてください」
やんわり拒否しようとしても、なぜかサーシャは食い下がってくる。ここまで執拗にされると、親切というよりむしろ怖い。
「いいから遠慮しないで。サムが気にしなくても、あたしが気にするんだから」
「ですが……ご婦人の前で裸になるのはちょっと……」
「恥ずかしがらなくてもいいのよ。患者さんの清拭で、男の人の裸なんて見慣れてるんだから」
「ああ、そうですか……」
もうこれ以上ごまかすのは無理のようだ。あまり断り続けるのも不自然だが、彼女の要求にはとても応えられない。窮地に追いやられたサムの電子頭脳は、もっとも原始的かつ効率的な解答をはじき

出した。
つまり、逃げるが勝ちである。
サムは、さも今思いついたかのように「あ～」と声を上げると、ぽんと手を叩いた。
「そういえばゲイルにようじがあるのをおもいだしました」
サムは言うや否や、サーシャに背を向けて駆け足を始める。大根役者も裸足で逃げ出す棒読みの上、動きもかなりぎこちない。突如始まったサムの奇妙な言動に、サーシャは度肝を抜かれて呆然となる。
「ついでにみずあびでもしてきますそれではごきげんよう」
終始棒読みでサーシャに手を振ると、サムは鎧ををがしゃがしゃ鳴らしながらゲイルの消えた方向に走っていった。
意外に軽快な足取りでサムが去っていくと、ようやくサーシャは正気を取り戻した。
「……はっ。いない！」
慌ててサーシャは当たりを見回すが、サムの姿はとっくになくなっていた。

16

ゲイルの次はサムにも逃げられ、二人の服を洗濯しようというサーシャの予定は、脆くも崩れ去った。

「ちぇっ、サムにも逃げられちゃった」

足元の小石を蹴る。小石は庭を転々と転がり、井戸に淵に当たる。石を積み上げた淵には、大きなたらいが立てかけてあった。今日このたらいを使うはずだったのに、今は自分と同じで予定が空いてしまっている。

サーシャはとぼとぼとたらいに近づくと、井戸野淵に腰かけた。

「あと三日か……」

ゲイルとサムがこの村に来てから、今日で四日目になる。用心棒として滞在するのが一週間だから、残すところあと三日で二人との別れが来るのだ。

「それまでに、ちゃんとお礼言わないとねっ」

サーシャは立ち上がり、スカートを叩いて払う。すると老婆が一人、こちらにやって来るのが見えた。

「おはようサーシャ」

「おはようございます。おばあちゃん、今日はどうしたの？」

今日は休診日だ。だがゴードは患者が来れば診療するので、休診日はあってないようなものになっている。

だが老婆はにこりと首を振ると、持っていた籠をサーシャに差し出した。

「これね、ウチで採れた野菜。あの二人に食べさせてあげて」

そう言ってサーシャに籠を渡すと、老婆はそれじゃあと帰っていった。

籠はずしりと重い。きっとこの重さが、老婆の感謝の表れなのだろう。

「それじゃ、今日はこれで何か作りますか」

洗濯の予定はなくなったが、代わりに料理の予定ができた。ただでさえゲイルは馬車馬のように食べる。これはなかなかやり応えのある仕事になりそうだ。
サーシャは籠を両手に持ち直すと、家の中に戻っていった。

◆

巨体を揺らしてサムは走っていたが、サーシャが追いかけてくる気配がないので、スピードを緩めて徒歩に切り替える。
朝の散歩をしている人が挨拶をしてくれた。手を上げて返礼する。外を駆け回る子供も、サムを見て逃げなくなった。むしろ近寄って話しかけてくることもある。
絵に描いたような平和な村の様子を眺めながら歩いていると、背後から足音が聞こえた。足音の距離はまだ遠く、サムにしか聞こえない。
足音から相手の体重と歩幅を計算し、歩幅から身長を割り出す。算出したデータを脳内の人物データベースと照合すると、一人の人物がヒットした。この村の住人。危険度ゼロ。武装している様子はなし。
足音を察知してから、相手の特定まで一秒とかからない。そしてサムは、あえて相手の接近に気づかないふりをして歩き続けた。
「サムさ〜ん」
まだ声変わりの気配も見当たらない、純粋なボーイソプラノの声がサムを呼ぶ。
ここで初めて相手に気づいたようにサムが振り向くと、ボーエン少年がこちらに手を振りながら走ってくるのが見えた。
「おはようございます、ボーエン」
「おはよう、サムさん」
ボーエンは息を弾ませながら、挨拶を返す。相変わらず目はきらきらと輝いており、多感な時期の少年特有の、憧憬と羨望の篭った眼差しを惜しげもなくサムに投げかけている。

「これから見張りですか？」
少年は元気よく「うん！」と答える。
「感心ですね。今日も暑くなりそうですから、体に気をつけてくださいね」
「ありがとう、気をつけるよ。あ、そうそう、さっきゲイルさんが丘のほうへ慌てて走って行ったけど、何かあったの？」
「何でもありませんよ。怖いお姉さんから逃げてるだけですから」
「なあんだ」とさっきまで心配そうにしていた少年の顔が笑顔になる。
「あのね、サムさん……」
「なんですか？」
「あのこと、ちゃんと秘密にしてるからね」
「それはどうも。助かります」
「えへへっ。だってサムさんと僕だけの秘密の約束だもん。絶対誰にも話さないよ」
少年は意思の固そうな顔をする。サムが頭を撫でると、少年は目を細めてくすぐったそうに笑った。
「それじゃ僕、見張りに行かなきゃいけないから。またね」
「はい。頑張ってください」
少年は駆け出すと、上半身を捻ってサムに手を振った。そのままずっと走り続けているので、転ぶのではないかとサムは心配したが、どうにか転ばずに走って行った。
ボーエン少年の背中を見送ると、サムは方向転換をして丘へと向かった。

愛用の釘バットがいつになく重い。肩に担ぐ気力もなく、引きずるようにしてグレンは歩いていた。
見回り帰り。いや、見回り中止の帰り道。
あの二人――ゲイルとサムがこの村の用心棒になって以来、見回りや訓練の集まりが悪くなった。皆あの二人におんぶにだっこで、

自分たちが村を守るのだという気概がすっかり抜けていた。
詰め所の集まりもどんどん悪くなり、今朝はついにルイスしか居なかった。だからグレンは見回りを中止にして帰路についているのだ。この調子では、恐らく門番もいないだろう。
「クソ、胸糞悪い！」
忌々しいあの二人の顔を思い浮かべ、全力で釘バットを木に叩きつける。太い釘が木の幹に食い込み、樹皮を引き裂いた。
だが、それだけだ。いかに屈強なグレンといえど、一振りで木をなぎ倒すような非常識な真似はできない。
あの二人なら、素手の一振りで木の一本やニ本は軽くへし折ってしまうだろう。何せあの大岩を二人で持ち上げ、あまつさえ粉々に砕いたのだから。
そして二人は大岩と同時に、グレンのこれまで築いた自警団のリーダーとしての地位やプライドまで砕いた。あの日から他の団員はもとより、村人の自分に対する態度ががらりと変わった。まるであの二人がいてくれれば、グレンは用なしとばかりに。
いっそこの手で二人を叩きのめし、がた落ちになった自分の権威を復活させようと思った事もある。だがそれは無理だ。最初（ハナ）っから勝負にならない。大人と子供の勝負どころか、怪物と人の勝負だ。怪物を倒せるような奴相手に、自分のような凡人が勝てるわけがない。しかしそれほどの力を持っているからこそ、村人たちは彼らの滞在を歓迎しているのもまた事実である。
「あんな奴らに尻尾振りやがって……」
村の連中がよそ者になびくのが気に入らなかった。ただ強いというだけで何の権力も地位もない奴が、村長の孫であり自警団のリーダーでもある自分よりもちやほやされているのが我慢ならない。
そして彼らがサーシャの家で寝泊りしているのが、最も気に入らなかった。
グレンとサーシャは幼い頃からの知り合いで、言わば幼馴染である。彼は小さい頃から、サーシャの長い赤毛と少し強気な性格に魅

かれていた。慎ましい胸も良いと思っている。
昔はケンカで自分よりも強かった彼女が、涙に暮れていた時期があった。彼女の父親が怪物に殺された時だ。あの頃のサーシャは、グレンに改めて彼女がか弱い少女だという事を再認識させた。そして、彼女と村を守るために強くなろうと決意した。
だがそれがどうだ。グレンは自分が大事にしているものを、ゲイルたちに横からかっさらわれたのだ。
村人たちの羨望も賞賛も。
そしてサーシャも。
あのどこの馬の骨ともわからぬ、とっぽいチンピラ野郎がサーシャの家で暮らしている。ゲイルは彼女に手を出してなどいないし、その気すらないと言うが、あんな奴のいう事など信用できるものか。
もし、ゲイルがサーシャに――そう考えるだけで腸が煮えくり返る。一刻も早くあの害虫をサーシャの家から、いや、この村から追い出さなければ。
だが具体的にどうすればいいのか、グレンにはまったくわからなかった。体は鍛えてあるし、ケンカならこの村で自分に敵う者はいない。だがケンカでは絶対にあの二人に勝てない。
ではどうすれば良いのか。例えば、あの二人の信用を落とすというのはどうだろうか。思えば、あの大岩の件さえなければ村人たちもよそ者の二人をあんなに信用する事はなかった。怪物より強いというが、それはサーシャが一人で言っている事で何の証拠もない。信用さえ落ちれば、村人たちもきっと自分と同じようにあの二人の胡散臭さに気がつき、彼らに対する態度も以前に戻るに違いない。いや、上手くすればこの村から追い出せるかもしれない。
これだ、とグレンは思った。何か、彼らの信用を落とす方法はないだろうか。あの二人がこの村を守る英雄などではなく、ただの疫病神だという事に気づかせる方法を。
（待てよ。疫病神か……）
あの大岩が転落した事を、あの二人のせいにできないだろうか。

岩はこれまで何度もあった地震にもびくともしなかったのだ。それがあの二人が来た途端、これまでにないほどの大地震が来て転落した。偶然かもしれないが、これを上手くこじつけられないだろうか。

（いや、こんな強引な話じゃ無理だ）

何かもう一つくらい二人を貶める材料がないと、今の村人たちの目は覚めないだろう。中途半端な中傷だと、反って自分が彼らをやっかんでいると思われかねない。

だがこれは案外名案かもしれない。村人たちが二人を信用しているほど、それが裏切られた時の反応は大きいだろう。そして信用というものは、いとも簡単に壊れる。

（いいぜ……。これはいいぜ。あの二人の信用をがた落ちにして、村から追い出してやる）

グレンがにやにやしながら歩いていると、道の向こうをボーエンが走っているのが見えた。きっと今日も見張り櫓に行くのだろう。ルイスと最年少の彼だけが、喜んで仕事をしている。他は皆、ゲイルとサムの存在にかこつけてサボっているのだ。たった二人、しかも一人はまだ年端もいかぬ少年だ。それだけしか自分についてこなかった事が、グレンの自尊心をいたく傷つけている。

「よう、ボーエン」

グレンが声をかけると、少年はあっという顔をした。たぶんこんな時間に自分が村を歩いているとは思わなかったのだろう。それもそうだ。本来なら、見回りの時間だ。

「おはようございます、グレンさん……」

今まで楽しそうだった少年の顔が、急に暗くなる。嫌なヤツに会ったという顔だ。グレンは自分が少年に好かれていない事は、とっくに知っている。何しろ少年が自警団に入りたいと言ったのを子供だからと却下したのは自分だ。それを人の良いルイスがとりなしたから、渋々見張り櫓に置いてやっている。嫌われて当然と言えるだろう。

「今日も櫓に行くのか？」

少年は小さく頷く。俯いたまま顔を上げないのは、顔も見たくないという意思表示だろうか。ずいぶん嫌われたものだ、とグレンは苦笑する。

「お前、しばらく櫓に行かなくていいぞ」

どうせ怪物が来たって、あの二人が何とかしてくれるのだ。それなら余計な時間を使わせるより、さっさと帰らせて家の手伝いでもさせたほうがいい。そう考えての言葉だったのだが。

「そ、そんな。行かせてよ。お願いします！」

少年が勢いよく顔を上げる。てっきり仕事から解放されて喜ぶと思っていたグレンは、少年の必死の懇願に意表をつかれた。

「お願いって、お前……行ってどうするんだよ？」

すると少年は急に黙り込む。何か言えない事を口の中に押し込めているように、唇を固く閉じている。

（怪しいな……。コイツ、何か隠してやがる）

少年の不自然な言動は、明らかに何かを隠している事をグレンに感じさせた。ついさっきまで少年に感じていた情が、急激に怒りに変わる。

「お前、何か隠してるだろ？」

「何も……隠してなんかないよ……」

おどおどする態度が、ますます怪しい。知られてはまずい事が、何かあるのだろうか。いや、それよりも、このガキが自分に隠し事をするという事自体が気に食わない。

こんな子供にまでなめられているのかという思いが、グレンの怒りをますます大きくする。鬱積した怒りに新たな薪をくべられ、炎がさらに大きくなる。怒りの炎は、火力が上がると色が変わるように変質した。

「言えよ」

胸座を掴みぐいと持ち上げると、少年の足は易々と地面から離れた。圧倒的な力の差が少年の顔に怯えの色が加え、グレンの嗜虐心を刺激する。

少年に対する労いや同情といったものは、今やすっかり消え失せている。代わりにどんな手段を使ってでも秘密を喋らせようという歪んだ感情だけが、グレンの心を支配していた。

目に涙をいっぱい溜めながらも、必死で首を横に振るボーエン。泣き喚きたいだろうが、恐怖のあまり声も出ないようだ。少年にも想像がつくのだろう。これから自分が何をされるのか。どれだけ痛い思いをしなければならないのか。それを如実に想像させる顔が、少年のすぐ目の前にあるのだから。

だがそれでも口を割らない少年にグレンは舌打ちを一つすると、軽々と草むらに放り投げた。往来では人目についてできない事をするためだ。

17

叱られた子供がいつも同じ場所に隠れるように、ゲイルは昨日と同じ丘の斜面に寝そべっていた。

ただこうしているだけでは何も解決しないのはわかっている。だが他にする事もなかったので、仕方なくここで寝転んで時が過ぎるのを待っている。

「参ったぜ」

ゲイルは自分の服をつまむ。相変わらず緑色に染まった服は、今朝から何も変わっていない。いや、思い返せばこの村に来た頃から変化していないように思えた。

「まさかぶっ壊れてるとはなあ……」

よく見れば、服のあちこちにできた焼き焦げも残っている。森で蟻頭と戦っている時にできたものだ。体温調節機能を切った時はまだちゃんと機能していたから、恐らく蟻頭に叩き潰された時に故障したのだろう。

「まずいぞ……。このまま戻ったら、今度こそあいつに丸裸にされる……」

「それ以前にもっと心配する事があるでしょう」

「うおっ、びっくりした！」

いつの間にか、ゲイルを覗き込むようにサムが立っていた。常々疑問に思うが、あの巨体でどうやれば、気づかれずに背後に立てるのだろう。

「ただ単に貴方が鈍いだけですよ。それより――」

サムは周りの草と同化しているような相棒を見て、「ふむ」と呟いた。

「ナノマシンの制御装置が故障していますが、これなら修理可能です」

「ほ、本当か？」

サムの診断に、ゲイルの顔がぱっと明るくなる。
「良かったですね。官給品を破損させたら、始末書ものですから」
「ま～たあのハゲにクソ長い小言を聞かされるところだったぜ。お前は俺の上司かっつーの」
「全然ハゲてないし、彼は一応我々の上司ですが……」
「うっせえ！　いや～しかし良かった良かった。一時はどうなる事かと思ったぜ」
ゲイルは嬉しそうに服を撫で回す。
「あ、でも今すぐ修理は無理ですよ。一度船に帰還しないと、道具も何もありませんからね」
「なあ～にい～？　それじゃあ意味ねえじゃねえか～……」
へなへなとゲイルの体から力が抜ける。ぬか喜びもいいところだ。
「始末書と小言が回避できるじゃないですか」
「ぐぬう……。けどこの汚れを落とさないと、あいつがまた俺の磨きぬかれた肉体を貪ろうと服を剥ぎ取りに来る……」
「どうしてそう歪んだ表現をするんですか……。ただ単に洗濯したいだけでしょう」
「お前はどうなんだよ？　どうせあいつから逃げてきたんだろ」
「まあまあ。私の事より、まずはその服をどうにかしないと」
「……お前も逃げてきたな」
「二キロほど向こうに小川がありましたよ。あそこなら、人目に触れずに服を洗えるでしょう。なあに、この陽気ならすぐに乾きますよ」
「この仕事が終わったら、速攻でお前の脳を分解掃除してやる」
「はっはっは、面白い冗談ですね。ささ、私も手伝ってあげますから、早く行きましょう」
サムはぐいぐいとゲイルの背中を押す。ゲイルは喚きながら抵抗するが、重量差はどうにもならない。こうしてゲイルは、倉庫の荷物のように林の中に押し込まれた。

◆

日が暮れる頃、ゲイルとサムが朝より少しだけ小ぎれいになって帰ってきた。どうだとばかりに仁王立ちするゲイルに、明日こそは二人の服と鎧を洗ってやろうと予定していたサーシャは複雑な気分になる。

「これで文句ないだろ」

得意顔で胸を張るゲイルに向けて、サーシャは小さく「チッ」と舌打ちした。

「おい、今チッって言ったろ？　舌打ちしたよな？」

「してないわよ。馬鹿なこと言ってないで、さっさと手を洗ってきて。夕飯にするから」

「いや、言ったよな、『チッ』って。何だよ、何か文句あるのかよ？」

「だからしてないって言ってるでしょ。変な言いがかりつけると、盛りを減らすわよ」

食事の盛りを人質にすると、ゲイルは渋々手を洗いに行った。

サーシャは溜め息をつく。これでまた明日の予定が空いてしまった事よりも、こんな調子ではいったいいつになったらゲイルに助けてもらった礼を言えるのかと思ったら、つい溜め息が出てしまった。

どうしてもっと素直に、普通にありがとうと言えないのだろう。たった一言。それだけを言うために、自分はどれだけの遠回りをしているのか。また溜め息が出た。

野菜をメインにした料理が、もりもりゲイルの胃袋に納められていく。この野菜はもちろん、朝サーシャが会った老婆から貰ったものだ。ゲイルは知っているのだろうか。今だけでない。大岩を砕いて村を救った日から、食事はずっと村人たちから謝礼として貰った食材で調理されていた事を。

サムは相変わらず何も口に入れない。食事を持って行っても「ゲイルにやってくれ」の一点張りだ。今日も手付かずの料理が乗った盆は、ゲイルの前に置くとあっという間に空になった。

ゲイルはサムが何も食べない事を知ってか知らずか、まるでサムの分まで平らげんばかりの食欲を見せつける。よくあれだけ食べられるものだとサーシャが感心していると、外からサムが窓をノックした。

サーシャが窓から外を覗くと、たくさんの松明の灯りがこちらに向かってくるのが見えた。灯りの数は尋常ではなく、村人のほとんどが加わっているのではないかと思われた。

慌ててサーシャが外に出ると、すでに集団の先頭は庭に足を踏み入れていた。ざわざわとした声が徐々に大きくなる。

距離が近くなると、先頭を歩いている人物がグレンだとわかった。彼は騒然とする集団を率いて、まるで行進のようにこちらに向かって歩いてくる。

「なに、あの集団は？」

「わかりません。ですが、何か様子がおかしいです。危険なので、貴方は家の中に入っていてください」

そう言われても、集団が目指しているのは自分の家だ。他人事のような顔をして家の中に引っ込むわけにはいかない。

「ちょっとグレン、いったいこの騒ぎは何！？」

サーシャが大声を出すと、グレンが片手を上げる。集団はその場で停止し、口々に話していた声も止む。集まった村人の数はかなり多く、庭に全員入りきれずに後ろのほうは垣根より外に出ていた。

「よう、サーシャ。今すぐあの野郎を出せ」

今日のグレンは、やけに自信に溢れている。だがいつもの根拠のない尊大さではなく、自信を裏打ちさせる何かを持っている。そんな傲慢な態度に、サーシャはどこか不安を覚えた。

「……ゲイルのこと？　彼なら――」

「おいおい、何だよこの人ごみは？　今日パーティーがあるなんて聞いてないぜ」

――中にいる。そう言おうとする前に、玄関から食事を中断させられて虫の居所が悪そうなゲイルが現れた。

「よくも俺たちを騙してくれやがったな。この疫病神が」
グレンの不遜な態度は、相手がゲイルでも変わらない。相手によって態度を変える男ではないが、それにしてはやけに強気だ。
「疫病神？　なに言ってんだお前。脳ミソにシワ足りてるか？」
「そうよ。二人は村を救ってくれたじゃない。騙すなんて言いがかりだわ」
サーシャが文句を言い返すと、グレンは地面に唾を吐く。まるで彼らに村を救われた事を、不愉快に思っているようだ。
「目を覚ませ。それがあいつらの手口だったんだよ」
「手口？　いったい何の話よ？」
「こいつらが村に来てから、碌な事がありゃしない。でかい地震が起きるわ、そのせいで大岩が転落するわ。まるでこいつらが災厄を運んできたみたいじゃないか」
そんなのはただの偶然だ。こじつけや後づけなどいくらでもできる。靴を放り投げて明日の天気を予測するのと同じで、何の根拠もない。
だがグレンを始め、彼の後ろにいる村人たちは口々にそうだそうだと囃したてる。彼の言った仮定ですらないものを、真実だと信じて疑っていない。
「そうやって自分たちが引き寄せた事件を解決して、こいつらはまんまと俺たちの信用を得やがったのさ。怪物を村に手引きするためにな。こいつらはハナっからこの村を滅ぼすためにやってきた、怪物の手先なんだよ！」
グレンの力説に、何という事だ、ああ恐ろしいと村人たちが騒然となり、人々の目が恐怖と嫌悪に染まっていく。
「アホかこいつは……」
突拍子もないたわ言に、ゲイルは心底呆れて溜め息を吐く。くだらない茶番をさっさと終わらせて、早く食事に戻りたいという顔だ。
「ちょっと待ってよ。二人は怪物からあたしを助けてくれたのよ。その彼らがどうして怪物の手先なのよ？　理屈がおかしいわ！」

「じゃあサーシャはこいつらが怪物を倒す瞬間を、その目で見たのかよ？」
「そ、それは……見てないけど……」
たしかに、サーシャはゲイルが怪物を倒すところを目撃していない。あの時はゲイルが怪物に潰されてしまったのを見たショックで気絶してしまい、目が覚めたらすべてが終わっていた。人が怪物を倒すなんて信じがたい事だけに、目撃者がいない点をつかれるとぐうの音も出ない。
「そもそも、ただの人間が怪物を倒せるわけがないんだ。ましてやたった二人で丘の大岩を持ち上げたり、素手で破壊するなんて非常識にもほどがある。要するに、こいつらは人の皮を被った怪物なんだよ。化け物だから、あんな真似ができたんだ」
グレンがゲイルとサムを指さすと、村人たちから悲鳴が上がった。聴衆は完全にグレンの話を鵜呑みにしている。こうなるともう彼らに冷静な判断は期待できない。
「皆さん、落ち着いてください。まずは話し合いましょう」
とことん冷静かつ紳士的なサムが、牧師のような穏やかな口調で両手を広げる。自分には争う気はないという意思表示だろうが、巨体の彼がすると熊が立ち上がって威嚇しているようで逆効果に見える。
「あんたも黙ってないで、何か言い返しなさいよ。自分たちが疑われてるのよ！」
「フン、化け物か……。まあ、間違っちゃいねえわな」
サーシャは当事者の一人であるゲイルに反論を促すが、彼は困惑と皮肉の混じった複雑な表情を浮かべているだけだ。
サムの必死の説得も虚しく、村人たちから再度野次が飛ぶ。つい昨日まであれほど二人に感謝していたはずの村人たちは、ついに足元の石を拾って二人に投げ始めた。サムはすかさず一歩前に出て、ゲイルとサーシャを石つぶてから守る。
「おい、やめろ！　サーシャに当たる」

グレンが彼らを制しても、一人また一人と投石する人が増える。サムの鋼の体に石が当たり、はね返る音が人々の罵声の中に飲み込まれた。

サーシャは彼らの中に、今朝野菜をくれた老婆の姿を見つけて愕然とした。今朝まであんなに二人に感謝していた彼女が、何故この場にいるのだ。何があったら、こんなに短時間で感謝が嫌悪に変わるのだ。それとも人間というのは、ここまで容易に態度を変えられるものなのだろうか。人とは、かくも醜いものなのか。

集団に紛れ、しゃがれた声を精一杯張り上げて罵倒し石を投げる老婆の姿を見て、サーシャは涙がこぼれそうになる。

悲しかった。二人が村人たちに憎まれているのもそうだが、何より人がこんなにも醜いと思えてしまう事が悲しかった。生まれてからずっと同じ村で暮らしてきた人たちの中身が、こんなに汚らしくて卑しいものだったなんて。それとも、自分では気がつかないだけで、自分も彼らと同じなのではないだろうか。立場が違えば、自分も二人を責めたてるために集団に加わっていたかもしれない。だから彼女は、ただ悲しかった。

18

庭の目ぼしい石を投げ尽くしたのか、ようやく投石が終わった。
「我々は貴方たちに危害を加える気は毛頭ありません。それよりもむしろ、貴方たちを助けたいのです。ですからどうか皆さん、我々を信用してください！」
荒ぶる群集を前に、果敢に説得を続けるサム。だが興奮した村人たちは「嘘をつけ！」だの「黙れ！」などと叫んで聞く耳を持たない。それを待っていたかのように、グレンが隣の村人に松明を渡して前に出る。
「だいたいその図体が怪しいんだよ。悔しかったら鎧を脱いで顔を見せやがれ」
「それは……無理です」
「ホラ見ろ！　見せられないようなモンが中に詰まってるに決まってる。お前の中身は怪物だ！」
サムが答えに窮すると、グレンは鬼の首を取ったかのように喜々とする。まるで主旨と関係のない事を取り沙汰して、さもそれが証拠だとばかりにはしゃいでいる。完全に揚げ足取りだ。
だがサムも負けてはいない。少なくとも、彼はグレンよりも聡明で弁も立つ。口ゲンカや論争なら、決して負けはしないだろう。無論ケンカになっても負けはしないが。
「待ってください。百歩譲ってもし我々が怪物の手先、あるいは怪物そのものだとしても、その目的はいったい何なのですか？」
「決まってる。俺たちを油断させて、中から村を襲うつもりだ」
間髪入れないグレンの答えを、サムは鼻で笑う。まるで子供の幼稚な想像だと言わんばかりだ。
「私が怪物だったら、そんなまだるっこしい事はしません。そもそも、怪物がどうして村人を懐柔しなければならないのです？　そんな事をしなくても、このような小さな村などあっさりと全滅させ

る事ができるはずです。つまり、貴方の仮定は根本から間違っている」
グレンが「ぐ……」と唸ると、村人たちからも「そう言えばそうだ」などとざわめきが起こる。
「そんな手間をかけてこの村に潜入するメリットが、どこにあるのですか。この村のどこにそんな価値があるというのです」
冷静になって聞くと失礼な言い方だが、まさにサムの言う通りだとサーシャは思った。怪物が餌を欲しさに村を襲うのなら話は解かるが、わざわざ村人を騙して潜入する理由などこの村にはない。またもやグレンは唸る事しかできなかった。
扇動されて興奮していた民衆は、指導者の論破される姿にようやく冷静さを取り戻しつつあった。ひそひそと話し合い、自分たちの行いが本当に正しかったのか疑問を持っている。
あと一押しすれば、彼らの誤解はすべて解ける。そう感じたのかサムが遂にとどめの一撃を放つ。
「それなら貴方がたには、我々を怪物の手先だという証拠があるのですか？」
決定打ともいえる一言。そんなものあるわけがない。グレンの下らない言いがかりも、これですべて打ち砕けたかに見えた。
だがグレンはにやりと笑う。その余裕の笑みに、サーシャは嫌な予感がした。

「二人が怪物の仲間だっていう証拠なら、ここにあるぜ！」
そう言うとグレンは、何やらボロ布の塊のようなものを二人の前に放り投げた。それはどさりと地面に落ちると、くぐもった呻き声を上げる。
松明の頼りない灯りの中、もぞもぞとボロ布の塊がうごめく。やがて塊から泥に汚れた顔や手足が伸び、ボロだと思っていたものが、小さな子供の姿へと形を変える。闇夜を見通す目を持つサムは、真っ先にその人物に気づき驚愕の声を漏らした。

「ボーエン……」
サムの掠れる声に、サーシャははっと息を飲む。ボーエンは地面を引きずり回されたようにあちこち泥にまみれ、顔や手足は傷だらけだった。
「お前らはこのガキに、怪物たちが移動している事を口止めしていたそうだな。何故口止めする必要がある？　まるで知られたら困るみたいじゃないか。怪物の情報を隠蔽した事が、お前らが怪しいという証拠だよ！」
劇的な逆転を果たしたように、グレンが高らかに笑う。そして村人たちもまた、再び二人に向けた疑念や憎悪を復活させていた。
「ひどい……」
少年の有り様に、サーシャが悲痛な声を漏らす。
誰よりも早く、サムが少年の許に駆けつけた。屈みこみ、大きな手で小さな体をそっとすくい上げると、少年は傷の痛みに小さな呻き声を漏らす。
「ボーエン、しっかりしてください……」
恐る恐る声をかけると、少年は体をぴくりと震わせ、ゆっくりと目を開いた。だが片方の瞼が大きく腫れあがっており、その痛みに声を上げる。
「さ、サムさん……」
少年はサムの顔を見ると、ぼろぼろと涙を流し始めた。だがそれは痛みや安堵の涙ではなく、悔しそうに歯を食いしばり嗚咽を漏らす、無念の涙だった。
「ごめんなさい……。約束したのに僕、僕……」
傷の痛みよりも、約束を守れなかった悔しさで流れる少年の涙に、サムはようやくすべての事情を察した。グレンは暴力をもってボーエンに喋らせた秘密を、ゲイルとサムを貶めるために用いたのだ。
サムの掌の中で、ボーエンが嗚咽している。暴力に負けてしまった事に悔いて泣いている。サムは自分との約束を守るために傷だらけになった少年の涙に、回路が焼きつくような後悔の痛みを感じた。

こんな幼い子供を、己の権力を守るためだけに痛めつけたグレンも許せないが、こうなる事を予期できなかった、あの時の自分を殴り飛ばしたい。何て浅慮な事をしたのだと、過去に戻れるなら今すぐそうしたかった。

「すみません、ボーエン……。私のせいで……」

サムは自分が置かれている立場を忘れ、ただ少年のために後悔と慙愧の念に埋もれていた。

19

見ているだけで辛くなるサムの悲しそうな背中に、サーシャは思わず隣に立つゲイルの袖を掴んだ。何か言って欲しくて袖を引っ張るが、ゲイルは何も言わず、ただ腕を組んで見ている。まるで興味がないと言わんばかりの態度に、袖を掴んだ手から力が抜け垂れ下がった。

胸が裂けそうな痛みに耐え切れず、下げた手を胸の前で組む。胸の奥が軋む音が、手を伝って聞こえそうな中、隣で奇妙な音が聞こえた。

ばりばりという音のするほうへと目を向けると、ゲイルが憤怒の形相で歯を食いしばっている。サーシャが聞いたのは、彼が怒りを噛み殺す音だったのだ。

「野郎……何てコトしやがる……」

「ゲイル……」

腕を組み、歯がすべて折れそうなほど歯を食いしばるゲイルに、サーシャは驚いて声を失った。村人たちに罵倒されても、まったく動じないように見えた彼が、組んだ腕に指がめり込み、ともすれば血が噴き出しそうな激しい怒りを必死に抑えている。

サーシャはこれまで、ゲイルは血も涙もない冷血漢だとばかり思っていた。だが自分の事を悪く言われるより、小さな子供が傷つけられた事に怒りを覚えている。今にもグレンに飛びかかりそうな自分を必死で抑えている姿は、とても冷たい人間には見えない。

本当は彼も感情を露にし、涙を流したり怒りを誰かにぶつけたいのかもしれない。けれどそれをしないのは、何か深い考えがあるからか。地震の時の冷酷な態度と、今の熱い血潮をひた隠しにしている姿。そのどちらが本当の彼なのか、サーシャには見分けがつかなくなった。

怒りを堪えるゲイルと、悲しみに暮れるサム。二人の姿を見て、

サーシャはいたたまれなくなった。人を信じ、裏切られ、厚意を憎悪で返された彼らの心が、どれだけ傷ついたのかは想像できない。きっと今の二人には何を言っても慰めにはならないだろう。

では、いったい自分に何ができるのか。そもそも自分が森にさえ入らなければ、怪物に襲われさえしなければこんな事にはならなかったはずだ。そうすればきっと、今頃彼らは目的に向かって旅をし続けていただろう。責任の一端は自分にあるという思いが、サーシャの胸をさらに締めつける。

同時に、痛みの強さだけ怒りが湧いてきた。二人をこの村に連れてきてしまった原因が自分だとしたら、二人をこんなに苦しめている原因は何だろう。

考えるまでもない。今目の前で楽しそうに笑っている下衆野郎だ。こいつは村長の孫という以外は、何の取り得も知恵もないただの筋肉馬鹿だ。小さい頃、よくケンカで泣かせてたらムキになって鍛えたらしく、体だけは強くなった。だが頭の中はあの頃のまんまだ。どうせお山の大将の地位が危なくなったので、ゲイルたちに逆恨みをしたのだろう。

そんな事で。

そんなくだらない事のために。

歯を食いしばり、サーシャは駆け出した。サムの隣を通り過ぎ、一直線に目標に迫る。

「グーーレーーン！」

グレンはサーシャに名を呼ばれ、愉悦から冷める。見れば、彼女が自分の名を呼びながら、こちらに走ってくるではないか。きっと今頃になって間違いに気づいたのだろう。恐ろしい怪物の近くにいるのが怖くなって、もっとも頼れる自分にすがりに来たのだ――そうグレンは想像し、サーシャを抱きとめようと両手を広げる。

「おお、サーシャ……」

「この馬鹿っ！」

恍惚とした表情のグレンの股間に、サーシャは全力で蹴りを入れ

た。幸せの絶頂にいたグレンの顔が見る見る苦痛に歪み、脂汗が滝のように流れる。少女の容赦も手加減も微塵もない一撃に、ゲイルを始めその場に居た男たちは全員同時に自分の股間を押さえて「あ……」と苦悶の声を上げる。

「なんて事やらかしてくれてんのよ！」

サーシャは、白目をむいて倒れているグレンの前で、仁王立ちになって叫ぶ。

「あんた自警団のリーダーでしょ！　村と村人を守るのが仕事でしょ！？　それがなんでみんなの不安を煽るようなこと言ってんのよ！　まったく、あんたはいつもいつも考えが足りないんだから！」

グレンから返事はない。代わりに口から泡が出てきた。これはかなり危険な状態かもしれない。それでも構わずにサーシャは熱弁を振るう。

「二人は何も悪いことしてないじゃない。それをよってたかって石を投げたりするなんて、人として恥ずかしいわ。それともみんな、二人に助けてもらった恩を忘れちゃったの？」

「た、たしかにこいつらは村を守ってくれた。だがなサーシャ、俺たちに隠し事をしていたのも確かなんだ。何か疚しいことがあるからとは思わないのか？」

集団の中から一人の男性が声を上げると、他のみんなもそうだそうだと相槌を打つ。

「だったらどうして二人に直接理由を訊かないのよ。大勢で押しかけたりしないで、もっと穏便に済ませられる方法を考えなかったの？　そもそも小さな子供をあんな目にあわせるような奴の言う事なんて、よくもまあ信じられるわね！」

「し、仕方がなかったんだよ……」

サーシャが青筋を立ててどやしつけると男性は気圧され、言い訳するような言葉も尻すぼみになる。他の連中も俯いたり、前の人の背中に隠れたりしている。

「何が仕方ないのよ！　自分たちが助かるためなら、何をやって

もいいと思ってるの？　人としての誇りや尊厳ってものはないの？」
「うるさい、お前に何がわかる！」
それまで大人しかった男性が、突然感情を爆発させたように反論した。
「俺たちだってな、やりたくてやったんじゃないんだ。家族を、村を守るために仕方なくやったんだ！」
集団からも、男性に同意するように「そうだそうだ」「仕方なかったんだ」と声がする。その悲痛な声に、サーシャはこれ以上彼らを責める事ができなくなった。
「怖いんだよ……怪物が……」
最後に男性は、噛み締めた歯の間から絞り出すような声を出した。男性の悔しくて辛そうな顔に、サーシャはようやく思い知った。男性たちの世代はかつて徴兵に遭い、怪物討伐に狩り出された世代なのだ。
彼らは実際に怪物と戦った経験があるから――怪物への恐怖がその身に、その心に染みついているから――怖くて仕方がないのだ。
命からがら生き延びて、ようやく得た今の平和な生活は、何が何でも手放したくない。そんな切実な思いが彼らを動かしていた。それに気づいてしまったサーシャに、何が言えるだろう。徴兵で父親を失ったとはいえ、サーシャは後の平和な時代しか知らない。戦わなかった者が、戦ってきた者を責められるわけがない。彼らの行いを、彼女が裁けるはずがない。
お前に何がわかる。仕方なかったんだ――言葉の重みが、サーシャの心にずしりとのしかかる。
彼らの怪物を恐れる気持ちは責める事はできない。だが人としての心を失った彼らの蛮行は、責めずにはいられなかった。
「あたしだってねえ……」
「え……？」
「あたしだって怪物は怖いわよっ！　この間森で怪物に襲われた時は、そりゃあもう死ぬほど怖かったわよ！　二人が助けてくれな

かったら、今こうしてあたしは生きていなかった。だから二人には感謝してもしきれないくらいよ。そりゃあちょっと馬鹿で無神経で不潔で大飯食らいだけど、そんなこと関係ない。あたしは二人の事を信じてる。だって、彼らはあたしだけじゃなく、この村も救ってくれたんだもの。一度ならず二度も救ってくれた人を、あたしは絶対疑わないし疑いたくなんかない！　だから彼らの無実はあたしが保証するわ。文句があるなら順番にかかってきなさいよ！」

サーシャは息継ぎもせず一気に喋りきった。息を乱す彼女の姿に、村人たちは圧倒され呆然としている。

「さあ、どうするの？　あたしと、そこでのびてる馬鹿野郎のどっちを信じるの？」

サーシャが腕をまくって一歩前へ踏み出すと、村人たちは彼女の迫力に圧されて二歩下がる。

仁王立ちするサーシャの前で、村人たちの会議が始まった。ようやく意見がまとまり、一人の男性が代表で発表する。

「……まずは二人の話を聞いてみよう。信用するかどうかは、その後だ」

随分消極的な意見だ。しかし話し合いをしようという気になってくれたのは大躍進だろう。とにかく今はお互い話し合って、誤解を解くのが最優先だ。

20

「じゃああたしはこの子の手当てをしてくるけど、あんたたちはちゃんとみんなと話し合っておくのよ」
「ボーエンの事、よろしくお願いします」
「あ、おい……」
少年をおぶって家に向かって歩き出そうとしたサーシャを、ゲイルが呼び止める。
「なに？」
「あのゲス野郎をのしてくれてありがとよ。おかげでスカっとしたぜ」
「……あれは、あたしも頭に来たからやっただけよ。お礼を言われる事じゃないわ」
「……そうか」
「それにお礼を言うのはあたしが先。森で助けてもらったお礼、まだ言ってなかったもん」
ありがとう、とサーシャが笑顔に感謝を込めて礼を言うと、ゲイルがぽかんと口を開けて見つめていた。
「……なによ？」
「いや……別に……」
「変なの」
そう言ってまた笑うと、サーシャは家に向かって歩き出した。こんな状況だが、思わず小さくガッツポーズをとってしまう。何故なら、ようやくゲイルにお礼を言えたからだ。

サーシャが家の中に戻るのを見届けると、ゲイルは粛々と整列した村人たちに向かってフン、と鼻を鳴らした。
「まあ、その……なんだ。俺たちも、良かれと思って黙ってたんだが……誤解を招いたようで悪かったな」

ぶっきらぼうなゲイルの謝罪に、村人たちが一斉に「おお……」と感嘆の声が漏らす。よもやこの男から、こんな殊勝な言葉が出るとは思いもしなかったに違いない。

「だからまあ、こっからはお互いざっくばらんに行こうや」

ゲイルが顎で促すと、サムは自分の役目とばかりに前に出て朗々と語りだした。もちろん怪物たちが実は何者かに作られたものである事や、自分たちはその何者かを捕らえに来た事。そして自分たちが宇宙連邦治安維持局の特務捜査官で、この惑星の人間ではないという点は伏せてだ。

ケガをしたボーエン少年をゴードに預けたサーシャが戻ってみると、家の庭がちょっとした村の集会場みたいになっていた。

「ま……話し合うのはいい事よね」

とは言うものの、どうやらお互い平行線のようで、喧々囂々とした雰囲気に先が思いやられる。

「ちょっとちょっと、何をそんなにもめてるのよ？」

見かねたサーシャが集団の中に割り込むと、サムがちょうどいい所に来たと言わんばかりに救いを求めた。

「それが実は……」

サムの説明によると、怪物たちが火山に移動しているのを隠していた事は、村人たちも二人が自分たちに余計な不安を与えないための配慮だからと納得してくれた。

だが問題は、集まった怪物たちをどうするか、だ。そのまま放置しておけば、いつ大挙して村に押し寄せてくるかわかったものではない。

「怪物たちは私たちが駆逐すると言っているのですが……」

「さすがに我々も、その言葉だけでは安心できない。きちんとした確約か保証がなければ、あんたたちをこの村から出すわけにはいかないんだ」

サムの言葉を遮るように、男性が口を挟む。どうやら彼が、臨時

の代表として二人と交渉しているようだ。
「ですが、こればかりは我々を信じてくれとしか言いようがありません」
「だがそれで？ハイそうですか、お願いします？って見送れるわけないだろ」
彼の言うとおり、二人が逃げ出さないという保証はどこにもない。村人たちの主張は当然だが、これではいつまで経っても話は平行線だ。
「そういえば、グレンは？」
はたと思い出し、サーシャはグレンの姿を探す。だが泡を吹いて転がっていたはずの彼の姿は、どこにも見当たらなかった。
「ああ、あの馬鹿なら縛り上げて、猿ぐつわかまして納屋に放り込んであるぜ」
「彼がいては、まとまる話もまとまらなくなりますからね」
「違いねえ。だが、お前の金的がそうとう効いたみたいで、ありゃ朝まで目が覚めないだろうぜ」
くっくとゲイルが笑うと、村人たちからも笑いが起こる。サーシャは自分が笑い者にされているみたいで、何だか恥ずかしくなった。彼女もあの時は、一秒でも早くグレンを黙らせなければいけないと気が急いていたので、緊急措置としてあんな真似をしたのだ。
「と、とにかく、問題はそこなのね」
「ええ。おかげでさっきから水掛け論です」
「なるほどね……」と話題を反らしてはみたものの、確かにこれは難問だ。
「火山に集まった怪物たちが、村にやってくるという可能性はあるの？」
「それはわかりませんが、少なくとも今のところ火山から離れる心配はないでしょう」
ふむ、とサーシャは腕を組む。今のところがどれくらいなのかは定かではないが、当座の安全はサムが保証している。かと言ってそ

のままにしておいて良いという事ではないが。
「じゃあさ、村の近くに来た怪物だけ倒して、徐々に数を減らしていくっていうのはどう？　これならあんたたちも、またしばらく村に居られるじゃない」
「それは根本的な解決にはなりませんし、時間がかかり過ぎます。私が得た情報では、火山周辺に集結した怪物の具体的な数は、二万八千七百十三体。それを一体ずつ始末していくとなると、かかる時間がざっと――」
「あああ、ごめんなさい、今のナシ」
二万八千七百十三体。膨大な数と言っていたが、まさかそこまでの数がいるとは予想もしていなかった。具体的な数字を知らされた人々は、そのあまりに桁外れな数の怪物が、今こうしている間にも自分たちの住んでいる村の近くに集まり続けている事実に改めて恐怖した。
「我々が行かなければ、怪物はさらに数を増やすでしょう。何故ならあの火山こそが、怪物の巣のようなものなのですから」
村人たちが、口々に唸り声を上げる。具体的な解決案が出ないまま、不安要素だけが増えていく。前に進むこともままならないまま、止まることもできない。こうしている間にも足元の崖はどんどん後ろから崩れて追い詰められていく。
焦りばかり募る。迫り来る恐怖が、人々の心を押し潰さんと圧力をかけている。こんな事なら、始めから何も知らずに安穏と過ごしていたほうがましだったと、今になって後悔する。二人もそれを予期して秘密にしていたのだろう。それでも、知ってしまったからにはやれる事をやらなければならない。
「お前ら、しばらく村を離れたらどうだ？」
「無理だ。第一、他の村人たちに何と言ったらいいんだ？　それに俺たちは、生まれ故郷のこの村を捨てる気にはなれない……」
感情論で否決され、ゲイルは面白くなさそうに頭をかきむしる。今はまだそれほど危機的状況ではないにしろ、いずれはそんな悠長

な事を言っている暇などなくなるのだ。しかし、今はまだそんな時期じゃないからこそ、村人たちの意見は尊重しなければならない。なりふり構わず村を捨てて逃げるのは、最後の手段にしたかった。

サーシャもこの村を捨てるという案には賛成できない。住み慣れた村という事もあるが、それ以前にどこに行けばいいのかわからなかった。それにこの村を捨てたとして、移り住んだ新しい場所に怪物が現れないという保証はどこにもない。

保証――またこの言葉か。神ならざる人の身で、誰がそんなものを与えられるのだろう。さっきから何度も出るこの言葉が、村人たちと二人の枷となっている。この言葉がつきまとう限り、話し合いはこれ以上一歩も進展しないだろう。

（つまり、二人がちゃんと怪物たちを退治しました、という明確な証拠があればいいのよね）

約束という目に見えないものでは駄目だ。もっとはっきりと、形ある何かを村人たちに提示できれば、彼らもきっと納得してくれるだろう。

証文。手形。どれも形となってはいるが、お互いの信頼という無形のものがなければ成立しない。つまり村に戻ってくるとは限らない二人が相手では、この方法は意味がないのだ。

何か別の――たとえば二人が村に戻らなくても、怪物がいなくなったと村人に伝えれる方法があればあるいは……。

「そうだ！」

突然大声を張り上げたサーシャに、全員の視線が集まる。

「あたし、いい事思いついちゃった！」

自信満々の笑顔を向けるサーシャだが、彼女を見る人々の目は、ただ唖然としていた。

21

◆

昨夜はとうとう眠れなかった。窓を開けると、朝日が目にしみる。サーシャはいっぱいに開いた窓から乗り出し、庭を眺める。ゲイルとサムを村から追い出そうと、村人たちがあそこに集まったのはたった二日前の事だが、随分昔の事のようにも思える。

「あたしが二人に同行して、結果をみんなに報告すればいいのよ」これは名案、という顔でサーシャが話を続けようとすると、横からサムが「ちょ、ちょっと待ってください」といかにも心配そうな素振りで待ったをかけた。

「危険です。とても賛成できません」

「お前がいたら足手まといだ。怪物の数を考えろ。とてもじゃないが、お前を庇いながらどうにかできるってレヴェルじゃねえぞ」

最後にアホかとつけ加え、ゲイルも反対の意を示す。最後の台詞が余計だが、二人とも自分の事を心配してくれているのは嬉しかった。だが話はそこで終わりではない。

「まあまあ待ちなさいって。人の話は最後まで聞けって、ママに教わらなかったの？」

「……誰のマネだよ？」

苦笑いするゲイルに、サーシャは「へへ～」とおどけて舌を出す。

「ま、それはおいといて。あたしだって危ない事はイヤだし、二人の足を引っ張るつもりは毛頭ないわ。だから、同行って言ってもただ二人についていくだけ。勿論、怪物と戦っている時はずっと遠くで隠れてるわ。で、すべてが終わったら、それを確認して村に戻ってみんなに報告するの。そうすれば、みんなも納得安心できるでしょ？」

どうだとばかりに腰に両手を当て胸を張ると、一同はおおと感心

する。サーシャは人々の反応に、うんうんと頷いた。これなら危険はほとんどないし、村人たちの不安も解消できる。
「保証がないなら、保証人を立てればいいのよ」
「それは確かに名案ですが……どうして貴方が？」
「あたしには、あんたたちを村に招いた責任があるわ。誰が行くかでもめるなんて時間の無駄だし、あたしが一番適任だと思うの」
「しかしだな、リネアとじいさんが何と言うか……」
ゲイルは二人がこの話を聞いたらどんな顔をするか、想像するだけで頭が痛いようだ。二人は今ボーエンの治療をしているのでこの場にいないが、早晩知る事になるだろう。
「おじいちゃんとお母さんにはあたしから話すわ。だからみんな、余計な事は言わないでちょうだい」
真剣な面持ちでサーシャが言うと、村人たちは黙って頷いた。彼らにしても、厄介ごとを進んで引き受けてくれたサーシャの好きにさせたほうが良いと考えたのだろう。もし土壇場になって心変わりを起こしたり、彼女の家族が反対すれば、いったい誰がこんな危険な役目をやりたがるというのか。後はただ、当日までにサーシャが上手く家族を説得してくれて、彼女の気が変わらない事を望むばかりである。
「なら話はこれで決まりね。あんたたち、出発はいつ？」
「三日後です。それまでには、怪物たちがすべて火山に集まるでしょう。そこを私とゲイルが叩きます」
「じゃあみんなはあたしが戻るまで、いつも通り過ごすって事でいいわね？」
村人たちがうんうんと首を縦に振る様子を満足そうに見回すと、サーシャはそういえば、と思い出す。
「一番厄介なのが残ってたわね……」
と納屋のほうへ視線を向けると、みんながああそうだった、と溜め息を漏らす。
「あの馬鹿をこのまま野放しにしたら、絶対に何もかもおじゃん

にするに決まってる。賭けてもいいわ」
「いっその事、彼も連れて行きますか？」
「勘弁しろよ。何の罰ゲームだ？」
「しかし彼をこのまま放置しておくのは、三歳児に一人で留守番をさせるより不安ですからねえ」
「三歳児だったら、寝かしつけておけば楽なんだけどね……」
何気ない一言を放ったサーシャに向けて、ゲイルとサムが同時に「それだ！」と指をさす。
「いいですね。名案です」
「何だよ、難しく考える必要なんてなかったじゃねえか。始末すると後味が悪いが、ちいとばかし眠ってもらうだけなら何の問題もねえぜ」
「良心も痛みませんしね」
「あいにく良心は品切れで、入荷待ちだけどな」
にたりと笑いながら、ゲイルは手の指をばきばき鳴らす。その笑みは暴力よりも、何の罪悪感もなく捕まえた昆虫を解体する子供を連想させた。だが下手に邪気がないだけに、サーシャの脳裏に不吉な想像がよぎる。
「ちょっと待って。こんなのでも一応知り合いだから、あんまり酷い事はしないでね」
「安心しろ、殺しゃあしねえよ。ちょっと何日か眠ってもらうだけだ」
「ご心配なく。ゲイルが無茶をしないように、私が責任をもって監督しますから」
「あ……うん、お手柔らかにね……」
一抹の不安を抱きながら、納屋の中へと消えていく二人を見送ると、すぐにグレンのくぐもった呻き声が漏れ聞こえてきた。
「ん～～～～～～～～～～ッ！」
ぶうううううううううううううう。
「あああぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

恐怖にひきつった悲鳴が、虫の羽音のような音にかき消される。やがて音がやみ、しんと静まり返った納屋から、一仕事やり終えたような顔をした二人が出てきた。

「ふう、これで数日は目を覚まさないだろう」

出てもいない額の汗を、手首で拭うゲイル。グレンはぐったりとしたままサムの肩に担がれ、だらしなく涎を垂らしてぴくぴくと痙攣している。

ほんのわずかな時間で廃人と化した幼馴染の姿に、サーシャは中でいったい何があったのか不審に思ったが、とりあえ外傷はないし生きているからまあいいかという事にした。あとは適当に空いてるベッドに寝かせておいて、彼の面倒はリネアに任せればいい。

とにかくこれで懸案事項が一つ片付いた。気がつけば、夜もかなり更けている。村人たちには明日も仕事があるので、今日のところはこれで解散してもらった。

ぞろぞろと帰って行く村人たちを見送りながら、サーシャは何事もなく無事に話し合いが終わった事に一安心する。そしてその一方で家族にどう説明しようかと思案するが、今は感情を爆発させた余韻が残っているせいか、上手く頭が回ってくれなかった。

一晩寝れば、頭も冷めて良い知恵が出てくるだろう。そう思ってその日は床についたサーシャだったが――

22

あれから二日。サーシャはリネアとゴードに何も話せないまま、時間だけが過ぎてしまっていた。

村人たちを納得させた時のように、家族にも同じ事が言えると思っていた。だがいざ話そうとすると、サーシャの心に言いようのない違和感がよぎる。何かが引っかかり、二人に自分がゲイルとサムに同行すると言えなかった。

一緒に行く事を後悔などしていない。ゲイルとサムを信用しているし、二人に同行する事に迷いはない。むしろ自分にしかできない、自分がやらなければならない事だと自負している。

だが心のどこかで自分に嘘をついていると感じたから、家族に話す事ができないのだ。

「はあ……」

思わず溜め息が出る。出発は明日なのだ。今日中に話をしておかないと、最悪の場合、家出少女よろしく置き手紙を残して出発するなんていう事になってしまう。

それこそ最悪の方法だ。そんな事をしたら、どれだけ家族が心配することか。下手をすると、心労で祖父が倒れる危険性もある。ただでさえ病床にある老体に、これ以上鞭を打つのはさすがにまずい。

いっそ自分の代わりに、サムに説得してもらおうかとも考えた。彼なら二人の信頼も厚いし、何より口が達者だ。理論的かつ誠意をもって二人を説得してくれるに違いない。

けどそれでは意味がない。やはりこういう事は、自分の口から言うべきだろう。だけど何が自分の中で引っかかっているのか、まったく見当がつかない状態では説得しようにも説得力がない。特にリネアは母親だけあって、嘘は通用しない。たとえわずかでもごまかそうとしたり、嘘をつこうとしたら即座に見破るだろう。

とにかく何とかしないと。

解決の糸口も掴めないままだが、ここでこうして悩んでいても始まらない。明日の今頃には出発しているのだ。
サーシャは今日中に絶対何とかしないと、と心に決めながら朝食を作るために部屋を出た。

「とうとう明日出発ね。一週間って早いわあ」
寂しくなるわね、というリネアの言葉に、ゴードも黙って頷く。
最後の晩餐となった食卓では、しんみりとしたリネアとゴードをよそに、ゲイルは相変わらずの食欲を見せつけていた。
ゲイルとサムが怪物退治に向かう事は、ゴードやリネアの耳にも入っているが、村人たちの情報規制によりサーシャが同行する事は知らされていなかった。
「本当に、行くおつもりですか？」
自分たちの身を案じるゴードの低い声に、皿に伸ばしかけたゲイルの手が止まる。サーシャはゲイルが余計な事を言わないかどきりとして、下げようと重ねていた皿の山をかちゃりと鳴らした。
「死にに行くつもりは毛頭ねえよ。それに、怪物退治はついでだ」
ゲイルの声には、まるで気負ったものがない。本当に怪物の事などついでの仕事みたいだ。ゴードのはあ、と拍子抜けしたような返事と同時に、サーシャもはあ、と息をつく。まさかここで「お前の孫も連れて行くけどな」なんて暴露された日には、これまでどう切り出そうかと悩んでいたのが、すべて水の泡になってしまうではないか。
危ない危ない、とサーシャがゲイルをじろりと睨むが、当人は何も気づかずに新たに到着した料理に手をつけている。
「ふう、ごっそさん」
「あら、もういいの？　まだまだたくさんあるわよ」
追加を作りに台所へ向かおうと腰を上げたリネアが、拍子抜けしたような声を出す。
「いや、明日に備えて今日はもう寝るわ。残りは明日の弁当にで

も詰めてくれ」
いつもに比べるとかなりあっさりと食事を終え、ゲイルは席を立った。
「はいはい。じゃあ明日はたくさんお弁当作るから、道中でお腹が空いたら食べてね」
「頼んだぜ。じゃあおやすみ」
「はい、おやすみなさい」
背中越しに手を振って挨拶をすると、ゲイルは家の外に出た。リネアは皿を片付け始め、ゴードは食後のお茶をすすっている。
きっとゲイルはサーシャに家族と話をさせるために、早めに食事を切り上げたのだろう。無神経だと思っていたが、意外なところもあるものだとサーシャは少し感心する。
せっかくゲイルが気を利かせてくれたのだ。この機会を逃すわけにはいかない。このままずるずると引き延ばせるほど、時間は残されていないのだ。
「ねえ……お母さん」
「ん？　なあに？」
後片付けをしているリネアに、サーシャは意を決したように話しかける。緊張して唇が乾き、言葉が上手く出てこない。
「どうしたの？」
「あのね……あたし、あたしね……」
「あの二人と一緒に行きたいのね？」
「えっ、お母さん、どうしてそれを……？」
言おうとしていた事を先に言われ、サーシャは驚いて目を丸くした。だがリネアは不思議な事は何もないというふうな顔で、娘の顔を見る。
「あなたの事なら、お母さん何でもお見通しよ。おじいちゃんだってそう」
サーシャが祖父のほうを振り返ると、ゴードは黙って頷いた。いつもと同じ柔和な顔だが、細めた目の奥には怜悧な光を秘めている。

「あの夜以来、お前の様子がいつもと違っていたからな。何か悩んでいるのだろうというのは、すぐにわかった。昔からすぐ顔に出るたちだからのう、お前は」
「あなたのそういう所は、あの人にそっくりね……」
気づいた素振りなどまったく見せずに、二人は待っていてくれたのだ。黙って出て行く事はしないと信じて、サーシャが自分から話してくれる事を。
「お母さん……、おじいちゃん……」
二人に信頼されている事と、二人の信頼を裏切る事をしなくて良かったという安堵が、サーシャの目頭を熱くする。
「それで、あなたはどうして二人について行きたいの？」
それは、とサーシャは一度口をつぐむ。言葉を探すというより、深く暗い穴の中に手を入れて、本当に掴みたいものを探すみたいに自分の心の中を探る。だが穴の中は様々なものに溢れ、どれが本当に欲しいものかわからない。
「最初は命を助けてもらった恩返しとか、二人を村に連れてきちゃった責任感とか、そういう義務みたいなものだって思ってた。けど――」
「けど、違ったの？」
リネアは優しく問いかけるが、娘は小さく首を振る。
「わからないの。確かに義務感みたいなのはあるけれど、それが本当じゃないような気もする。義務として割り切りたい、でもそうしたくないって気持ち。こんなの、どう言えばいいかわからないよ」
答えが見つからず、サーシャは頭を抱える。
「いいのよ、無理に言葉にしなくても」
泣き出しそうな顔で俯く愛娘を、リネアはそっと抱きしめた。
「人の気持ちっていうのは、とても複雑なの。それを無理に言葉や形にすると、本当に大事な伝えたい事が壊れてしまう時があるわ。だからそういう時は無理をせずに、ただ思った通りに、自分の心がそうしなさいと命じるままになさい。そうすればきっと、あなたの

気持ちがそのまま相手に伝わるわ」
母の柔らかいぬくもりに包まれていると、サーシャの中で固く凝り固まったしこりのようなものがふわりとほどけていく。そして綻びのようにほどけたものの中に、自分が本当に探していたものが見つかったような気がした。
「お母さん……」
「大切なのは、あなたが自分で決めること。あなたが本当にそうしたいのなら、お母さんたちは反対しないわ」
「ありがとう……」
サーシャは母の背に手を回し、強く抱きしめた。リネアも娘を抱く腕に力が入る。お互いにしっかりと抱き合った母娘を、ゴードは目を細めて見ていた。

23

◆

ほんの一週間前に通った道が、がらりと様相を変えていた。
村からほとんど出ないサーシャだが、それでも年に数回は通る街道。それがまるで、これから新たな町を建設するかのように開拓されている。
怪物がこぞって移動しただけでこのありさまだ。もし意思をもって村や町を襲いだしたら、誰が止められるというのだろう。
「あ、いた……」
サーシャは目の前を歩くゲイルとサムの背中に向けて呟く。
一人は飄々としたのっぽの優男ふうで、とても荒事に向いているとは思えない。どちらかと言うと、町のいかがわしい酒場で客引きをしているほうが似合っている。
もう片方はいかにもと言うか、もう荒事以外の仕事が似つかわしくないといった風貌。全身鋼の鎧で身を固めた、雲つくような大男だ。背はサーシャの倍近くあり、手足の太さは三倍以上ある。体重にいたっては比較したくないほどの巨躯。
この一見正体不明の凸凹コンビが、これから数万の怪物たちと戦いに行くという話を、いったい誰が信じるだろう。大道芸の一座から逃げ出したとしか見えない二人が、この国を救う救世主だと、誰が想像つくだろう。
だがサーシャだけは知っている。二人が誰よりも、何よりも強いという事を。
この二人なら、幾千万の怪物を相手にしても引けを取らない事を。
だからサーシャは二人に「気をつけて」なんて言わない。これから死地に赴こうとしているというのに、まるで散歩しているような足取りで歩く二人の背中に、そんな台詞は野暮というものだ。

小高い丘の上で、一行は立ち止まった。山頂しか見えなかった火山が、ここからだと一望できる。
火山へと続く大地は、すでに数多の怪物に踏み荒らされ、ただでさえ荒涼とした地面がでたらめに均されている。草木一本どころか蟻の一匹もいない。巨大なこてを引きずったような跡が、何千何万と伸びている。そしてその先には、遠目で見てもわかるほど怪物たちがひしめき合っている。腐った倒木の皮を引っぺがすと、びっしりと張り付いている得体の知れない虫のように、おびただしい数の怪物たちが二人を今か今かと待ち受けている。
何という数だ。これだけ距離があるというのにはっきりと分かる。小さな虫がうごめいていると錯覚しそうだが、あれら一つ一つが森にいた怪物と同じくらいの大きさなのだ。小山のような怪物たちが群れて集まり、火山の麓を埋め尽くしている。
「うひゃ～、いるわいるわ。いったい何匹いやがるんだ？」
「最新の観測データですと、二万八千――」
「あ～わかったわかった。だいたい三万ってとこか。ノルマが一人一万五千。こりゃ結構な肉体労働だぜ」
ゲイルはフンと鼻を鳴らし、手を額に当てて麓にできた怪物の海を眺める。
「キャサリンからの後方支援はないのか？　なんかこう、ビーム兵器でざーっと一掃するみたいな気の利いたやつ」
「残念ながら。下手に爆撃などで地殻に刺激を与えると、火山が噴火する恐れがありますので」
「なにい。じゃあこれだけの数を素手で相手するのか？　時間がいくらあっても足りゃしねえぞ」
やってられんとばかりに髪をかきむしるゲイルに向けて、サムは右手の人差し指を立てて左右に振る。
「落ち着いてください。すでに手配はしています」
さて、とサムは着けてもいない腕時計を見る仕草をすると、どこからか口笛のような音が聞こえてきた。

「なに、この音……？」
空気を切り裂く音はじょじょに大きくなり、三人の真上を通過したかと思うと、突然巨大な何かが空から落下してきた。
「きゃあっ！」
「うおっ！　何だあ？」
いきなり轟音とともに巨大なコンテナが目の前に落下し、大量の土砂が三人に降り注ぐ。ゲイルとサーシャは衝撃で転び、頭から土を被った。
「なに？　なんなの？」
「ぺっぺっ……口ん中に土が……」
落下の衝撃で舞い上がった土煙が晴れると、まだ大気の摩擦で煙を上げているコンテナの前で、サムが満足そうに仁王立ちしていた。
「ふむ、座標ぴったり。さすがキャサリン。いい仕事をしますね」
コンテナをバンバンと叩くサム。一辺の長さがサムの身長とほぼ同じくらいあり、コンテナというよりはむしろちょっとした小屋だ。家具や機材さえあれば、中に人が住めるだろう。
「馬鹿野郎！　衛星軌道からコンテナを投下するなら、もっと離れた場所に落とせ！」
「あまり離れた場所に落とすと、中のものを取り出す前に敵がこちらに向かってくる危険性があります。なので極力至近距離に投下するのが適切だと判断しました」
言いながらサムは、コンテナの側面にあるパネルを操作する。ごつい指で器用にボタンを押すと、ばしゅんと中の空気が吐き出される音がしてコンテナの上部が開く。観音開きになったコンテナに手を入れると、サムは中に収納されていたものを無造作に取り出した。
「使い方はわかりますね？」
取り出した黒くて長い鉄の塊をゲイルに放り投げる。常人なら持つことすらままならない大きな鉄塊を、ゲイルは棒切れのように受け取った。
鉄の塊は、形だけは銃に見える。だが大きさが比較にならない。

二メートルはゆうにある砲身は太さが大人の腕ほどもあり、銃口の大きさは子猫が中を通って遊べるくらいだ。そして本体の下部に接続された弾倉（マガジン）は、どう軽く見積もっても百キロはあるように見える。銃本体と合わせると、総重量がいくらになるか見当もつかない。

「フン、誰に言ってやがる」

ゲイルは新しいおもちゃを渡された子供のような笑顔で、軽々と銃を構える。ずしりと手に伝わる重量感。陽光を受け黒光りするボディ。そして染み込んだグリスと油と火薬の混じった臭いが実に頼もしい。

「どちらが多く仕留めるか競争するか？」

「いいですね。でもどうせなら、何か賭けませんか？」

「当然。そのほうが盛り上がる」

コンテナから新たにサムが取り出したものは、先にゲイルに渡した銃の倍以上の大きさがあった。そして同じものをもう一つ取り出す。

「で、何を賭けます？」

「……いきなりイカサマかよ」

恐竜でも二秒で挽肉（ミンチ）にできそうな巨大ガトリング砲を二丁拳銃にするサムに、ゲイルは舌打ちをする。

「やめだやめ。こんなんじゃ勝負になりゃしねえ。そんな事よりそろそろ始めるぞ！」

「了解――っとその前に」

サムがコンテナの中身をすべて外に放り出すと、お手玉のように予備の弾倉が宙を舞い、次々と地面に突き刺さる。

「失礼」

「きゃっ……」

サムはひょいとサーシャを抱えると、すっかり空になったコンテナの中にそっと下ろした。

「ちょっと、何するのよ？」

「この中なら安全ですので、しばらくここで大人しくしておいて

ください」
「あ、ちょっと待って――」
「御機嫌よう、サーシャ。また後でお会いしましょう」
サーシャがぴょんぴょん跳ねて文句を言うが、構わずサムはコンテナの蓋を閉める。完全密閉しなければ窒息することはないし、強度については先ほどの衛星軌道からの投下で実証済みだ。大気圏突入にも耐えるコンテナの内部は、間違いなくこの惑星で最も安全なシェルターだろう。
「お待たせしました。では参りましょう」
すっかり待ちくたびれたゲイルは、への字口を笑みの形に曲げる。
「フン。お前、最初っからあいつをあれに入れる気だったな？」
「ご明察。あれなら誤って火山が噴火しても、充分耐えられますからね」
「ま、あれなら怪物が踏んでもびくともしねえだろ」
「耐久性能だけはお墨付きですからね」
違いない、とゲイルは笑って背を向ける。サムもすぐに後に続き、二人は火山に向けてゆっくりと歩み始めた。

24

待ち構えるは、約三万の怪物。それに一歩、また一歩と近づく二人の間には、さぞ張り詰めた空気が流れているかと思いきや――

「ところでサム。こんな骨董品、いったいどこから調達して来たんだ？　たしか特務捜査課（うち）の武器庫には、こんなのなかっただろ」

肩に担いだ銃をひょいと持ち上げるゲイルに、サムは含み笑いをして「知りたいですか？」ともったいぶった言い方をする。

「なんだよ、言えよ」

「ダラズ・ウェストパック課長殿の個人的な蒐集物（コレクション）から、無断で失敬してきたんですよ」

サムがとんでもない事を暴露するや否や、ゲイルは高らかに笑い出した。

「あいつの私物をちょろまかして来たのか？　おまえ最高だな！」

愉快痛快極まりないといった感じで、ゲイルはサムの背中をバシバシ叩く。

いくらゲイルたちには骨董品でも、この惑星の科学力では明らかな過剰技術（オーバーテクノロジー）だ。本来任務で使用する火器や道具を已む無く破棄する場合は、原型を留めないほど破壊しなければならない。そうしないと原住民に身の丈以上の技術を与える可能性があるからだ。しかしいくら緊急事態とは言え、装備や武器を破棄すると始末書（ペナルティ）が下るのだが、今回は話が違う。むしろここで使い潰して、粗大ゴミにしてしまっていいのだ。

「しかも押収した証拠品の横流しですから、盗難にあっても表沙汰にできませんしね。まあ彼のような蒐集家（マニア）の手元で埃を被るより、我々が有効活用してあげたほうが銃も喜ぶでしょう」

「そうだな。最後に使って供養してやるのが、せめてもの情けってやつだ」

「物は使ってこそですからね」

「違いねえ。だがお前も手癖が悪いな」
「貴方の相棒ですから」
「ハッ、それも違いねえ」
――思い切りピクニック気分で楽しく雑談していた。

いくら並外れた破壊力の武器を装備しているとはいえ、この余裕はいったいどこから湧いてくるのだろうか。
圧倒的な数の怪物を相手にするという恐怖や、絶望的な現実が彼らに現実逃避をさせているわけではない。彼らはこれまでも、こんな感じで飄々と気軽に、まるで近所にふらっと散歩に行く感覚で戦場を渡り歩いてきた。そしてこれからも、彼らが本来の目的を果たすまで、こうやって鼻歌まじりに死地を歩いていくだろう。
何故なら、彼らは知っているからだ。
この程度の修羅場など、修羅場と呼ぶに値しない事を。
彼らが行く先には、こんな怪物たちなど比較にならない悪鬼羅刹が待っている事を。
そして自分たちがそんなものになど負けない、この宇宙で最強の存在だという事を。
その揺るぎない自信と覚悟があるから、たとえ視界が埋め尽くされるほどの怪物が、今まさに自分たちに向かって来ていようが、まったく焦りも怯みもなく、あたかも自分の家の玄関から外に出るように一歩を踏み出せる。
ゲイルが肩に担いだ銃を構える。安全装置（セイフティ）を解除し、設定は勿論フルオート。秒間十発の咆哮を上げる野獣の鎖を解き放つ。
「サム、火器管制解除《ＦＣＳ》。目標の左翼を集中攻撃。俺は右翼を叩く」
「了解」
サムが応答すると同時に、両手に持ったガトリング砲の砲身が勢いよく回転を始める。
毎分六千発の、鉛弾という死の宣告を届ける死神が二門。荒野を

血の海に変える地獄の使徒が、唸りを上げて引き金を引かれるのを待ちわびる。
「さあ、害虫駆除の始まりだ」
我――最強なり。
地響きを鳴らして迫る怪物たちの怒涛に、ゲイルの声がかき消される。
それはまるで、この戦いの幕開けを告げるブザーのようだった。

25

◆

三つの銃が火花を咲かせると、次々と怪物たちが爆ぜる。前の者が倒れれば、その屍の上を新たな怪物が踏み越える。もはや掃討戦とも呼べない、一方的な虐殺が展開している。

大量生産される死骸と、垂れ流される体液。辺りには異臭と硝煙の混ざった臭いが立ち込め、銃声と雄叫びが耳をつんざく。

ここがどこだと訊かれたら、人は単純な一言を発するだろう。

地獄――と。

地獄絵図という言葉が具象化したものが、今まさに目の前に存在していた。

蟻頭はその大きさのせいで、移動速度が極端に遅い。いかに数が圧倒的とはいえ、距離をとって狙い撃ちするだけなら子供でもできそうだ。もっとも、これだけ巨大な銃が子供に扱えたらの話だが。

「ったく、のろまをカモ撃ちするのはいいが、次から次へと湧いてきてキリがねえぜ」

砲身から撃ちだされる弾丸が、連続で蟻の頭を破壊していく。埋め尽くす怪物の多さに、流れ弾でさえどれかに当たる。これなら目をつむってても当たるだろう。

「今度は本当に目をつむらないでくださいね」

「わあってるよ。クソ、古い話を持ち出すな」

腹に数発の弾丸を受け、怪物は狂ったように吼える。生命力の高い怪物は、緑色の体液をぶちまけながらもなおこちらに向かって来た。

「馬鹿野郎！　弾がもったいないから頭を狙え！」

ゲイルの怒気の篭った指示に、サムは銃口を上げる。焼けた火の玉が怪物の頭に真っ直ぐ伸び、熟れた果実のように瑞々しい音とと

もに弾けた。それきり怪物は動かなくなるが、次の怪物が押しのけるようにしてまた前に現れる。
夜店の射的のように、次々と怪物の頭を吹き飛ばす。まるで何かのまじないのように、頭のない怪物が奇妙なオブジェを作っていった。二人の足元には空になった薬莢が数え切れないくらい散らばり、ゴミのように弾倉が転がっている。
それでも怪物の押し寄せる勢いはいささかも衰えず、ゲイルとサムの銃身は焼けて熱をもってなお火花を上げざるを得ない。だが目標を両翼に分けた一斉射撃は、怪物の波を三等分していた。
山という字を逆さにしたように、中央を除いた両翼の怪物たちが見る見る数を減らしていく。だが山の字が1の字に変わる前に、銃の弾が切れた。

頬を伝う汗を拭う事も忘れて、男は食い入るようにモニター画面を見つめていた。
画面には、レーダーのように無数の青い点が表示されているが、それが瞬きする間も与えないくらいの速度で消滅していく。かつては画面を埋め尽くさんほどにあった点は、今ではその数を半分近く減らしている。このままのペースで減少していけば、あと一時間もせずにすべてが消えるだろう。
「何だこれは……」
その問いに答えられる者は、この場にはいない。それ以前に、言葉を話せる者は彼以外いないのだ。
だがこの場にいるのが彼一人というわけではない。彼の背後では数人が機械の調節をしたり、制御板を操作している。しかし彼らは皆、首から上がどう見ても人間のものではない。人の体に蜘蛛の頭部を強引に乗せた奇妙な生物が、科学的な装置を黙々と操作している。八つの目がどこを見ているのかわからないが、モニターを注視している主人の指示に従って立ち働いていた。
彼らがいる部屋は、その人数にしては馬鹿みたいに広く、薄暗い

部屋にはいくつもの巨大なパイプが天地を貫いてそびえ立っている。パイプたちがごうんごうんと呻き、反響した音は高い天井へと広がり、そして明かりが届かない闇へと吸い込まれていく。
パイプの根元には何かの装置があり、蜘蛛頭がせっせと操作盤をいじっている。今ゲイルたちと戦っている怪物たちとは一線を画した、高い知能を持っているタイプのようだ。その分体のサイズが人間に近く、頭の事さえ意識しなければ科学者のように見えなくもない。
男が蜘蛛頭たちの作業を急がせると、パイプの唸る音が大きくなる。まるで大地からすべてを吸い尽くすように、天地を貫くパイプたちがうごめく。
こうしている間にも、画面の中の青い点はもの凄い速さで減っている。早くしなければ。男の焦りが募るが、あまり事を急いではまた同じ過ちを繰り返してしまう。慎重に、だが急いで作業をしなければ。
男が再度画面を見ると、もう青い点は最初の半分ほどになっていた。

「チッ、さすがに数が多すぎる」
銃身が真っ赤に焼けた銃を手放し、ゲイルが舌打ちをする。地面に落ちた銃は、飛び散った怪物の体液に触れ、じゅっと焦げた音と臭い煙を上げる。
「こちらも弾切れです。ですがこのまま連続射撃をしていたら、いずれ砲身が詰まって暴発していたでしょう。潮時というやつです」
サムも両手から銃を離すと、ずしんと音を立てて銃口から煙が上がる。最後に咲かせる一花としては充分なほど活躍した、満足して吐く溜め息のような煙だった。
「あとは肉弾戦か。銃も嫌いじゃないが、俺にはやっぱコッチのが性に合ってるぜ」
ゲイルは両の拳を打ち合わせる。だがいくら銃撃で数を減らした

とはいえ、ゆうに半数は残っている。ざっと一万五千の敵が、ゆっくりとは言えもう目の前に迫っていた。
「ようやっと折り返しかよ。数が多すぎてうんざりするぜ」
「このまま残った敵を蹴散らすだけなら簡単ですが、それだとちょっと面白みが足りませんね」
生真面目なサムにしては珍しく、戦闘に遊び心を求める提案にゲイルは思わず笑みをこぼす。
「何かおかしな事を言いましたか？」
「いや……お前からそんな言葉が出るとはな。ここ数日で随分丸くなったもんだ」
「お忘れですか？　こう見えても私は貴方の分身。つまり一心同体なんですよ」
「忘れちゃいないさ。俺たちは二人で一人、つまりニコイチだ。そこで相棒、一つ提案がある」
ゲイルは不審な顔をする相棒に向けて、いたずらを思いついた子供のような笑顔を向ける。絶対ろくでもない事を考えているに違いない笑みに、サムはおざなりに「はあ……」と答えた。
「残るは中央の団体さんだけだ。ここで最も有効な戦略は何だと思う？」
「それは――」
「そう、前後からの挟撃だ」
「……え？　いや、まだ何も――」
「つまり、お前が敵の後方に回り込み、俺と挟み撃ちするんだよ」
「はあ……」
答えなど最初からどうでもいいのか、ゲイルは勝手に話を進める。どうせこんな事だろうと思っていたサムは、余計な冗句を入れて話の腰を折ってもゲイルがヘソを曲げるだけだと正しい判断をし、仕方なく話を合わせる。
「ですが、どうやって敵の後方へ回り込むのですか？　さすがに飛ぶには距離がありますよ」

「いい質問だ。俺もそれを思案していたんだが――」
当然の疑問だという感じで頷き、ゲイルはサムの背後に回る。
「今さっき、いい方法を思いついた」
ゲイルはやおらサムの足元にしゃがみ込み、彼の右足を掴む。
「俺がお前を投げる」
「え？」
言うが早いかゲイルはサムを持ち上げると、その場で回転を始めた。
「うおおおおおっ！」
体重一トンのサムが遠心力で加速し、軸となったゲイルの足が地面に穴を掘る。
「必殺、相棒投げ《サム・トルネード》！」
できたてほやほやの技名を叫びながら、ゲイルはハンマー投げの要領でサムを投げた。

ゲイルの手を離れたサムの巨体は、砲弾の如く怪物の群れに向かって飛ぶ。
（やれやれ。どうせこんな事だと思いましたよ……）
空気を切り裂く速度で地面と水平に飛びながら、サムは諦めたように溜め息をついた。だが猛烈な勢いで迫る怪物の姿に、すぐさま思考を切り替える。今考えるのはゲイルを責める事ではない。どれだけ効率よく敵を殲滅するかだ。
（だとすると、このまま敵陣を通過するだけでは芸がありませんね）
サムが両手を横に振ると、手の甲から超振動ブレード（ブラッディロンド）が飛び出す。
「必殺、流血の輪舞」
両腕を広げたまま体を高速できりもみさせ、鋭利な刃を持つ巨大なプロペラと化したサムは、怪物を切り刻みながら敵陣を一気に通過する。
回転をやめ、地面を十数メートルほど削りながら着地を決めると、

一拍の間を置いてサムが通過した直線上にいた怪物たちが一斉に体液を撒き散らして倒れた。
「あの野郎、俺よりかっこいい名前つけるたあ味な真似を……」
遥か後方で、お株を奪われたゲイルが歯噛みをしている。普段なら必殺だの秘技だの恥ずかしい台詞は言わないサムだが、ゲイルの悔しそうな顔を見ると、たまには相棒の真似をしてみるのも悪くない気がした。
「センスの差が出てしまいましたね」
すぐさま踵を返すと、サムは敵陣後方に向けて速攻をかける。サムの突然の登場に気づいたものの、方向転換の遅い怪物たちは対応できない。のろのろと巨体を引きずる怪物たちを、サムは両腕のブレードで次々となます切りにしていく。
怪物の体液が飛び散り体を濡らす。せっかく洗った装甲が汚れた不快感に、サムは無い眉をひそめた。
その時、背後から急接近する物体の存在を知らせる警報（アラーム）がサムの中に響いた。これまでにない識別反応だ。
（速い！）
攻撃の気配にサムが身をかわすと、間一髪のところで怪物の爪が空を切った。
すぐさま体勢を立て直し、攻撃してきた相手を探す。すると目の前に、自分と同じくらいのサイズの怪物がファイティングポーズをとっていた。
今まで蟻頭クラスの巨大な怪物ばかりに気を取られていたが、どうやら怪物は一種類ではなく、サイズや体型のバリエーションが何種類かあるようだ。目の前の怪物は、蟻頭とはサイズも体型もまるで違う。頭が昆虫に近いのは仕様だろうが、これは蟻よりも蜂に似ている。胴体や手足がかなり人間に近く、恐らくは機動性や汎用性を重視したタイプなのだろう。筋骨隆々の外観だが、装甲のような外骨格は高い防御力を持っていると推測できる。きっと二人の撃った銃弾さえも耐え凌ぐに違いない。いや、きっと効果がなかったか

ら、今こうしてサムと対峙しているのだ。
（やれやれ、これは思ったより楽をさせてくれそうにありませんね）
サムは内心で溜め息をつくと、両腕のブレードを収める。試してはいないが、この怪物の装甲にはあまり効果がないだろう。余計なエネルギーをブレードに回すよりは、少しでも運動エネルギーに使う方が良策だ。
蜂頭はサムを威嚇するように、顎をぎちぎちと鳴らす。気のせいか蟻の頭よりも蜂の頭のほうが凶暴に見える。そして蟻頭よりも戦闘に特化しているのは、先の奇襲から容易に窺えた。
（殴り合いはゲイルのほうが似合っているのですが……）
銃や剣のようにスマートな戦いが好みのサムにとって、ゲイルのように徒手空拳で戦うのはあまり趣味じゃない。だが好き嫌いを言える場合ではないので、仕方なくもっとも原始的な戦闘に移行する。
先に動いたのは蜂頭だった。しゅんと風を切るような音とともに、一瞬でサムとの間合いを詰める。そして鋭い爪のついた手を振るうが、いとも簡単にサムに受け止められた。
「まあ、好みじゃないからといって、苦手とは限らないのですがね」
サムに掴まれた蜂頭の手が、ぎちぎちと軋む。プレス機よりも強い力で締めつけられ、指が枯れ枝のように折れた。
苦痛の悲鳴を上げる蜂頭。すかさずサムはその頭を両手で掴み、飛びかかりざまに右の膝蹴りを入れる。
山を揺るがすほどの強烈な膝蹴りに、蜂頭の顔面にヒビが入る。だが生命力も虫並みなのか、まだ絶命には至らない。
「刺突（パイル）モード」
次の瞬間、どん、という音とともにサムの膝から杭が飛び出す。圧縮空気によって射出されたパイルバンカーの先端が、蜂の顔を突き破って後頭部から出た。
だがまだ蜂頭は倒れず、顔に刺さった杭を抜こうと手をかけた。

何という生命力だ。しかしサムは、そうはさせじとさらに畳みかける。

「削撃(スクリュー)モード」

蜂頭に刺さった杭の表面がばくんと避ける。杭はドリルに変形して高速回転を始め、蜂の頭を掘削する。

ドリルとなったパイルバンカー――略してドリルバンカーが唸りを上げ、蜂頭の外殻が卵の殻を剥くように弾け飛ぶ。顔をほじられ、蜂頭は痙攣しながらいろんな色の体液を飛ばした。

杭の回転が止まると、蜂の頭にはすっかり空洞ができ、向こうが見えるようになった。すかすかになった顔から杭を抜き、サムが着地する頃、ようやく蜂頭は生命活動を停止させた。

まずは一匹、と一息つく間もなく、サムの周囲に同種の蜂頭が集まる。周りをぐるりと囲んだ蜂頭が舌なめずりをするように顎を鳴らす。

「何だか笑われているようで不愉快ですね。たったそれだけの数で取り囲んだくらいで、もう勝った気になっているのですか？」

サムの言葉が理解できるのかいないのか、蜂頭たちは顎を鳴らしながらゆっくりとサムに近づき間合いを詰める。

ふう、とサムは呆れたように息を吐く。

「やれやれ……舐められたものです。では教えてさしあげましょう――」

すると、サムの左膝から右膝と同じ杭が飛び出す。

次に両腕を軽く曲げると、両肘からも杭が飛び出す。

計四本のドリルバンカーが回転し、獲物を早く貫きたくて堪らないと吠える。

「――ゲイルに必殺の技があるように、私には色々と奥の手(モード)があるという事を」

26

◆

怪物たちが何者かに破竹の勢いで倒されている事は、モニター画面に表示された青い点を見ればわかる。だがその正体がわからない。こんな事なら、怪物の位置を把握するためのエネルギー観測装置だけでなく、監視用のカメラを研究所の外に仕掛けておけば良かったと男は後悔する。

この部屋にはエネルギーに関する装置しかないので、外の様子はまったくわからない。せいぜい二つの何かが自分の作った怪物たちと戦っているというのがわかるくらいだ。

二つの何かは、今も怪物たちを次々と倒していく。

まさかこの惑星の兵器ではあるまい。この星程度の科学力で、怪物たちが倒せるわけがない。かつて何度か軍隊らしきものが戦いを挑みに来たが、圧勝だったではないか。

だとしたら――。

モニターの画面を切り替える。怪物を示す青い点の他に、二つの赤い点が表示された。すなわちこれが敵だ。キーを操作すると、二つの赤い点にそれぞれグラフが数本つく。見る見る数値が増えるグラフに、男は愕然とした。間違いない。赤い点はこの惑星のものではない。何故なら、このグラフは科学的なエネルギーしか測定しないし、数日前に一度観測したデータも残っている。

だがグラフが表す数値が尋常ではない。まるで戦車、いや、戦艦だ。それも連邦宇宙軍の突撃艦クラスのエネルギー量が計測されていた。しかも数値はまだ増え続け、赤い点一つで艦隊クラスのエネルギーになろうとしている。

まさか連邦宇宙軍か、と思ったがそれも色々と解せない事が多い。赤い点の正体が戦艦だったとしたら、もっと早く存在を感知できたはずだ。

それに戦艦による攻撃だとしたら、怪物の減り方が少ないように思える。爆雷にしろ砲撃にしろ、戦艦が攻撃を開始したらいかに数万の怪物といえど、ほぼ一瞬で消滅してしまう。

男はまたキーを操作し、青い点と赤い点を同時に表示する。そして二種類の点の動きを、リアルタイムで表示するように操作した。

「こ、これは……」

思わず男は呻く。モニターには、二つの赤い点が目まぐるしく動き回って青い点を消滅させている。これではまるで――。

「まるで各個撃破じゃないか……」

二つの何かが、一体ずつ怪物を倒している。しかも恐るべきペースで。そんな馬鹿な話があるか。効率が悪すぎる。何故一斉掃射や絨毯爆撃をしない。何の戦略や目的があってそんな面倒な真似をする。

理解できない事だらけの状況に男は混乱する。理解できない事は、男にとって耐え難い事だ。

いつしか男は自分が置かれた状況を忘れ、モニターに見入っていた。理解できないなら、この目で直接見ればいい。そして手に取り、分析し、研究したい。科学者としての抗えない性に、男は身悶えした。

男が狂気と苦悩に身をよじる背後の空間で、天地を貫くパイプたちがごうんごうんと唸る。

早く。早く。早く。早く。早く。もっと早く抽出せねば。そうすれば、二つの何かなど恐るるに足らなくなる。倒し捕まえ解体し、その謎を心ゆくまで、構成分子の隅々まで研究してやろう。

パイプの唸りが激しくなる。男が蜘蛛頭に指示を出し、作業の速度を上げさせたからだ。

もう慎重さも過去の失敗も男の中には無い。あるのはただ、早くこの不可解な二つの何かを研究したいという欲求だけだった。

ゲイルが超振動をまとった掌を蟻頭の腹に叩きつけると、腹の反

対側がぶくぶくと泡立って爆ぜた。
蟻頭の腹の中には、体液がなみなみと詰まっている。そこに固有振動を与えてやれば、体液の分子が振動によりこすれ合って沸騰する。電子レンジと同じ要領である。
ぐつぐつと煮えたぎる体液を噴出しながら、蟻頭の巨体が倒れる。それを見送る暇も惜しむように、ゲイルは次の獲物に掌底を叩き込んだ。
蟻頭に関するデータは、すでに何度も戦っているので充分過ぎるほど揃っている。怪獣大百科に蟻頭の項を作れと言われても困らないほどのデータは、かつて夜の狩りの時にサムが採取したものだ。それがあるからこそ、ゲイルは最速で蟻頭を倒す事ができる。
戦場の中で精神は限界を超えて高揚し、内燃氣環はいつになく絶好調。絶える事なく湧き出る無限のエネルギーが、ゲイルの体内で荒れ狂う怒涛となっている。今のゲイルなら、惑星でも破壊できるだろう。
「しかし楽なのはいいが、少々退屈だな」
難易度の低いゲームをやっているようで、いささか物足りなさを感じていたゲイルは、見た事もないタイプの怪物に囲まれて孤軍奮闘している相棒を羨む。
サムは同じ体格の蜂頭数体と同時に戦っていた。両手両足から生えたドリルバンカーは、サムの持つ近接格闘用装備のひとつである。ゲイルの目には、一度に四本すべて解放し、蜂頭を次々と穴だらけにしている姿がとても楽しそうに見えた。
「チ、あいつばかりモテやがって」
自分が雑魚キャラの相手をしている間に、相棒は新種の怪物とイチャイチャしている。何と羨ましい。ゲイルはいつまでもこんな敗戦処理投手のような消化試合をしているつもりなどない。だが何故か寄ってくるのはもう見飽きた蟻頭だけだ。こういう時こそルーチンワークの得意なサムの出番だと思うのだが、森で最初の一匹を倒したのが因果なのか、さっきからずっと同じタイプの怪物しか目に

つかない。格下の相手ばかりさせられ、欲求不満が募る。もっと血を沸き立たせるような、熱いバトルがしたかった。
「クソ、俺もギリギリ限界バトルを楽しみたいぜ」
まるでレーシングカーで公道を走っている気分になる。エンジンはフル回転しているのに、アクセルを開けないもどかしさで苛々する。ギアが低すぎてエンストを起こしそうだ。
発散しきれない鬱憤をぶつけるかの如く、連続で三匹の蟻頭を倒した。そして四匹目の蟻頭に固有振動を叩き込もうとしたその瞬間、いきなり蟻頭の腹を突き破って槍が飛び出してきた。
「うおっ……！」
咄嗟に身をよじって槍をかわす。側宙をして地面に方膝をつくと、再び槍が襲ってきた。
すかさず体を横に投げ出し回避するが、槍はまるで意思を持っているかのようにゲイルを追尾する。地面を転がるゲイルのすぐ横を、槍が連続で突き刺し穴を穿っていった。
体勢を立て直し、ゲイルは槍から距離をとる。だが操る者のいない槍だけが、ついさっきまでゲイルが転がっていた地面に突き刺さっていた。
「どうなってんだ？」
槍の使い手を探そうとゲイルが意識を反らした瞬間、槍の形状に変化が現れた。
「なんだあ……？」
五メートルほどの鋼の槍がいきなりぐにゃりと曲がったかと思うと、蛇のように地面にとぐろを巻いた。うねうねと身をくねらせる姿は蛇のようだが、目も口も何もないただの針みたいな姿は蛇に似た別のものを連想させた。
「ハリガネムシみてえだな……。宿主がでかいと、寄生虫までかくなるのか？」
槍だと思われた寄生生物は、巨大な蟻頭から出てきたに相応しい体長だが、見かけはまさにあの寄生虫のハリガネムシだ。だが宿主

がまだ生きているにも関わらず外に飛び出し襲いかかってきたところを見ると、ただ寄生しているだけではなく独立した一個の戦力として機能しているのだろう。
つまりさっきの攻撃はただ宿主の身に危険が迫ったから飛び出した退避行動ではなく、むしろ最も有効なタイミングで敵を攻撃する奇襲戦法だったのではないか。だとしたら、宿主である蟻頭の体を顧みない行動から、巨大ハリガネムシは蟻頭よりも上位の存在かもしれない。
退屈していた戦闘に、テコ入れするかの如く登場した巨大ハリガネムシ。これからどんな展開になるか予想もつかない。
ちらりと地面に穿たれた穴を見る。大口径の銃弾が着弾したような跡は、巨大ハリガネムシがついさっき開けたものだ。突きの鋭さや威力は、ゲイルたちが乱射した銃弾と同等だと思われる。
従来なら銃弾など問題にしない。ゲイルが着ている戦闘服は防弾防刃に加え、防火耐熱耐寒などあらゆる外的要因に対応できる優れものなのだが、いかんせん今は故障中である。いかに科学の粋を集めた、宇宙空間ですら活動可能な戦闘服でも、機能してなければ電源の入っていない家電製品と同じで意味がない。ナノマシンが活動していないただの服でこんな攻撃を喰らったら、全身穴だらけだ。
今のゲイルは、銃口を突きつけられた一般人と変わらない。だがあらゆる意味で一般人とは遥かにかけ離れた存在である彼は、だからこそ一般人には真似できない行動に出た。
「ヒイィィイィィヤッホォォオゥッ！」
若干巻き舌が入った絶叫とともに、ゲイルは巨大ハリガネムシに突進した。
「やっぱバトルにはスリルがないと、盛り上がらないよな！」
向かってくるゲイルに対し、巨大ハリガネムシが鎌首を持ち上げる。そしてバネのように収縮すると、ゲイルを串刺しにしようと飛び出した。
眉間に向けて、弾丸よりも早く打ち出された巨大ハリガネムシの

一撃を、ゲイルは前回し受けでさばく。すぐさま手を返してそれを掴むと、両手に持ちかえて力任せに引っ張った。
硬化テクタイトすら引きちぎるゲイルの筋力に、さしもの巨大ハリガネムシもゴムのように伸びる。鋼線に似た体が引き伸ばされ、繊維がぷつぷつ切れる。だが完全にちぎれる前に、ゲイルの動きが止まった。
「なに？」
気がつけば、ゲイルの足元から数匹の巨大ハリガネムシが這い出し、手足に絡みついていた。一匹だけかと思っていたが、すでに他の数匹が地面に潜って身を隠していたのだ。蟻頭から飛び出してきたのは奇襲ではなくただの囮で、それに気をとられたところをまんまと絡めとられてしまった。
「ぐ……畜生……」
巨大ハリガネムシたちに拘束され、ゲイルは身動きがとれない。線虫たちの締め上げる力は思ったより強く、ゲイルですら容易に振りほどけないほどだ。並みの人間ならすでに五体がバラバラになっていただろう。
首に巻きついた一匹が、ゲイルの息を止める。脳に回る血液と呼吸を止められ、苦しさから手に持った巨大ハリガネムシが滑り落ちる。地面に落ちた線虫はもう動かない。だが囮としての役目を果たした、名誉の戦死である。虫としては立派な最期だろう。
そして線虫の罠にかかりがんじ絡めのゲイルは、不名誉な戦死を目前に控えていた。
「う、動けねえ……」
一匹なら簡単に引きちぎれる巨大ハリガネムシでも、数匹まとめて絡まればその強度も数倍である。いくらゲイルが手足に力を入れてもびくともしなかった。
首に巻きついた線虫が、気管や血管を締めつける。このままでは窒息するか首の骨が折れるかのどちらかだ。
だがそれすら待てないのか、ゲイルの目前の地面から新たな巨大

ハリガネムシが這い出してきた。まさか――と思うが悪い予感は外れる事はなく、線虫はゲイルに狙いを定めて今まさに己自身を発射しようとしていた。

「クソ、ここまでか……」

悔しそうに歯を食いしばるゲイル。絶体絶命のピンチに、さすがの彼も覚悟を決めたのか全身の力を抜いた。

「……な～んて言うとでも思ったのか？」

うなだれた顔を上げ、ゲイルがにやりと笑う。絶望も諦めもなく、むしろピンチを楽しんでいる笑み。敵の罠にかかって、命が風前の灯火だというのに、その笑顔はあまりにも不敵。こんなピンチなどピンチの内に入らないという貌だ。

「なめんじゃねえぞ、虫ケラがぁっ！」

内燃氣環がフル稼働し、ゲイルの全身に力がみなぎる。筋肉が膨れ上がり、全身を締め上げる巨大ハリガネムシを押し返す。

「おおおおおおおおおおっっっ！」

気合一閃。裂帛の気合とともに、ゲイルは体にまとわりついたすべの線虫を引きちぎった。

そして己の眉間に向けて飛んできた巨大ハリガネムシに、渾身の拳を叩き込む。

弾丸よりも早い槍と、岩よりも硬い拳がぶつかる。だが線虫はゲイルの拳と衝突した瞬間、まるで猛スピードで壁に衝突した車のように蛇腹にひしゃげていった。なまじ壮絶な速度で衝突したため、ゲイルのパンチの速度が加算されて線虫自身が耐え切れない衝撃となったのだ。

ゲイルが拳を振り切ると、音の衝撃（ソニックブーム）が巻き起こる。空気の壁をも打ち抜く拳に、誰が太刀打ちできようか。弾丸ですら、彼を仕留めるには荷が重過ぎる。

体にへばりついた線虫の破片を払いながら、ゲイルは地面に転がった槍の成れの果てに告げる。

「虫ごときが俺に勝とうなんて、百億万年早いぜ。だがまあ、そ

こそこ楽しかったよ」
片手を上げ別れを告げると、ゲイルは新たな相手を求めて駆け出した。まだまだ敵はよりどりみどりだ。

27

どん、という音とともに激しい衝撃がコンテナを揺らす。部屋がびりびり震え、サーシャは思わず「きゃっ」と悲鳴を上げてうずくまった。

コンテナには窓などなく、壁や天井から伝わるのはわずかな音や振動だけで、外の様子はまったくわからない。

外では何が起こっているのだろう。そう思った矢先の大きな爆音と衝撃が、サーシャの不安をますますかきたてた。

サムにはこの中でじっとしていろと言われたが、外の様子が気になって仕方がない。だが壁には窓はもちろん扉のようなものはまったくなく、入ってきた天井にはいくら飛び跳ねても指先すらかすりもしなかった。

「んもう、どうして窓や入り口がないのよ！」

それはこれが貨物用コンテナで、中に人が入る事を前提としていないから当たり前の事なのだが、当然サーシャには知る由もない。

散々コンテナを探索したり飛び跳ねていたが、疲れてしまってその場に座り込んだ。鞄を開き、中身をすべて床にぶちまける。ほとんどが薬や包帯だった。ゲイルとサムがどんなケガをするか判らないので、とりあえず持てるだけ持ってきたのだ。

もうサーシャにできる事は、いつでもゲイルとサムの治療ができるように準備する事だけだ。

（二人とも大丈夫よね……。ケガとかしてないよね……）

あれだけの数の怪物を相手に、無傷で帰ってこれるとは思っていない。けれどできる事ならこれらが無駄になってくれるようにと願いながら、サーシャは荷物の一つ一つを丁寧に床に並べて点検し始めた。

◆

薄暗い室内では、蜘蛛頭たちが慌しく動き回っている。表情のな

い虫の顔だが、懸命に働く姿を見ているとちゃんと忙しそうに見えるから不思議だ。
ばたばたと立ち働いている蜘蛛頭たちと同様、建ち並んだパイプたちも唸りを上げて稼動している。だがすでに作業は終了していた。今せっせと働いている蜘蛛頭たちは、作業の後始末をしているだけ。すべては順調に滞りなく、時間内に終了した。
男がもう見なくなったモニターの画面には、すでに一つも青い点は存在していない。だが男の表情には焦りや恐怖はない。今は絶対の自信と、これから訪れる者をどう料理しようかという妄想で、薄ら笑いを浮かべる余裕さえある。
「待っていろ。この私自ら出向いて、貴様たちを解体してくれる！」
男の声が室内に反響する。まだ見ぬ被験体に向けられた声が、虚しく部屋の奥や天井に吸い込まれていく。そして声の木霊が吸い尽くされると、しんと静まり返った。
静寂。
そして轟音。
唐突に天井が崩壊し、瓦礫が蜘蛛頭に降り注ぐ。何の前触れもなく襲いかかる瓦礫のシャワーに、蜘蛛頭たちはあっけなく押し潰されていった。
「な、何ぃっ！？」
もうもうと立ち込める砂塵の中、男は天井に開いた大穴を見上げる。すると大小二つの影が音もなく室内に舞い降りた。
ぽっかりと口を開けた大穴から、一陣の風が室内に吹き込む。風が砂埃を払うと、瓦礫の上に降り立った二人の人物がはっきりと見える。
レーダーであれだけの戦闘力を見せつけられた男は、てっきり武装した戦闘機か新型の兵器が強襲してくると思っていたが、目の前に立っているのは丸腰の優男とただの人型（ロボット）作業機械だ。拍子抜けしそうになるが、よく観察してみると二人の体は緑に染まり、怪物の

ものと思われる粘液が滴っている。信じたくはないが、どうやらこの二人が赤い点の正体だ。
「貴様ら、何者だ！」
男が問いかけると、浸入者の一人が不敵に笑った。
「宇宙連邦治安維持局だ。解かったら茶の一つでも出しな」
あれだけの数の怪物と戦ってここまでやってきたにも関わらず、優男は息一つ乱していない。まるで普通に玄関から入って来た訪問者のようだ。
「宇宙連邦治安維持局？　連邦学術院の狗どもが何の用だ？　それにどうやってここまで入ってきた？」
これまで製造したすべての怪物を倒して来た事もそうだが、二人がここまで侵入してきた事が驚きだ。この研究所への入り口は男しか知らないし、巧妙に隠してある。たとえ場所を知っていたとしても、厳重な警備（セキュリティ）が施してあるので第三者が通れるはずがない。
「簡単ですよ」と巨大な人型が半歩前に出る。
「火山の地下が本拠地だというのは、だいたい目星がついていました。怪物たちも恐らくここで製造していたのでしょう。だとすれば、あれだけ巨大な怪物がどうして外にいるのですかね？」
ロボットがそこまで話すと、男は「解放用のゲートか……」と苦々しく呟く。巨大な怪物を研究所から外に放つために作ったゲートなら、正規の出入り口に比べ警戒は甘い。だが巨大な門ゆえに、正門よりも遥かに巧緻を尽くして隠蔽していたのだが、二人はそこから内部に侵入したというのか。
「私のセンサーをそんじょそこらのものと一緒にしてもらっては困りますね。あの程度の隠蔽工作など、隠していないのと同じですよ」
「審判の刻（ジャッジメントタイム）だぜ、おっさん」
優男はにやりと笑うと、男に向けて拳銃を撃つ仕草をした。

28

男はゲイルに撃ち抜かれたように、体をびくんと震わせる。まさかこんな辺境の惑星に、宇宙連邦治安維持局の捜査官がやってくるとは思いもしなかったようだ。それとも完全に潜伏したつもりだったのか。

「審判？　貴様ら、私がいったい何をしたと言うのだ？」

「おい、コイツまだ自分のした事がわかってねえみたいだぞ。サム、言ってやれ」

「了解」

すぐさまサムが脳内にあるデータベースで検索すると、コンマ数秒で男と一致する人物がヒットした。

「元連邦学術院研究員、ジークレイ・アンジニアス。十年前、ある研究で惑星一つを崩壊に至らしめた罪で、学術院を追放されていますね」

ヒットした情報をサムが読み上げると、男――ジークレイの顔が、過去の暴かれたくない失態を開陳される恥辱に少しずつ歪んでいった。

「その研究とは、惑星内部のエネルギーを抽出し、人工的に生命体を生成するものですね。そして貴方は惑星のエネルギーを限界以上に吸い上げ、崩壊に導いた。この惑星でも同じ事を繰り返すつもりですか？　だとしたら、過去の失敗から何も学んでいませんね」

「なにい……機械人形風情が、何を偉そうに……」

「第一、まずどうやって我々がここに来たかより、何故我々がこの惑星に来たかという考えが浮かばない時点で、貴方は二流なんですよ」

サムの辛辣な言葉に、ジークレイは歯噛みする。だが確かにその通りだ。この惑星は宇宙連邦治安維持局の管轄の中でもかなりの僻地に在るし、他の星に情報を送れるような科学力もない。だからこ

そこの星を使って研究を進めることにしたのだが、いったいどうやって彼らはこの星が怪しいと目星をつけたのか。
「エネルギーを吸い上げられた惑星がどうなるかという事を、貴方は考えもしませんでしたね。星が急激に痩せると、自転や公転周期に乱れが出ます。それを観測したからこそ、我々が調査のために派遣されたのですよ。どうせやるなら、もっとゆっくり吸い上げるべきでしたね」
「たしか十年前に惑星が崩壊した原因も、急激にエネルギーを抽出したからだったよな。同じ間違いを二度するなんて、アホのやるこったぜ」
「馬鹿者！　あれは私の実験が失敗したわけではない。惑星のエネルギーを抽出するという本来の目的は達成しておる。それを連邦学術院の阿呆どもは、非人道的などと科学者にあるまじき批判をし、しかも私の研究に失敗などという不名誉な烙印を押して学術院から追放した……。たった一つ星を破壊しただけで、だ」
「破壊しただけ……だと？」
ぎり、とゲイルは歯を噛み締める。
「てめえ、星一つおしゃかにしておいて、たったそれだけってのはどういう了見だ？」
拳を握り締め、凄まじい形相で睨むゲイルに、ジークレイは失笑する。何を馬鹿な事を言っているのだという人を小ばかにした笑いに、ゲイルの眉間の皺がさらに深くなる。
「たかが未開の星一つ破壊して何が悪い？　むしろ私の研究の糧となれて、名誉な事ではないか」
「……おいおっさん、それ……本気で言ってんのか？」
「当然だ。こんな原始人どもの惑星がどうなろうと、私の知ったことではない」
ゲイルの喰いしばった歯から絞り出す声にすら、ジークレイは笑って答える。彼にとって、この惑星の住民など自分が作り出した虫頭たちと同じ価値なのだろう。いや、むしろ彼の手足となって働く

虫頭たちのほうが、価値があると言わんばかりだ。
「カミサマにでもなったつもりか、この野郎？」
おめでてえな、とゲイルは吐き捨てる。高度な科学力を持つ者が、文明の未発達な惑星に行って悪事を働くのは往々にしてある事だが、ジークレイの研究は度が過ぎている。しかも抽出したエネルギーを使って怪物を作り、この星に住む人々を恐怖で苦しめている。これは明らかに人道に反する行為。そしてジークレイのような者こそ、ゲイルたち宇宙連邦治安維持局が取り締まるべき悪なのだ。
ゲイルは怒りを握りこんだ拳を開き、叩きつけるようにジークレイを指差す。
「決まりだ。お前のような外道は、法が裁く前に俺が徹底的に懲らしめてやる」
「ほほう。捜査官ごときが法を超えるか。それこそ傲慢というものではないのか？」
「別に傲慢じゃないさ。俺はただ気に入らねえ奴をぶっ飛ばすだけだからな」
「ちなみに貴方には黙秘権も、弁護士を呼ぶ権利もありませんからあしからず」
二人は瓦礫から飛び降りると、一気にジークレイへと突進する。
だが男は不敵に笑うと、近くのコンソールを片手で操作した。
「うおっ……！」
「ややっ？」
ジークレイが何やら打ち込み終わると、突然室内の重力が消えた。ゲイルは勿論、体重一トンのサムさえ羽毛のようにふわりと宙に浮く。天井の瓦礫やその下で押し潰されていた蜘蛛頭の死骸たちも、同じくふわふわと浮かんだ。
「クソ、何だこりゃ？」
「どうやらここにはあらかじめ重力を制御する装置が仕掛けられていたようですね」
「ンなこたぁわかってるよ。ったく、これじゃあ上手く進めねえ

！」
じたばたと宙を泳ぐゲイルとサムを、ジークレイは愉快そうに眺める。どうやら自分だけは重力の影響を受けないようにしているのだろう。彼の足は以前と変わらず地に着いたままだった。
「くはははは っ、どうだ。いくら特務捜査官と言えど、こうやって重力を操作してやれば無様に宙を漂うことしかできんだろ。滑稽な姿よのう」
げらげら大笑いすると、ジークレイは続いて別のコンソールを操作する。するとどこからか一本のチューブが彼に向かって伸びてきた。
「ふん！」
チューブの先端には注射器に似た接続端子がついており、ジークレイはそのチューブを掴むと自ら首の後ろに突き刺した。
ぐちゅり、と肉を突き刺す音がする。だがいささかも怯まず淡々と機械を操作すると、続いてチューブが唸りを上げてうごめいた。
「見るがいい。これこそ私が研究を重ねた、惑星エネルギーの新しい使い道よ！」
どくんどくんと、惑星から抽出したエネルギーがチューブを通してジークレイに注ぎ込まれる。チューブが脈打つたびに彼の顔には血管が浮かび上がり、顔色が変わっていく。しかし紅潮しているかと思いきや、病人よりも青ざめたり死体のように土気色になったりとどう見ても尋常ではない変化をきたしている。
「く、う、ふふふふおおおお……あああああがががががあああぁあっ！」
最初は快楽に身悶えていた声が、苦痛に抗う悲鳴になった。びくびくと体を痙攣させ、白目を剥いて涎をたらす姿は重度の麻薬患者を思わせる。
苦痛による悲鳴は息が切れても止めることができず、喉を笛のように鳴らせながら口を開閉させている。垂れ流しになった涎を拭う事も忘れて体を震わせているジークレイの体が、突如膨れ上がった。

どくん、という音がしそうなほど、男の体が膨らむ。体を震わせるたびに手足のあちこちが膨張し、衣服を破っても止まらない。
「ががガがががガガがぐぐぐゲご……」
新種のヒキガエルのような声と、肉が膨らみ骨が軋む音が重なる。耳をふさぎたくなるような身の毛がよだつ怪音に、ゲイルたちもふわふわ浮いている事を忘れて男に釘付けになった。
ジークレイの体から無尽蔵に肉が溢れ、ついには見上げるほどの肉の塊になった。血色の良いピンクの皮膚には赤や青の太い血管が網の目のように広がり脈打っている。巨大な哺乳類の表皮を生きたまま剥いたら、こんな光景になるのかもしれない。うず高くそびえ立つ肉の山の中央に、ちょこんと申し訳程度にジークレイの顔が存在していなければ、ただの特盛り生肉にしか見えない。
「ふぬぐぐぐはははは……見たか。これがエネルギーと生命体の究極の融合だ！」
左右の瞳が別々の方を向きながら、ジークレイは高らかに笑う。だがどう見ても特大の肉色アメーバに人の顔が生えたようにしか見えない。それを究極の姿だ言われても、誰もこうなりたいとは思わないだろう。
「ひでえなこりゃ。完全に容量をオーバーしてやがる」
「余剰エネルギーが暴走し、肉体の限界を無視して増殖していますね」
ジークレイが自ら施したのは、虫頭たちのように無から有を作ったものとはまるで違う、生命の形を変えるものだった。人としての肉体を捨てたジークレイは、今や悪夢の象徴として二人の眼前にそびえ立っていた。
だがサイズが大きくなったとは言え、見た目はただの肉の塊だ。醜悪な容姿から受ける精神的ダメージさえ何とかすれば、後は何ら脅威になる要素は見当たらなかった。
「おい、それでこれから俺たちをどうするつもりだ？」
無重力の中を漂いながら訊ねるゲイルに、ジークレイは笑みを向

ける。数万の怪物を倒してきた相手を前にしているにも関わらず、その笑みはとてつもない自信を含んでいた。
「まあ待ちたまえ。まずは新しく得た肉体のテストをしなければな」
そう言うとジークレイの体から、数本の肉の触手が飛び出した。触手は無重力の中を意思を持ったように自由自在に動き回ると、宙を漂っている蜘蛛頭の死骸に巻きついた。
蜘蛛頭の死骸をすべて絡めとった触手は、飛び出した時と同様滑らかな動きでジークレイの元に戻る。
「後片付けか？　意外と行儀がいいな」
場にそぐわぬ暢気な事を言うゲイルだが、次の瞬間「うえっ」と奇妙な唸り声を上げた。
「こいつ……食ってやがる……」
ジークレイの元まで戻った触手たちは、蜘蛛頭の死骸を絡めたまま肉の塊の中に戻っていった。そして肉塊の中に取り込まれた死骸たちは、ぐじゅりぐじゅりという音を立てて咀嚼され、見る見る溶けてなくなっていった。しかもジークレイの趣向なのか嫌がらせなのか、溶ける様子が透けて見えているのが何とも気味悪い。
「もったいないというわけではないが、あれも一応この惑星のエネルギーから創り出したものだからな。再利用（リサイクル）というやつだよ」
「ぐええ気色わりい……食欲なくなりそうだ……」
食欲が失せる肉塊の食事風景に、さすがのゲイルも渋面する。
「そんな事を言っている場合じゃないでしょ」
「そうか、次は俺たちの番じゃねえか。畜生、あんな奴に食われるなんて冗談じゃねえぞ」
「何を言うか。私の一部となって永遠に生きられるのだ。それ以外にどのような幸福がある。大人しく我が体内に取り込まれよ」
再び触手が飛び出し、今度はゲイルたちに向かって一直線に伸びる。襲いかかる触手は、無重力によって身動きのとれない二人を簡単に捕らえるかに思えた。

だが――
「フン、誰がお前なんかの餌になるかってんだ」
「即お断りします」
触手が触れる寸前、二人は巧妙に体をずらす。そしてすれ違い様にゲイルは手刀を見舞い、サムは超振動ブレードで斬りつけた。切断された触手から血しぶきが飛ぶが、無重力空間ではすぐに玉となって宙を漂う。
「なに……？」
よもやかわされるとは思っていなかったジークレイは、二人の洗練された動きに驚愕の声を上げる。
「アホかおっさん。？宇宙？と名のつくところの特務捜査官の俺たちが、無重力に慣れてなくてどうすんだよ？」
手刀を打ち込んだ慣性で回転する体をコントロールしながらゲイルは笑う。サムも巨体とは思えぬ絶妙な重心の操作でバランスを保っていた。
「おのれ……ならこれでどうだ！」
今度はさっきの十倍以上の触手が二人に襲いかかる。篠つく雨のように降りかかる肉の槍は、さすがに避ける隙間などない。いかに無重力下の行動に慣れていても、こればかりは避けようがないかに見えた。
だが触手が二人を捕らえる事はなかった。何故なら、二人の姿はとっくの昔にそこになかったからだ。だがふわふわと宙に浮いた状態でどうやって。
「ようやく本来の機動性が生かせますね」
サムはゲイルを抱えながら、触手からかなり離れた場所で浮いていた。背中の二基と両足の二基、計四基のバーニアから炎を噴き出しながら。
「な、何だそれは！」
「何だも何も、私の基本装備の一つですが、何か？」
「貴様、ただの補助用機械（サポートメカ）ではないのか？」

「貴方がそう思い込むのは勝手ですが、あまり見くびってもらっては困りますね」
「なら出し惜しみするなってことだ」
相棒の声になるほど、とサムは頷くと、抱えていたゲイルを宙に放り投げた。
「ではお見せしましょう。私の本来の姿を」
「行くぜ、相棒！」
「了解。ゲイル、言霊（キーワード）を」
「応よ」
空中でトンボを切り、ゲイルは高らかに声を上げる。
「我ら――無敵なり！」
ゲイルの発した言霊により、体内の内燃氣環が今までにないほど唸りを上げて稼動する。
「言霊承認。内燃氣環の臨界突破を確認。これより合体シークエンスに入ります」
サムの両目から眩いばかりの光が溢れ、体が前後から真っ二つに割れた。貝のように開いたサムの体内には、ちょうど人がぴったり納まるほどの空洞があった。サムは四基のバーニアを巧みに噴射し、大の字になって宙を漂うゲイルに向かって飛ぶ。
「座標修正。合体シークエンス終了まであと四秒。三、二、一、ゼロ」
カウントダウン終了と同時に、サムの中にゲイルが納まる。そして開いていたサムの体がぴたりと閉じると、全身から凄まじいエネルギーのオーラがほとばしる。
「合体終了。増幅装置（ブースター）と内燃氣環との接続、異常なし。増幅（ブースト）開始」
「うおおおおおおおっ！　来た来た来たきたあぁっ！」
サムに搭載された増幅装置と接続された事により、ゲイルの内燃氣環が限界値を遥かにぶっちぎった稼動を開始する。湧き上がるエネルギーの奔流は止まる事を知らず、これまでとは比べ物にならないエネルギー量は太陽すら焚き火に等しい。

「見たか。これが――これこそが俺たちの本気の力だ！」
文字通り一心同体となったゲイルとサム。これからが二人の本領発揮である。

29

◆

二人が合体した姿は、当然ながら特に何も変わっていない。強いて言えば、ゲイルの姿が見えなくなっただけである。だが無限のエネルギーを生み出す内燃氣環を持つゲイルと、あらゆるエネルギーを増幅させるサム。二人が一つになった事によって、一人だった時とは比較にならないほどの戦闘力を有している。

サムが増幅するのは、何もゲイルの内燃氣環が生み出すエネルギーだけではない。搭乗者――ゲイルの精神エネルギー、いわゆる闘争心やテンションすらも増幅させる事ができるのだ。そしてゲイルの精神が高揚すると内燃氣環はより活発に機能し、サムの増幅装置がまた増幅する。こうやって際限なく増幅されるエネルギーは、そのままゲイルたちの力となる。

つまり、無敵。

「が、合体だとお！？　それにこのエネルギー量……あ、ありえん。まさか、貴様ら……」

「どうだ、ビビったか？　さあ、降参するなら今のうちだぜ」

驚愕のあまりジークレイの肉の体が色を変える。その隙を逃すまいと、ゲイルたちはバーニアを噴かせ一気に突進した。

「オラオラオラァッ！」

高速で間合いを詰め、爆撃のようなパンチのラッシュを見舞う。拳が当たるたびに肉が飛び散り、ジークレイの体を削いでいく。だが有り余るエネルギーが欠けた部分を再生させて、すぐに元通りになっていた。

「チ、これじゃ埒があかねえ」

「驚異的な再生能力ですね」

「愚か者め。その程度の攻撃で、この肉体がどうにかなるとでも思ったのか！」

再び伸びる触手の群れを、ゲイルたちは一度離れてかわす。あれだけ打撃を打ち込んだというのに、すでにジークレイの体には傷一つ見当たらない。まったくのふりだしに戻っていた。
「サム、あいつの固有振動数をサーチできるか？」
「先ほどからやっていますが、絶えず微妙に組成を変えているために特定できません」
サムの能力をもってしても、ジークレイの肉体が組成を変更する速度に追いつけない。固有振動数が特定できなければ、必殺の超振動が打ち込めないのだ。
「フン、だったら打撃でちまちまやるしかねえってのか？」
「それにはまず、あの再生能力を何とかしないと。ですがこの惑星のエネルギーを流用している以上、再生を繰り返させる攻撃を続けるのは得策とは言えません」
「あいつの再生が止まるのは、この惑星がカラッカラになる時だってのかよ？　クソ、厄介な相手だぜ」
精神エネルギーを利用するゲイルの内燃氣環とは違い、ジークレイのエネルギー源は今もこの惑星から吸い上げている惑星エネルギー――すなわちこの星の命である。それが尽きるという事は、この星の死を意味する。
「やはりそうか。貴様らのその得体の知れない無尽蔵なエネルギーと、それを増幅させるS・A・Mとの合体形態（アブソリュートモード）。まさか……完成していたのか？　宇宙格闘術（アストロアーツ）が！」
ようやく合点がいったというように、ジークレイは唾を飛ばす。今度は逆にゲイルたちが驚かされる番だった。
「な、何でお前が宇宙格闘術の事を知ってるんだよ？」
「宇宙格闘術の情報は、連邦学術院に封印されていたはず。それをどうして貴方が……？」
「知っていて当然だ。何しろ宇宙格闘術に必要な要素の一つ、内燃氣環の研究には私も携わっていたからな」
「な、何い……？」「何と……」とゲイルとサムの声が重なる。

「何を驚く？　エネルギー研究の第一人者であるこの私が、無限エネルギーである内燃氣環の研究に関わるのは至極当然の事だ」
しかし、とジークレイは口元を引き締め、何か納得がいかないように考え込む。
宇宙格闘術とは、連邦宇宙軍の依頼によって連邦学術院が開発した、超人的な戦闘力を持つ兵士専用の格闘術である。その内容は、内燃氣環搭載者がＳ・Ａ・Ｍと合体し、増幅したエネルギーを利用して戦闘を行う。太陽すら越える高出力のエネルギーは無限に生産され、この計画が完成すればその戦力は単体でも宇宙連邦軍の主力戦艦一個師団分に匹敵するとさえ言われていた。
だが人間の精神エネルギーを具現化する内燃氣環には、搭載者の肉体が耐えられないという致命的な欠点があった。だからこそジークレイは肉体そのものを変革する惑星エネルギーの研究に乗り換えたのだ。
そして宇宙格闘術の抱えた問題はそれだけではない。内燃氣環を増幅させるＳ・Ａ・Ｍ（Ｓｔｒｅｎｇｔｈ．Ａｍｐｌｉｆｙ．Ｍｅｃｈａｎｉｓｍ）にも大きな問題があった。それは内燃氣環のエネルギーを増幅させる際に、搭載者の精神波長とＳ・Ａ・Ｍの波長を完全に一致させなければ暴走するという点だ。ほんのわずかでも波長が乱れれば、増幅させたエネルギーが逆流（フィードバック）して搭乗者もろとも大爆発する。肉体が耐えられないのなら強化してやればいい。だが二つの精神の波長を同調させなければならないという大問題を、いったいどうやってクリアしたのだろうか。
「そうか貴様、その機械人形と精神を分けおったな？」
腐っても天才科学者か。たったわずかな時間でジークレイは答えを導き出した。
一人の人間の精神を二等分し、まったく同じ精神の波長を持つ者を『もう一人』作る。そして『半分』の精神を持つ者それぞれに内燃氣環と増幅装置を植えつければ、合体した時に『一人』の人間として装置に認識される。確かにこの方法なら問題は解決できるのだ

が、ではどうして複製人間（クローン）を使わないのかという疑問が残る。
それは、クローンだと合体時に『二人』の人間として認識されてしまうからだ。まったく同じ精神の波長でありながら、それぞれが『一人』として認識され、合体すると『二人』の人間が存在する事になってしまい装置が暴走する。だからこそ一人の人間の精神を半分に分ける必要があるのだ。
当然の事ながら、X＋X＝1のような単純な計算など、連邦学術院の研究員が解けないはずがない。実際この解決案はすぐに提示されていた。
だがこの研究は表向き、唯一の解決策があまりにも人道に反しているという理由で封印された事になっている。しかし真相は宇宙連邦軍がこれを所持してしまうと、これまで均衡を保っていた他の機関とのパワーバランスが崩れてしまうからだ。
よって連邦学術院は宇宙格闘術の研究を中止し、データはすべて封印したと発表。宇宙最強の兵士を作る計画は闇に葬られた。だとすれば、完成していないはずの宇宙格闘術が、どうして今目の前にあるのか――。
「くはははははははっはーはっはっはっは！」
すべてを理解したジークレイは、あまりの馬鹿ばかしさに大声で笑い出した。彼でなくても考えれば解かるだろう。そして解かってしまえば呆れるを通り越して、もう笑うしかなくなる。だから彼は、ゲイルたちが呆気にとられるほど大笑いした。
「？やった？んだな。あれだけ人の道に外れるとか言っていた研究を。自分たちの探究心を抑えきれずに実行したのか！」
笑い過ぎて涙まで流し、息を切らしながらもジークレイは笑い続ける。
笑いたくもなるだろう。研究のためとはいえ、一つの惑星を破壊した自分を追放した連邦学術院が、自ら非人道的だと知りつつも宇宙格闘術の研究を続行していたのだ。
彼らのどこに、自分を責める権利があるのか。『人の命は星より

重い』などと言うのなら、彼らのほうがよほど自分よりも罪が重いではないか。それを自分たちの事は棚に上げ、ジークレイを連邦学術院から追放した。自分たちの罪はひた隠しにした上でだ。

もう連邦学術院に未練など毛ほどもない。むしろ道徳や人権などというくだらないものに縛られている彼らを哀れだと思っていた。彼とて学者の端くれ。研究者たるものが、瑣末な理由で研究を捨てなければならない苦渋は彼も知っているからだ。

だがこれですべて吹っ切れた。未練も憐憫も羨望も軽蔑も何もかもなくなった。研究者とは孤独で、世俗とは隔絶されるべきだ。真理の追究という至高の目的の前には、何も立ち塞がるものはない――立ち塞がってはいけない。それが証明されただけだ。

ジークレイの笑い声は次第に収束していき、引き締めた表情はついさっきまで大笑いをしていた者とは思えないほどの真摯なものだった。

30

ジークレイはまるで悟りを開いた僧侶のように、澄み切った眼でサムを見る。だがその視線はサムの中のゲイルを直接射抜いているようだ。厚い装甲を通り越して突き刺さる視線に、ゲイルは思わず喉を鳴らす。

「貴様はそれでいいのか？」

「どういう意味だよ？」

「連邦学術院が宇宙連邦治安維持局を使って危険な科学技術を集めているのも、口では宇宙の安全と平和のためとかぬかしておるが、どこまで本当なのか怪しいものだ。いや、本当はただ研究したいだけなのかもしれん。そして他の誰にも使われたくないから隠しているだけなのだろう。案外貴様ら自身も、その薄汚い思惑のためだけに作られたのかもなしれんな。そんな奴らの狗となって働いて、お前はそれでいいのかと訊いている」

一つの疑問は晴れた。だがジークレイの中に、また新たな疑問が生まれていた。その気になれば今すぐにでも宇宙連邦治安維持局どころか連邦宇宙軍ですら蹴散らせる力を持ちながら、諾々と彼らの言いなりになってこき使われているゲイルとサム。彼らにはどういう意図があって、今こうして自分の前に立ちはだかっているのだろう。恐らく何らかの制約を受けているのは間違いない。だとしても、何か目的があって、あえて従っているふりをしているのではないだろうか。

ジークレイの目には、ゲイルとサムがただ鎖で繋がれているだけの狗には到底見えなかった。絶対に何か、それもただ事ならぬ事情があって、二人が宇宙連邦治安維持局特務捜査官として働いているのだという確信があった。機械人形の中にいるゲイルの表情は見えないが、それでもジークレイの学者としての嗅覚は、沈黙の中に窺えるわずかな葛藤や苦悩を逃さず嗅ぎ取っている。

「フ……」とサムの中でゲイルが小さく笑う。ともすれば噴き出すバーニアの炎の音に消されそうな、小さな笑声。だが惑星エネルギーによって増幅されたジークレイの五感はその息遣いまではっきりと聞き取っていた。やはり何かある――それを知りたいと重すぎて動かない身を乗り出そうとした時。

「んなこたぁとっくの昔に知ってるよ」

「な……」

ゲイルはすでに気づいていたのだ。自分たちが宇宙連邦治安維持局――ひいてはダラズの仕組んだ策略によってこの数奇な運命に巻き込まれた事を。だがそれでも、それを知ってなお二人は運命に身を委ねているというのか。

「そんな事はどうでもいい。俺たちは目的のために、あえて従っているふりをしているだけだ。連邦学術院や宇宙連邦治安維持局の思惑なんて、知ったこっちゃねえぜ」

「その目的とは何だ？　自分たちの肉体と精神をいいようにいじくられ、それすらどうでもいいという理由とは何ぞ？」

「お前が知る必要はない」

「ぐお……」

最も知りたかった質問を軽く一蹴されて呻くジークレイ。肉の塊のような体になっても、知的好奇心は未だ旺盛のようだ。

「それに危険な科学技術や科学者を狩るこの仕事も、俺たちにとっちゃ好都合なんだよ。何しろその技術を奪い、作った奴を消していけば、いずれ俺たちの敵になるものはなくなるからな」

「そ、それでは貴様らっ――！」

「お前の作った内燃機関はすでに俺の中にある。つまり、お前はもう用済みって事だ」

「なにぃ……」

サムは二本指を額に当てて軽く前に振ると、これ以上もう話す事はないとばかりにバーニアを噴かしてジークレイに突撃した。

有無を言わさぬフル加速で、狙うはもちろん剥き出しのジークレイの顔面。言うまでもなく短期決戦。一撃必殺を狙ってサムは飛ぶ。
「小癪な真似を。だがこれならどうかな？」
弱点を曝け出しているのは自覚していたのか、ジークレイはすかさず顔面を肉塊の中に埋没させた。あと少しというところで的が引っ込み、ゲイルたちは肩透かしを食らってそのまま一度通り過ぎる。
「クソ、やっぱり気づいていやがったか」
「気づかないほうがどうかしていますよ」
舌打ちとともに、虚空へと向けて伸びるパイプを大きく旋回する。再びジークレイに向かおうとするゲイルたちに、反撃とばかりの触手の槍が無数に伸びてきた。だが無重力の中を自由に飛び回るゲイルたちにとって、触手はもう脅威でも何でもない。向かい来る触手たちはことごとくサムの超振動ブレードでなます斬りにされていった。
「なら無理矢理引きずり出します！」
「頭を潰せば、俺たちの勝ちだ！」
サムは両腕を上に突き出し、二本のブレードを平行に構える。万歳をした状態のまま体を回転させ、一本のドリルとなってジークレイに体当たりを仕掛けた。
ブレードの先端が肉塊の表面に触れる。その先にはさっき沈んでいったジークレイの顔面――恐らく弱点があるはずだ。
だがブレードの刃は壮絶な火花を上げるだけで、一ミリも突き刺さりはしない。サムはさらに回転を上げるが、金属をひっかく音と火花が激しくなるだけで効果はまったく無い。
先に白旗を上げたのは、サムのブレードのほうだった。秒間一万回の振動に耐える超鋼の刃が、きんと高い音を立てて折れた。
「何と……これは……」
ブレードを失い、行き場のない振動がサムの体を弾き飛ばす。すぐさまブレードの振動をカットし、バーニアで姿勢制御を行う。折れたブレードの刃は、まだその身に超振動をまとったまま飛んで行

き、室内の壁に易々と突き刺さった勢いのまま飲み込まれていった。
「見た目はぶよぶよのくせに、やたら硬いじゃねえか」
「どうやら刃の当たる部分だけ組織の構成を変えたようですね。あれだけの図体で、意外と器用な事をします」
「何にせよ、これじゃあ奴の体内に入って顔面をぶん殴れねえぞ」
困りましたねえ、とサムが他人事のように呟く。いくら殴ってもすぐに再生し、中身を攻撃しようにも斬ろうが突こうが硬くてびくともしない。救いなのはジークレイの触手攻撃もこちらに通用しないのだが、そうなるともう睨み合いしかできない。だがこうしている間にも、ジークレイは景気良く星からエネルギーを吸い上げており、このままだと本当に星が涸れ果ててしまう。そうなると時間に追われている分、ゲイルたちのほうが不利だ。
「サム、ちょいと提案があるんだが」
「こんな時に何ですか……？」
緊張感のない声でゲイルが提案という言葉を使うと、否応無く不安がよぎる。今度は何をどこに投げるのか、という先読みまでしてしまうサムであった。
「内燃氣環のエネルギーでお前の表面にシールドを張って、奴の内部に突入できないか？」
予想に反してまともな提案である。しかし悲しいかなそのアイデアはすでにサムが心中で没を出したものだった。
無尽蔵に湧き出る内燃氣環のエネルギーを流用して、サムの表面にシールドを張ることはできる。そうすればあらゆる物を溶解し、自身のエネルギーに変えてしまうジークレイの体内に突入しても何とか耐えられるだろう。
けれどそれは、自らの手でジークレイに内燃氣環のエネルギーを提供している事と同じなのだ。貪欲にエネルギーを吸収する肉の塊に、さらに高出力かつ大量のエネルギーを供給したら、ジークレイの体がどういう変化をするか予想もつかない。
「それは……」

見す見す敵に塩を送り、しかも結果が予測不能な作戦は、さすがにサムもおいそれと了承する事はできなかった。
「できるのかできないのかはっきりしろ！」
「う……」
ゲイルに詰問され、サムは呻く。
「シールドを張る事は可能です。ですがあまりにも不確定要素が多く危険です。とても推奨できるものではありません」
「あいつにこれ以上エサをやるのは危険だって事は解かってる。だがここで手をこまねいているだけじゃ、事態は何も変わらねえ。むしろ時間が経つほど悪くなる一方だ。それともお前には他に何か名案があるのか？」
「……」
「一か八か賭けてみようじゃねえか」
「賭けるにしても、何か勝算があるのですか？」
「勝算？　んなものあるか。だいたい博打ってのは一か八か、のるかそるかだから面白いんじゃねえか」
この期に及んでまだ状況を楽しんでいる相棒に、サムはもう溜め息も出ない。これも精神を高揚させ、内燃氣環を効率よく稼動させる機能の副作用だろうか。
いや、いつだってゲイルの調子はこんなものだ。無駄にテンションが高く、無謀な賭けに進んでのりたがる根っからの熱血馬鹿。いくら宇宙連邦治安維持局やダラズに肉体や精神をいじられようと、彼の魂に刻まれたリズムは決して変わらない。人の手などで、魂までは変えられないのだ。
そしてその魂は、半分といえど確実にサムの中で息づいている。つまりは同じ人間。ゲイルはサムであり、サムはゲイルだ。同じ人間が同じ状況に身を置いたなら、とる行動はやはり同じ。ならばこの状況でゲイルが賭けにのるのなら、サムがのらないはずがない。
「たしかに、分が悪い賭けほど面白いものはありませんよね」
「だろ？　お前もそう思うよな」

ゲイルが笑う気配がする。いたずら小僧のような貌をしているのは、見なくてもわかる。何故ならサムにも表情があるのなら、ゲイルと同じ貌をしているからだ。

31

「それじゃ、いっちょ派手にぶちかますか」
「了解」
ゲイルの合図とともに、サムはバーニアを一気に噴かす。四基のノズルから放射される火柱がサムをもの凄い速度で前に押し出し、中のゲイルですら呻くGをかけた。
「っ……！」
そのあまりの速度に、ジークレイは反応すらできない。触手を打ち出す暇すら与えず、ゲイルたちはあっという間に肉の壁に手を着いていた。
「おおおおおおおおおっ！」
ゲイルが吼え、残像すら残さないほどの激しいラッシュが叩き込まれる。だが肉の壁はびくともせず、分厚い鋼板に電磁砲（レールガン）を連射するような音が響くだけだった。
「くはははははっ、無駄だ無駄。たかが打撃程度で、我が肉体はびくともせん！」
いくら強大なパワーを持つゲイルとサムでもサイズが違いすぎる。例えるなら象にパンチを打ち込む蟻。いくらやっても象は何も感じず、ほんの少し動けば蟻を簡単に踏み潰してしまうだろう。
「おおっ！」
だがそれはあくまで象と蟻の話だ。間断なく拳を打ち込み続けるゲイルたちに、そんなものは関係ない。砕けないのなら、砕けるまで殴る。それだけだ。
飽きもせずただ殴り続けるだけのゲイルたちに、ジークレイは「無駄なことを」と吐き捨てる。放っておいてもいずれ疲れ果てるかオーバーヒートしそうなので、あえて何もしないという余裕まで見

せているくらいだ。完全になめられているが、それでも打ち付ける拳の速度と威力はまったく衰えない。むしろ一秒ごとに、一撃ごとに増している。

「こなくそおっ！」

諦める様子など微塵もなく、ゲイルはパンチを繰り出し続ける。一点。ただ一点をひたすら打ち続けるが、拳はことごとく弾き返される。打ち込んだ数はすでに万から億になっているというのに、肉の壁は小憎らしいくらい健康なピンク色をしている。

「いい加減に諦めたらどうだ？　いくらやっても同じことよ。貴様にも常識というものがあるのなら、そろそろ解かっているはずだ。我が肉体を破壊するなど不可能だという事を」

ゲイルたちに向けたジークレイの言葉は、あくびを噛み殺しているようだ。自分の足元でひたすら拳を振るう小さな存在を見続けていると、飼育水槽の中で昆虫でも観察してるような気分になるのだろう。やれやれと吐く溜め息の中にも、呆れと哀れみを感じさせる。

いつまでこんな事を続けるのだろう――いい加減ジークレイが自分にまとわりつく小虫の観察に倦んだ頃、奇妙な違和感を覚えた。

これまで圧倒的な速度で回復と硬度付加を繰り返していた肉の壁に、ほんのわずかだが亀裂が入ったような気がした。

そんな馬鹿な事があるはずない。だがジークレイが気のせいだと思っていた肉壁の亀裂は、もはや見間違いや気のせいとは思えないほど大きな蜘蛛の巣状となってありありと浮かび上がっていた。

「あ、ありえん……」

いくら損傷した組織を回復させても、それ以上の速度で破壊されていて追いつかない。かつては鉄壁の防御を誇る肉の壁が、今では薄い氷のようにぱりぱりと音を立ててひび割れていっているではないか。

「常識？　不可能？」

フン、とゲイルが鼻で笑う。

「そんなもの、俺たちには関係ないんだよ！」

ゲイルは吼えると同時に、ヒビの中心に前蹴りを放つ。強烈な蹴りの一撃でヒビが一気に広がり、ゲイルたちは反動で一直線に真後ろへと下がった。これではせっかく入れたヒビが再び塞がってしまう。ジークレイはチャンスだと思った。

だが二人は失策を犯したのではない。サムはバーニアを噴かして後退にブレーキをかけると、陸上の短距離走のスタートに似た構えをとる。

「いくぜ、サム！」

「いつでもどうぞ」

ゲイルの合図とともに、サムはバーニアを一気に噴かす。自分の身長の倍以上の火柱を噴出し、サムはカタパルトから射出される戦闘機のように飛び出した。

「ぶち抜けえええええええええっ！」

前蹴りを放ったのは、最後の一撃のための助走だったのだ。

「必殺！　星砕き《スタークラッシャー》！」

ゲイルの叫びに嘘など無い。ひび割れた肉の壁に、バーニアの推進力によって加速された、惑星を砕くほどの威力の拳がぶち込まれる。

次の瞬間、肉の壁はガラスのように粉々に砕け散り、ゲイルたちは突進した勢いそのままにジークレイの体内に飛び込んだ。サムはすぐに内燃氣環のエネルギーを使って自身の表面に防護シールドを張る。

ジークレイの体内は、蟻頭たちと同様にどろどろとした体液に満たされていた。ゲイルたちはぬめりのある無色透明の体液に捕らえられ、思うように動けない。まるで溶けた鉛の中を泳ぐようで、進もうともがく手足はとても緩慢で、まるで進みはしなかった。

後ろを振り返ると、突入してきた穴はすでに塞がっている。こうなったら是が非でも核であるジークレイの顔面を破壊しなければ、脱出もままならない。シールドでジークレイに吸収されることは辛うじて防いでいるが、それもいつまでもつか分からないのだ。

「サム、バーニアはどうした？」
「それが、噴射口が体液で塞がれてしまいました。無理に噴かせると暴発してしまいます」
「クソ、性格と一緒でねちっこい奴だぜ」
苛立たしげにゲイルが吐き捨てる。二人が突入したのは、ジークレイの体の下層に当たる部分である。ここから中央部分にある核までは、まだ随分距離がある。辛うじて肉眼で捉えることはできるが、この粘り気のある体液の中を泳いでいくとなると、かなり骨が折れるだろう。
しかし今できる事は不恰好に泳ぐのみ。仕方なくゲイルたちは、スローモーションのような動きで体液をかき分けて進んでいった。

32

ゆっくりとした動きで、どれだけ泳ぎ続けただろう。動きが緩慢なので時間の感覚が狂ってしてしまうが、サムの体内時計ではまだ突入して五分と経っていなかった。

一向に前に進まない苛立ちと戦いながら、どうにかジークレイの顔面がそれと判る距離まで近づく。だが内部に侵入されたというのに、これまで何のリアクションもない事が二人の不安を煽る。しかし焦ったところでどうしようもなく、今はただ目標に向かって、溺れているのと大差ない格好で体液をかき分ける。

「奴の腹の中を泳ぐなんて、何だか奇妙な感じだな」

「まるでウィルスか細菌になった気分ですよ」

「気持ち悪い事言うなよ……。俺たちはばい菌か？」

サムの言葉に、ゲイルが心底嫌そうな顔をする。

「我々が彼の体内に侵入したウィルスだとすると――」

サムの動きが止まる。首を巡らせ、自分の想像が実現しているのを確認する。恐らく予想はしていたのだろう。大して驚くこともなく、淡々と事実を述べる。

「――それを退治するための免疫機能。つまり白血球のようなものが現れるのが相場というものですね」

センサーを使うまでもない。すでにゲイルたちは巨大な細胞体に取り囲まれていた。

「どうりで俺たちが中に入っても余裕ぶっこいてるわけだぜ」

「内部の防御にもよほど自信があるようですね。油断せずにいきましょう」

粘度の高い体液をものともせず泳いでくる巨大白血球もどきは、どこからともなく四方八方から湧いてくる。半透明な立方体に包囲網を敷かれ、ゲイルたちは進退窮まっていた。

「囲まれちまったな」

「猫の子一匹這い出る隙間もありませんね」
値踏みするようにふよふよと漂っていた細胞体の一体が、ゼリー状の体をサムの右足に触れさせる。ぷるんと音がしそうな接触の後、サムの右足はすっかり細胞体に飲み込まれてしまった。だがこれといって特に衝撃もない。ただまとわりつくだけの、とりもちみたいな役割なのだろうかと思ったのも束の間、細胞体に包まれた部分の塗装が見る見る剥げていくではないか。
「うお……っ！」
シールドを張っているはずなのに、白血球もどきはそれをものともせずにサムの右足を侵食していく。振り払おうとするが、体液の抵抗があって動きがのろい。おまけに細胞体は足首をすっぽりと包むように飲み込んでいるので容易に剥がれなかった。
右足に気を取られている隙に、他の細胞体もゲイルたちに取り付こうと集まってくる。体液に動きを阻まれ逃げる事も叶わないゲイルたちは、あれよあれよと全身を細胞体に取り込まれてしまった。
ゲイルたちの全身を包んだ細胞体たちは、それぞれが繋がって一つの塊となる。サムは巨大な泡の中に閉じ込められた形なり、全身を細胞体によって侵食され、たちどころに塗装が剥がれて装甲が剥き出しになった。
「ぐあああ……っ！」
「大丈夫か、サム！？」
深海の圧力や大気圏突入にも耐えられるサムのボディが、巨大白血球もどきによって食われようとしている。あと少しで核に辿り着けるというのに、このまま何もできずに食われてしまうのか。
「ゲイル、さすがにこれはまずいです」
動きを封じられ、じわじわと装甲を侵食されている今、さすがのサムも万策が尽きる。相棒の口から出た諦めの言葉に、ゲイルは発破をかけるように叫んだ。
「弱音を吐くんじゃねえ！　それでも俺の相棒か？」
「ですが……」

いくらゲイルが檄を飛ばそうが、サムの闘志は奮い立たない。思索するのは、どうやってゲイルだけでも助けようかという後ろ向きな考えだけである。だがゲイルはサムの心知らずか、驚くべき命令をした。

「俺を強制射出しろ！　射出時の勢いで、いけるとこまで行ってやる」

「何を言っているんですか。そんな事をしたら、真っ先に貴方が溶けてなくなってしまいますよ！」

やぶれかぶれとしか思えない命令に、サムは狼狽する。強制排出をすればゲイルだけでも細胞体から脱出できるだろう。だがシールドを張れないゲイルが外に出たところで、あっという間にジークレイの体液に溶解されてしまうだけだ。これはもう一か八かの賭けなどではなく、ただの自殺行為である。

「いいからやれ！　俺の命令が聞けないのか？」

「当然です。そんな作戦とも言えない無謀な提案、賛成できるわけないじゃないですか」

「だがこのままだと遅かれ早かれ同じ運命だ。言い争っている暇なんて無い。とにかく俺を信じろ！」

信じろ――何と説得力のない言葉だろう。ゲイルの日頃の行いの何をとれば、信じる事ができるのだ。いつもいつも非常識で身勝手で幼稚で予測不可能な行動のどこに、信じられる要素があるというのか。

しかし逆を言えばそんなゲイルだからこそ、不可能を可能にしてきた彼だからこそ、この状況を打破する何かをやらかしてくれるかもしれない。

「……わかりました。これより最大加速でバーニアを噴射し、暴発させます。うまく爆風でこの包囲網を突破できたら――」

「ああ、後は俺に任せておけ」

どこにそんな自信があるのか、ゲイルの声はいつもと同じように力強い。普段なら溜め息をつきたくなる声だが、今は不思議と心強

い。電子頭脳が弾き出した成功率は絶望的だが、何故かサムは不安を感じなかった。計算や確率など問題じゃない。サムはゲイルがやってくれると信じている。そしてゲイルはこれからやる事が失敗するなどとは微塵も思っていないはずだ。

「どうかご無事で」

「お前もな」

今生の別れではない。ただお互いの無事を願うだけの簡単な挨拶を交わすのは、すぐにまた会えるという確信からなのか、それともそうあって欲しいという願望なのか。

「準備はいいですか？」

「いつでもいいぜ」

それでは――とサムは四基のバーニアのノズルを最大に広げ、最大火力で噴かした。

33

「おおおおおおおおおおおっ！」

どちらともなく雄叫びを上げる。ゲイルは内燃氣環をフル稼働させ、サムに送り込むエネルギーをできるだけ高める。サムはゲイルから流れ込んできたエネルギーを増幅させ、ありったけをバーニアに突っ込む。

生産と増幅を繰り返し、蓄積を重ねたエネルギーが解き放たれる。だがノズルに入り込んだ細胞体の組織が噴射をせき止め、行き場を失った膨大なエネルギーが逆流しようとするが、後がつかえてどんどん詰まっていく。瞬く間に満タンになったバーニアのノズルは、濃縮されたエネルギーの貯蔵庫となっている。そして容量を無視して流れ込むエネルギーによって爆発した。

内部からの爆発によって、体細胞が弾け飛ぶ。その一瞬の隙間を縫って、サムはゲイルを強制射出した。

機体から脱出するパイロットのように、サムの中から放り出されたゲイルは、爆発と射出の勢いを足したわりにはゆったりとした流れでジークレイに向かって飛んでいた。

だがゆっくりであるがために、シールドも何もない無防備なゲイルの体は、まともに体液の侵食に晒されていた。せめてスーツのナノマシンが機能していれば、まだ侵食の速度も緩和されるであろうが、それすらないゲイルの体は火に放り込まれた普通の人間のようにただれていった。

「ぐあああああ……っ！」

苦痛の声を上げるが、目は決して目標から反らさない。瞬きもせず、ジークレイの頭部を睨みつける。

歯を食いしばり、手を伸ばす。その時、近づくのに気づいたジークレイがこちらを見た。

「無駄な足掻きを」

生首のように浮かびながら、ジークレイはゲイルを見て嘲笑する。体液の中、声が聞こえるのは彼がわざとそう操作しているからなのか。だとしたら趣味が悪い。

生首の蔑むような視線にも耐え、ゲイルは必死で手を伸ばす。だがあと少しで指先が触れるというところで体が止まった。推進力を持たないゲイルには、泳ぐしか進む道はない。ジークレイはそれを見越して体液の濃度を調整していたのだ。

「くはははははっ、惜しかったな。どれだけ大きなエネルギーを持とうが、それを活かせる肉体を持たねば宝の持ち腐れよ。内燃氣環など所詮、ひ弱な人間を強化するだけの補助動力に過ぎん。真のエネルギーというのは、私のように肉体そのものを改革するものを言うのだ」

器用に顔を巡らせ、ジークレイはゲイルの鼻先で嗤う。手が届かないのをいい事に、ゲイルの悔しがる顔を見て悦に浸っている。恨めしそうに睨むゲイルの視線ですら、彼には心地良く感じられるのだろう。

「あのS・A・Mと一緒に、貴様もこのままじわじわと私の中に取り込んでくれる。完全に溶けきるまで、せいぜい悔しがっておれ」

ジークレイは大声で笑う。見下した目と耳につく笑い声に、ゲイルは奥歯を噛み締める。

だがふっと口元が弛んだかと思うと、今度はジークレイに負けずとも劣らない大声で笑い出した。

「な、何だ？　とうとうおかしくなりよったか？」

げらげらと愉快そうに笑っているゲイルを、ジークレイは不気味に思う。笑っている間にもゲイルのスーツは溶けて穴が開き、皮膚が火傷のようにただれていく。迫り来る死の恐怖に、精神が崩壊したのだろうか。

「ああ、おかしいさ。おかしくって笑いが止まらねえ」

突如笑い声が止まる。一転して冷ややかな目つきと口調に変わったゲイルは、ゆっくりと右手を腰のポーチに差し込む。

「お前の体液はなかなかの粘度だ。さすがの俺でもこの中では自由に動くことはできねえ」
「それがどうした？　もはや貴様には私をその自慢の拳で殴る事も、我が体内から逃げ出す事もできんぞ」
「いいんだよ、ここまで近づければ」
にやりと笑いながら、ゲイルはポーチから右手を引き抜く。ジークレイの眼前に差し出された手には、虹色に輝くクリスタルが握られていた。
「そ、それは……！」
「見覚えあるか？　てめえが怪物を作る時に埋め込んだ核――惑星エネルギーを凝縮した塊だ」
ゲイルが軽く手に力を込めただけで、クリスタルに小さなヒビが入った。その様子にジークレイはこれまでの余裕が嘘みたいに慌てだした。
「ば、馬鹿者。貴様、それを爆発させたらいったいどうなるか解かっておるのか？」
「ああ、てめえのその汚いツラが吹っ飛ぶ。それ以外に何かあるか？」
「ききき、貴様だって無事では済まんぞ」
早口にまくし立てるジークレイだが、ゲイルは何だそんな事かと鼻で笑う。
「だからどうした？　俺の心配をするよりも、自分の心配をしろよ」
自分の命をかけて相打ちを狙っているというのに、ゲイルの言葉には何一つ焦りや緊張はない。殉教者のような冷えた目に、ジークレイは言葉にならない恐怖を感じて小さく悲鳴を漏らす。
「何故だ！　どうしてお前は平然としている。死ぬのが怖くないのか！？」
「死ぬ気なんてさらっさらねえよ。特にお前みたいないかれたおっさんと一緒なんて、ご免こうむるぜ」

「だったら――」
「だがな、てめえみたいな外道をのさばらせるくらいなら、こうしたほうがマシだって思っちまったんだよ」
「な……」
絶句するジークレイをよそに、ゲイルはゆっくりと握った手に力を込めた。
「待て！　待ってく――」
「あばよ、マッドサイエンティスト。あの世でジャガイモの澱粉でも濾過してろ」
皮肉たっぷりの貌でそう言うと、ゲイルはクリスタルを握り潰した。
次の瞬間、ゲイルとジークレイは壮絶な光の津波に飲み込まれ、肉の塊の中が一瞬で沸騰したように泡立った。

34

◆

簡素な部屋によく似合う、質素な机にサーシャは頬杖をついていた。机の上にはペンとインク、そして数枚の紙が両肘の下敷きになっている。小さな花瓶に挿された一輪の花が、辛うじてここが年頃の娘の部屋だと主張しているが、水を換え忘れて少ししおれている。

あれから三日経った。うるさいゲイルと存在感だけは大盛りのサムの姿が消え、サーシャの家だけでなく村全体が灯が消えたようになっている。彼女も村人たちも、未だに胸にぽっかりと穴が開いたような感覚が拭えないでいた。

「はあ……」

溜め息とともに、窓から庭を見やる。視線の先には納屋があった。サーシャはあの二人がまだ納屋で寝泊りしているような気がするが、それはあくまで錯覚であり、何度中を覗いても二人の姿はなかった。ただ二人が寝るために空けた空間だけが、名残りとしてあるだけだ。記憶とその空間以外に、彼らがここに居たというのを実感できるものはもう無いのだ。

サーシャはあの後もう一度火山の麓へ向かったが、二人が退治した怪物たちの死骸が綺麗に消えていた。たしかに彼女は見た。サムから箱の外に出してもらった時、最初に目に入った怪物たちの死骸の山、体液の河を。そのあまりにも酸鼻な光景に嘔吐したのをよく覚えている。だがあれだけの数の死骸が跡形もなく消失した。それこそ、自分が夢か幻を見たのではと錯覚するくらい綺麗さっぱりと。

だからゲイルとサムという奇妙な二人組が居たという確かな証拠は、何一つ無い。村人たちや自分が忘れてしまえば、彼らの存在はなかった事になってしまう。そのせいもあって、サーシャは納屋にぽっかりと開いた空間を埋める気になれないでいた。

どこからともなく現れて、怪物たちを退治して去って行った彼ら

は、結局何者だったのだろう。サーシャは今になって、もっと彼らの事を知っておけば良かったと後悔する。どうせ別れるのなら、余計な事は知らないほうがいいとあの時は思っていた。けれど村を――いや、世界を救った二人の事をそのうち皆が忘れてしまうのはあまりにも悲しい。そして村の人間以外には、彼らの功績が知られていないのはとても寂しい事だ。

本来なら国王から直々に感謝の言葉と勲章を賜り、国を挙げて盛大なお祭りをしてもおかしくない彼らの功績が、こんなちっぽけな村の中でひっそりと消えていって良いわけがない。けれどいくら思い出そうとしても、材料が足りない。悲しいくらい、彼らに関して知っている事が少なすぎるのだ。

いくら慙愧の念に苛まれようが、過ぎた事はもうどうしようもない。過去を変える事はできないし、記憶というものは時とともに薄れていくものだ。彼らの事を忘れないために、そしてもっと多くの人に伝えるにはどうしたら良いのか。サーシャは朝からずっとそればかり考えていた。

「はあ……」

良案の代わりに溜め息ばかり出る。もうすでに一生分の溜め息をついてしまい、今は来世の分の前借りをしているようだ。朝日を見ながら考えていたのが、今では太陽がすっかり真上に昇ってしまっている。そういえば、朝食がまだだったような。いや、この時間だともう昼食になってしまう。などと思考が脱線した矢先、ドアの向こうからリネアが呼ぶ声が聞こえてきた。きっと昼食の準備ができたのだろう。

ドア越しに食欲がないと伝えると、母親は「そう……」と一言だけ言って戻って行った。寂しそうな声にサーシャの心が少し痛んだが、今は本当に食欲がなかった。それに大量の料理を見ると、また寂しさに拍車がかかるので食卓には行きたくない。リネアは未だにゲイルがいた頃の量を作るのだ。彼はもう、いないのに。

「はあ……」

サーシャが箱に入れられた後、再びゲイルと会う事はなかった。吐くだけ吐いて胃の中の物をすべて出し尽くし、ようやく落ち着いたと思ったら、彼の不在に気がついた。そしてサムにその事を訊ねると、彼は黙って首を横に振るだけだった。

目の前が真っ暗になった。足が震えて立っていられなくなり、地面に両膝を着いた。涙が止め処なく溢れた。嗚咽が号泣に変わった。サムはただ、黙って立っていた。

どれだけ泣いていたかはわからない。とうに涙は涸れ果てて、腫らした目をこすりながら気がつけば村に戻っていた。隣にサムの姿は無かった。

「う……く……」

強く結んだ唇の間から嗚咽が漏れる。あれだけ泣いたというのに、思い出すだけで目が潤むのはどうしたことだろう。鼻の奥がつんとなり、堪えようとしても温かいものが頬を濡らす。両手で顔を覆っても、伝った雫が肘の下にあった紙にぽたぽたと落ちる。涙は次々と紙に染みを作り、サーシャはとうとう机の上に覆い被さって声を殺して泣き出した。

目が覚めると、空が茜色に染まっていた。泣き疲れて眠ってしまうなんて、まるで子供のようだ。

――なによ、子供扱いしないでよ――。

――胸がまったいらだから、ガキかと思っちまったよ。紛らわしいんで今度から、年齢と？こっちが胸です？って書いた札を首から下げといてくれ――。

たった一週間の間に何度したかわからないような、じゃれ合いのような口ゲンカがこんなにも懐かしいなんて。ふっと脳裏に浮かんだ光景に、サーシャはまた泣きそうになる。

忘れたくない。

忘れちゃいけない。

こぼれ落ちそうになる涙をぐっと堪えて顔を上げると、頬に紙が

貼りついていた。紙を剥がすと、頬の皮が引っ張られて痛かった。涙の跡でごわごわになった紙を恨みがましい目で見ていると、ふいに雷に打たれたような衝撃が走った。

「そうか。紙に書けばいいんだわ！」

天啓の如きひらめきに、サーシャは思わず大声を張り上げた。どうして今まで気がつかなかったのかと首を捻りたくなるが、今はそんな細かい事などどうでもいい。サーシャはさっそくペンを手に取った。

ペンをインクに浸け、いざ執筆という時にドアがノックされた。夕飯ができたので、リネアが呼び来たのだろう。

せっかくのやる気に水を注され、不機嫌な声を上げそうになる。だがそれよりも早く腹の虫が抗議の声を上げた。朝から何も食べてなかったので、体が食事を優先しろと言っているようだ。

二度目の長い腹の音に、サーシャは思わず笑みがこぼれる。そういえば、あいつはいつもお腹をすかせていたっけ。そんな事を思い出すと、はにかんだ笑顔が歪んでしまう。これじゃあいけない。頭を振って沈んだ心を振り払うと、サーシャは勢い良く椅子から立ち上がった。

まずはご飯を食べよう。腹が減ってはなんとやらだ。どうせまた母は料理を作り過ぎているのだろう。ゲイルには遠く及ばないが、今なら普段の倍は入りそうだ。お腹一杯食べて、それから彼らの物語を綴ろう。知らない人が読んだらおとぎ話と思われそうな、けれど知っている人は――少なくとも、この村の人々は真実だと知っている物語を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8222y/

特務捜査官ゲイル＆サム～俺たちは英雄じゃない

2012年1月6日19時47分発行